

上田市文化財報告書 第16集

# 下前沖遺跡

長野県上田市下前沖遺跡緊急発掘調査報告書

1981年3月

上田市教育委員会  
上田市川西地区土地改良区

# 下前沖遺跡

長野県上田市下前沖遺跡緊急発掘調査報告書

上田市教育委員会  
上田市川西地区土地改良区

## 序

上田市浦野地区は、延喜式に東山道の「浦野の駅」の名称がみられるように、古くから開けた地方として知られています。ことに浦野川や阿鳥川の川沿いには、多数の埋蔵文化財包蔵地が有在しています。

このたび、この地方を対象に農業基盤の整備の為に、構造改善事業が実施されることになりました。上田市教育委員会では、長野県教育委員会の指導により川西地区土地改良区と協議を行ない、浦野の下前沖遺跡、前沖内堀遺跡の発掘調査及び岡の久保遺跡の立会い調査を実施することにしました。調査は上田市文化財調査委員五十嵐幹雄先生を調査団長にお願いし、昭和55年11月13日から行なわれました。

この調査の結果、前沖内堀遺跡、久保遺跡からは遺構は検出されなかったものの、下前沖遺跡からは多量の縄文時代後期・晩期の石器、土器類が出土しました。また、縄文時代後・晩期の石組炉や集石遺構等も検出され、多大な学術的成果を収めることができました。

朝夕は特に厳しい冷え込みの中を調査は11月中旬まで懸命に続けられました。終始この発掘調査にご尽力いただいた調査団の先生方・調査にご協力いただいた地元の自治会の皆さん、さらに構造改善事業にあたられた川西地区土地改良区の関係者の皆さんに衷心より感謝を申し上げる次第であります。

昭和56年3月

上田市教育長 滝沢 石

## 例　　言

- 1 本書は昭和55年10月14日から11月20日にわたって緊急発掘調査をした。上田市浦里地区にある「下前沖遺跡」の報告書である。
- 2 この調査は上田市川西土地改良区から委託を受けた上田市教育委員会が委嘱した、五十嵐幹雄（上田市文化財調査委員・日本考古学協会会員）を団長とする上田市遺跡調査団によって行なわれ、またこの報告書の作製も同調査団が行なった。
- 3 遺構・遺物の実測図の作製は坂井美嗣、小林真寿、中川政信、宮原洋子、堀田雄二が行なった。
- 4 石質の鑑定には赤塙一巳氏の指導を得た。
- 5 本遺跡の資料は上田市立信濃國分寺資料館に保管されている。

# 目 次

## 序

## 例 言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 調査図の構成	1
第3節 調査日誌	2
第2章 位置と環境	4
第1節 下前沖遺跡周辺の自然的環境	4
第2節 下前沖遺跡周辺の歴史的環境	4
第3章 層 序	7
第4章 造 橋	10
第1節 炉 址	10
第2節 配石造橋	13
第3節 土 坡	14
第4節 墓 装	15
第5節 原石集中箇所	18
第6節 土器出土状態	18
第5章 遺 物	23
第1節 土 器	23
第2節 網代底	33
第3節 土製品	34
第4節 玉 類	39
第5節 石 器	65
第6章 おわりに	69

## 挿 図 目 次

第1図 下前沖遺跡の位置.....	5
第2図 A 2 ~ F 2 列地層断面図.....	7
第3図 試掘溝地層断面図.....	8
第4図 下前沖遺跡発掘範囲全体図.....	9
第5図 下前沖遺跡遺構全体図.....	10
第6図 炉址 1 .....	10
第7図 炉址 2 .....	11
第8図 炉址 3 .....	12
第9図 配石址 1 .....	13
第10図 土塚 1 .....	14
第11図 埋甕 1 出土状態.....	16
第12図 埋甕 1 実測図.....	16
第13図 埋甕 2 出土状態.....	17
第14図 埋甕 2 実測図.....	17
第15図 原石集中箇所.....	18
第16図 上器出土状態 1 .....	18
第17図 土器出土状態 2 .....	19
第18図 土器実測図.....	19
第19図 上器出土状態 3 .....	20
第20図 土器実測図.....	20
第21図 土器実測図.....	21
第22図 上器出土状態 4 .....	22
第23図 第I群土器.....	40
第24図 第I群・第II群土器.....	41
第25図 第II群土器.....	42
第26図 第II群・第III群土器.....	43
第27図 第IV群・第V群 a 土器.....	44
第28図 第V群 b · c · d 土器.....	45
第29図 第V群 e 土器.....	46

第30図 第V群c・f・g・h・i土器	47
第31図 第V群h・j・k土器	48
第32図 第V群g・VI群土器	49
第33図 第VI群土器	50
第34図 第VI群土器	51
第35図 第VI群土器	52
第36図 第VI群土器	53
第37図 第VI群土器	53
第38図 第VI群土器	54
第39図 細代底	55
第40図 土偶・土製品	56
第41図 土偶・土製品	57
第42図 上製品	58
第43図 土製品・小型土器	59
第44図 土製耳飾	60
第45図 土製耳飾	61
第46図 土製耳飾	62
第47図 土製耳飾	63
第48図 土製耳飾・土製円板・玉類	64
第49図 石鎌・尖頭器・石錐	74
第50図 打製石斧・横刃形石器	75
第51図 磨製石斧	76
第52図 磨石	77
第53図 石鍤・凹石	78

## 表 目 次

土製耳飾一覧表	37
土製円板一覧表	38
石鎌一覧表	70

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 発掘調査の経過

昭和55年9月30日上田市役所川西支所に於いて第1回打合せ会があり地元から、國場整備工事委員長多田忠正氏、上田市構造改善課、上田市教育委員会、調査団が出席し下前沖遺跡を発掘調査することに決まった。

その後第2回目の打合せ会が行なわれ、10月14日、調査の具体的準備に入り、表面採集により調査対象地を決め、試掘坑を5箇所に設定し、試掘を行なった。

その結果、約324m<sup>2</sup>を調査区域とし本格的な調査に入り、11月20日現場での全ての調査を終了した。  
（五十嵐幹雄）

## 第2節 調査団の構成

調査団長 五十嵐 幹 雄 （日本考古学協会会員・上田市文化財調査委員）

調査主任 中川 政 信 （長野県考古学会会員）

調査員 塩 入 秀 敏 （日本考古学協会会員・上田女子短期大学講師）

〃 児 玉 卓 文 （長野県考古学会会員・上田染谷丘高等学校教諭）

〃 宮 原 洋 子

調査補助員 小 林 真 寿 （長野県考古学会会員・長野大学考古学研究会）

〃 坂 井 美 瞰 （長野県考古学会会員・長野大学考古学研究会）

〃 西 沢 浩 （長野県考古学会会員・明治大学生）

事務局長 小 林 三 男 （社会教育課長）

事務局次長 小 山 幸 （文化係長）

事務局 倉 沢 正 幸 （文化係主事）

〃 川 上 元 （上田市立博物館庶務学芸係長）

〃 林 和 男 （上田市立信濃国分寺資料館学芸員）

### 調査協力者

（学生） 和泉直樹

（地元） 大井文雄・池田丑正・上西清信・上原賀一郎・大井忠三郎・木藤栄・木藤久雄・窪田儀人・古平慶治・小林義一・小山和宏・小山久雄・小山寛・小山勝・桜井藏寿・高川嘉一郎・竹村和夫・多田忠正・林利雄・牧島牧吉・水出幸・宮沢宇一郎・森井豊作・山本喜三郎・市川固・市川庄吉・岡田宗四郎・西沢千徳・堀部七左エ門・木藤澄江・藤沢みさ子・五十嵐芳子・中川恭子

### 第3節 調査日誌

昭和55年

- 10月13日（月） 発掘調査会議、及び道具類の運搬。
- 10月14日（火） 晴 後雨 下前沖遺跡の調査開始、テストピットNo.1～4を設け、掘り下げる。No.1よりミニチュア上器、No.3より埋甕、各テストピットより剥片石器・石鏃・土器片多数出土。
- 10月15日（水） 晴 下前沖遺跡テストピット内検出と共にブルトーザーによる表土削除作業始める。前沖内堀地区試掘。
- 10月16日（木） 晴 前沖内堀遺跡の試掘は、遺構の確認なく終了する。下前沖遺跡表土削除作業続行。テストピットNo.5を設定、掘り下げる。表土削除作業後18m×18mの調査区域を設定、3m×3mを1グリッドとし、36グリッドを設定する。
- 10月17日（金） 晴 グリッド設定及びセクションベルト4本（東西2本、南北2本）設定。C-3～4、D-3～4グリッドを掘り下げ。土器・石器片多数出土。
- 10月18日（土） 晴 C-1～4、D-1～4、E-2～4グリッド掘り下げる。
- 10月19日（日）～10月20日（月） 雨 作業中止。
- 10月21日（火） 雨 雨水排水作業、B・M設定。
- 10月22日（水） 晴 E-1～4、F-1～4、B-3～4グリッド掘り下げる。
- 10月23日（木） 晴 A～F列グリッド及び区域外掘り下げる。E-5より耳栓、B-3より石槍、D-5より石錐など遺物多数出土。
- 10月24日（金） 晴 A～G列グリッド掘り下げ。東側区域外より石棒出土。出土遺物多数。
- 10月25日（土） 雨 作業中止。
- 10月26日（日） 晴 遺構検出作業。
- 10月27日（月） 晴 B～F列グリッド遺構検出。各グリッドとも出土遺物多数。E-1・F-1には甕、E-2・F-2より石剣状石棒出土。南側区域外に土層確認用トレチニ設定・掘り始める。
- 10月28日（火） 晴 遺構検出作業、E-2グリッド内石棒出土状況実測。
- 10月29日（水） 晴 遺構検出作業、D-3内に炉址あり。セクションベルト（2・4・D）断面実測。
- 10月30日（木） 晴 遺構検出作業。セクションベルト（D・B）及びテストピットNo.3（断面・埋甕）実測及び写真撮影。
- 10月31日（金） 晴 遺構検出作業。
- 11月1日（土） 晴 遺構検出作業、グリッド杭の打ち直し。遺構確認面1:20で全面実測開始。
- 11月2日（日） 晴 遺構検出作業及び全面実測続行。

11月3日（月）晴	遺構検出作業、全面実測。C-6・D-6より石冠、F-5より土偶、D-6・B-6より磨製石斧など遺物多数出土。
11月4日（火）晴	遺構検出作業、全面実測。遺構検出面上遺物を取り上げ始める（耳栓・石錐・石錐・土偶・石球・土器片他）。
11月5日（水）晴	A～Eグリッド遺構検出作業。全面実測及び遺物取り上げ続行。
11月6日（木）晴	D-4、E-4グリッド再掘。各グリッドの清掃及び写真撮影。全面実測及び遺物を取り上げる。
11月7日（金）曇	遺構検出及び実測、B-1よりスタンプ型土製品出土。各グリッド写真撮影。
11月8日（土）曇	遺構検出及び実測。A-6より土偶の頭部出土。
11月9日（日）晴	遺構検出及び実測。遺物取り上げ。西側区域外にグリッド（A-1'・2'～F-1'・2'）を設定、掘り下げる。浦里地区見学会を行う。
11月10日（月）晴	区域外グリッド掘り下げる。遺構掘り上げ始める。
11月11日（火）晴	区域外グリッド掘り下げる。F-2'に炉址が検出される。この炉址は二重の石囲みになっている。遺構の掘り上げ・実測及び写真撮影。
11月12日（水）晴	遺構の掘り上げ及び実測。遺物取り上げ。遺構確認面全面実測終了。
11月13日（木）晴	遺構の掘り上げ・実測・写真撮影。
11月14日（金）晴	遺構の掘り上げ・実測及び写真撮影。任意区域を設定、剥片石器を取り上げる。
11月15日（土）晴	遺構の掘り上げ・実測・写真撮影続行。遺物の取り上げ。D-1より磨製石斧、F-2より耳栓出土。
11月16日（日）曇	遺構の掘り上げ、実測及び写真撮影。
11月17日（月）曇	遺構の掘り上げ・実測及び写真撮影。遺跡（調査区域）全体の実測。南側区域外層序確認トレンチ断面実測。C-2より磨製石斧出土。
11月18日（火）晴	遺構の掘り上げ・実測・写真撮影。
11月19日（水）晴	遺構の掘り上げ・実測・写真撮影。手掘の小型台付鉢出土。
11月20日（木）晴	現場発掘調査まとめ。道具類の運搬。

昭和56年1月～3月末遺物整理及び発掘調査報告書作成。（於）信濃国分寺資料館

〈宮原洋子〉

## 第2章 位置と環境

### 第1節 下前沖遺跡周辺の自然的環境

下前沖遺跡のある上田市浦里地区は千曲川左岸にある川西平地のはば中央に位置している。川西平地は塙田平と川西丘陵をはさんでその北側にあり、青木村を谷頭とし東方へ楔状に展開する平地で、東西約7km、東端の吉田地籍で南北の幅1.5kmの規模ということができる。北側には東から三ヶ頭山地、戸綱山地と続き、西側に子檜嶺岳山地が、また西南部には滝山山地があり、その東部は川西丘陵となって三方を囲繞し東方へ開けた盆地状平地である。

この平地には西方青木村から発する杏掛川・田沢川が合流して東流する浦野川が主流となつており、途中阿鳥川の押出しによって平地の南端を流れ、出浦区東側で阿鳥川と合流している。それ以後は北へ向きを変え、室賀川と合流して北側山麓を流下して産川と合流し、やがて千曲川に流入している。川西平地はこれらの諸川による扇状地と沖積地とからなり、地味肥沃で農耕に適していたが、水利に恵まれないため古くから溜池や用水堰を開設し水田地帯として発展をしてきた。

下前沖遺跡は上田市から松本市に通する国道143号線沿いの出浦区の東端にあり、阿鳥川が浦野区中央部（内堀地籍）から北へ蛇行し、浦野東橋の下流で再び東南方向へ蛇行する西南段丘上の水田地帯に位置している。遺跡周辺の地形・地質は浦野川・阿鳥川の氾濫による川河床が阿鳥川の侵食によってできた河成段丘である。したがって、河床礫等がそのまま残っていることが多い状態である。(1)

〈五十嵐幹雄〉

註(1) 赤塙一巳氏の御教示による。

参考文献 (1)「上田小県誌第四卷自然編」上田小県誌刊行会

(2)「上田市の原始・古代文化」上田市教育委員会

### 第2節 下前沖遺跡周辺の歴史的環境

下前沖遺跡の歴史的環境は青木村と上田市の旧川西村、すなわち浦里・室賀・泉田地区を含めた川西地区の立場から考察することにする。

川西地区には旧石器時代の遺跡及び遺物の発見はいまだ知られていない。縄文時代早期がその初現であり、中期以前として青木村の湯ノ平遺跡において格円・山型押型文土器及び諸磯A・B式土器、地獄沢遺跡で諸磯C式、下島式土器が知られている。上田市分では和合遺跡で上原式、谷鬼遺跡で茅山・有尾式土器の出土などが知られているにすぎない。しかし、中期以降の遺跡は多く、青木村で38遺跡、浦里・室賀地区で各10遺跡、小泉地区で13遺跡が知られている。



第1図 下前沖遺跡の位置

これらの遺跡のうち石器の単独発見地が多いことと、今まで知られなかった後・晩期の遺跡が昭和40年代から知られるようになってきていること(1)は特記すべきことであり、下前沖遺跡もその一例とさうことができる。

弥生時代の遺跡は、青木村8遺跡、浦里地区1遺跡、室賀地区3遺跡、小泉地区15遺跡で、上田市分は計19遺跡が知られている。これらの遺跡のうち大部分の遺跡は、縄文時代または、土師器・須恵器などの各時代との複合遺跡となっている。また、箱清水式土器が出土する弥生時代後期の遺跡がほとんどである。

古墳時代の遺跡は泉田地区に18基あったことが知られているが、横穴式石室の個壁の一部だけを残す3基のほかは壊滅している。しかし、室賀地区にある神宮寺古墳は石室が開口しているが、横穴式石室をもつ円墳で保存状態は良好である(2)。浦里地区には下前沖遺跡の西方山腹に浦野古墳があり、径7.35m高さ3.5mの円形埴内に奥行5.5m、幅2.45m・高さ1.8mの横穴式石室が良好な状態にある(3)。また、青木村には塚穴古墳があり、青木村教育委員会によつて詳細調査され、その後保護対策がとられている。この塚穴古墳が浦野川沿岸最上流に位置している(4)。

6世紀の末期、律令国家としてほぼ完成したと言わた頃、国内に五畿七道ができ、その中に東山道がある。延喜式兵部省によると東山道は美濃から神坂峠を越え伊那谷に入り、天竜川に沿って北上し松本平に出、錦織から保福寺峠を越え小県郡に入っている。そして川西地区の浦野駅から日里駅を通り、信濃国府に至ったといい、川西地区がはやくから古代主要交通路となっていたものと考えられる。万葉集十四の東歌にある「彼の児らと宿すやなりむはたすすき浦野の山に月片寄るも」とある浦野は、下前沖遺跡のある浦野区であろうなどとも言われる。また日本三代実録四年三月五日の条にある「信濃國正六位上馬背神」は、浦野区にある馬背神社であるとも言われている。平安時代の和名抄には小県郡に七郷があり、そのうち跡部郷は青木村本宿周辺であり、福田郷は泉田地区の福田区周辺であったと推定されている。また、延喜式神名帳にある子擅嶽神社は、青木村にある子擅嶽神社だと言われている。土師器・須恵器を出土する平安時代の遺跡は、青木村に20遺跡、浦里地区に15遺跡、室賀地区に17遺跡、泉川地区に20遺跡の合計72遺跡がある。

（五十嵐幹雄）

#### 註

註(1) 長野県史刊行会「長野県史第1巻」(1981)

註(2) 上田市教育委員会編「神宮寺古墳調査報告書」(1974)

註(3) 浦野郷土史研究会編「郷土の文化財」(1976)

註(4) 塚入秀敏「塚穴古墳の発掘調査概報」上田・小県24(1975)

参考文献 (1) 黒坂周平「川西地方における地名と歴史」川西郷土史研究会(1973)

(2) 上田小県誌刊行会編「上田小県誌第一巻歴史篇」(1980)

(3) 上田市教育委員会編「上田市の原始・古代文化」(1974)

### 第3章 層序

下前沖遺跡は上田市油野字下前沖に位置し、本遺跡の立地する川西地区は、浦野川と彦川の影響により盆地性平野を形成している。下前沖遺跡は、遺跡の北側を西から東へ流れる阿鳥川により浸食された第2河成段丘上につくられ、阿鳥川の左岸には766mの標高を有する秋葉山がそびえたり、段丘上の南側は油野平野が展開する。遺跡の標高はおよそ489mを測り、遺構向は南から北側の段丘端に向かいながら傾斜している。

#### 層序

第I層：灰褐色土層、耕作土である。粒子は若干細かく弱い粘質をおびる。

第II層：橙色土層、川の溶脱層である。

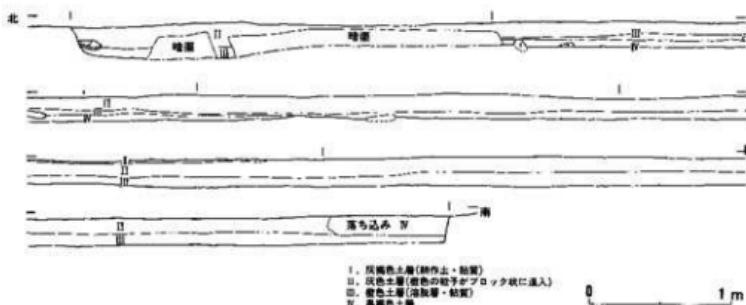
第III層：灰褐色土層、橙色の粒子がブロック状に混入する。

第IV層：黒褐色土層、大小の礫を多く含み遺物を包含する。粘質は比較的強い。

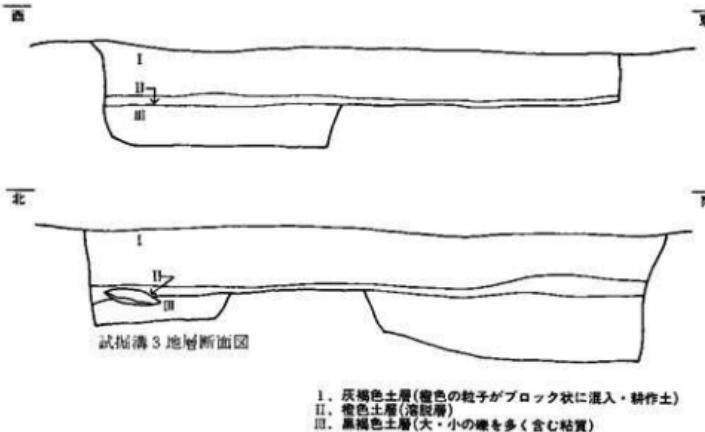
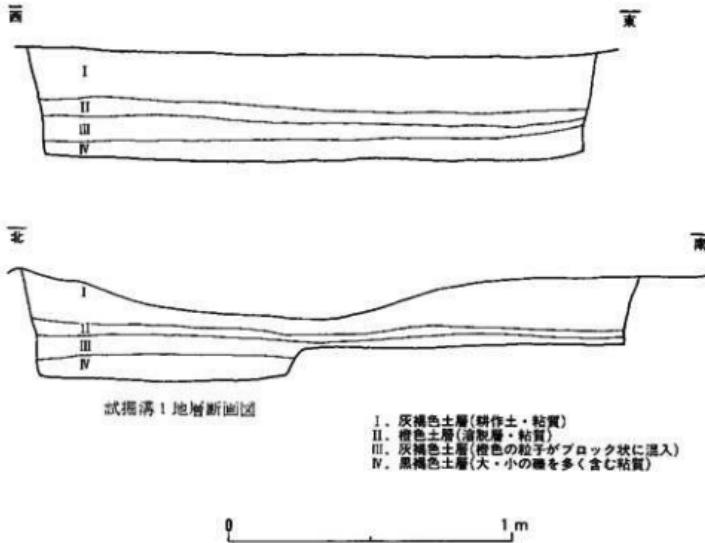
層位関係は「試掘坑1」で示す。この図は遺跡南側のテストピットの地層図であり、遺構各面の開田時の影響によって第II層と第III層が逆になる部分もあり、傾斜地下方（北側）にいくほど逆になることが観察された。

遺構（遺物包含層）は第IV層中に確認される。

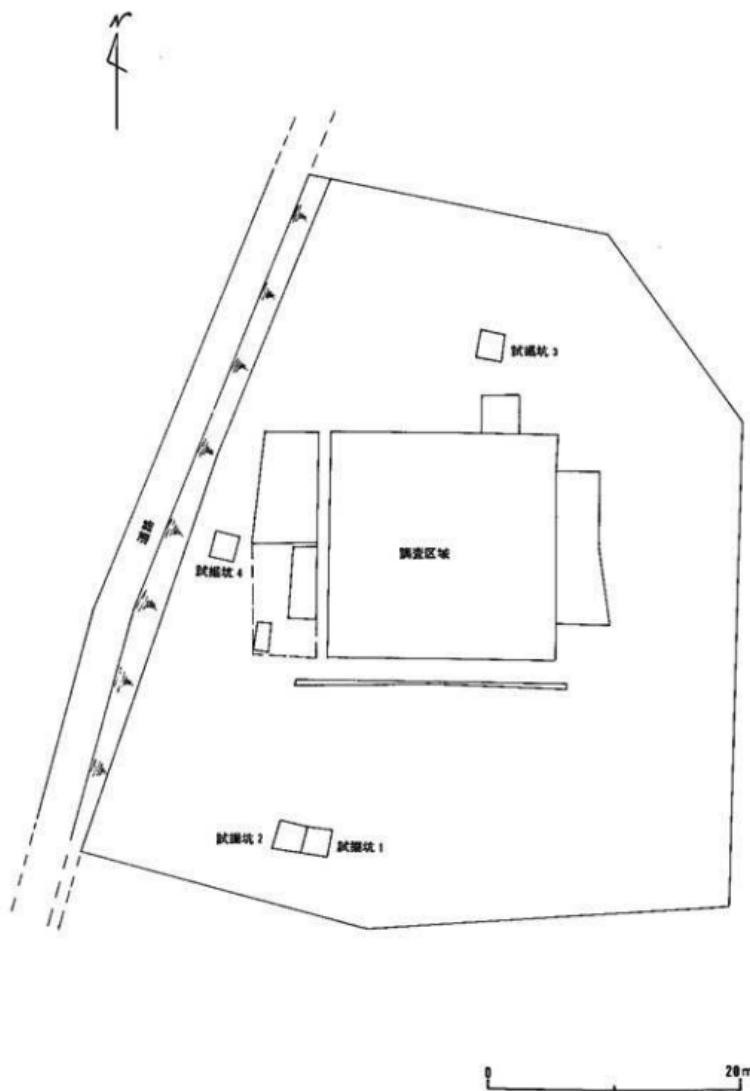
（中川政信）



第2回 A2 ~ F2列地層断面図



第3図 試掘溝1・3地層断面図



第4图 下前冲遗址发掘范围全体图

## 第4章 遺構

下前沖遺跡での遺構検出面は確断に覆われた状況を呈し、遺物包含層は黒褐色土層のみに認められた。

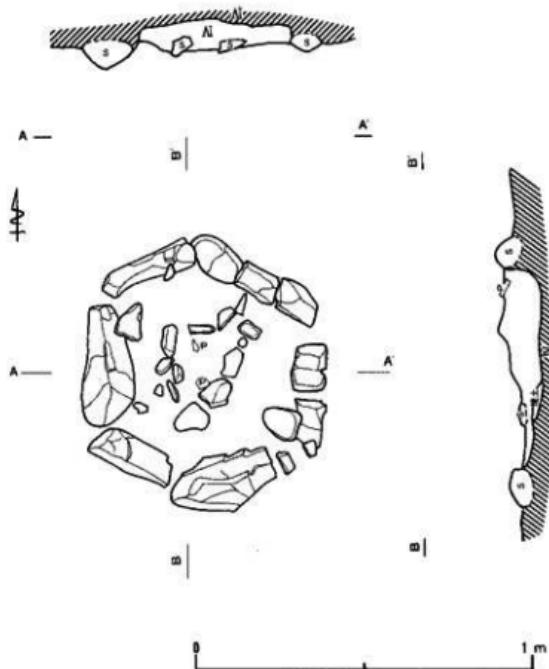
確認された遺構は縄文時代後期後葉～晩期中葉の炉址3基・配石址1基・土塙1基・埋甕2個である。また遺物は出土しても遺構としての確認が難しい地点を、土器出土状態として4ヵ所記載した。

### 第1節 炉 址

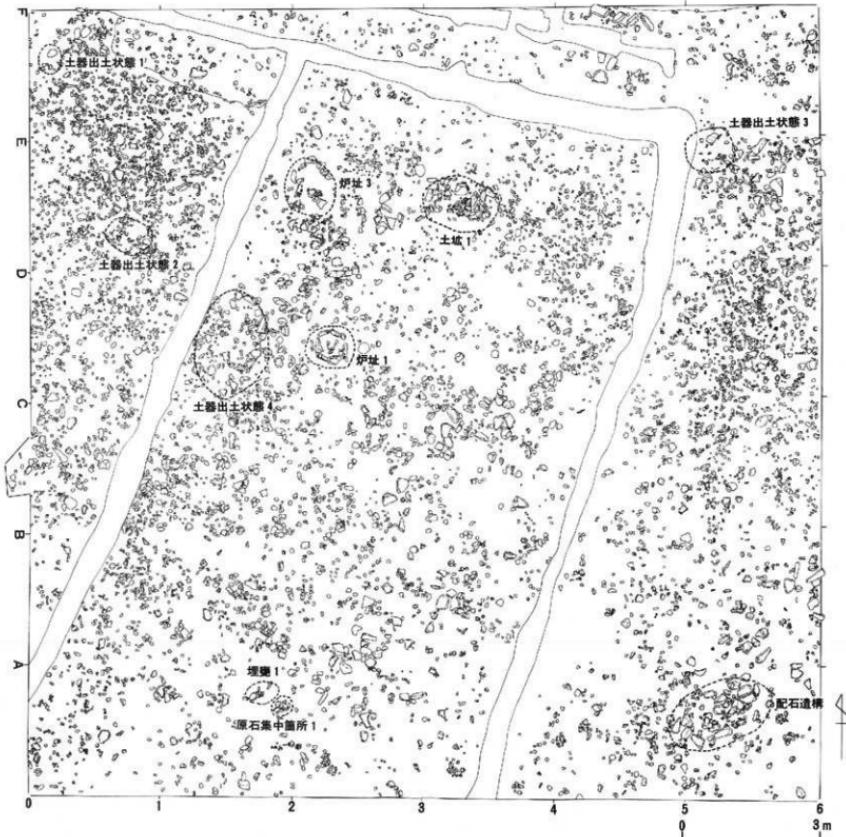
#### 炉址1（第6図、図版2）

本址は、調査区域西北部D-3グリッドの疊によつて覆われた黒褐色土層内に検出された。なお、この遺構は炉址であるが疊堆積層中の検出であり、柱穴及び住居址としてのプランが確認できなかつたため、住居址内のものか外のものかは判然としなかつた。

しかし炉址を中心におそらく「平地式の住居址」が推定され、内部に構築された炉との推測をしたい。炉の形態は径35cm×15cmの不整長方形の河原石を6個用いて内法南北80cm×東西70cmの六角形に組む。組まれた石の炉址内側に面した部分は火に当たり、赤褐色に変色し非常にもろい状態を呈する。炉址内部は約10cmほどの掘



第6図 炉址1



第5図 下前冲道路発掘全体図

り方をし、層位は I 層淡黒褐色土層(石、骨片を含む)、II 層赤褐色(焼土)に分かれているが、II 層の焼土は炉内北側に 20cm×18cm の長方形状に若干残っていた程度である。出土遺物は、無文の縄文土器片と隆帶にキザミ目を付けた縄文後・晩期に比定される土器片が出土しただけである。

〈中川政信〉

炉址 2 (第 7 図、図版 2)

西側拡張区、西北端第Ⅳ層黒褐色土層中において検出されたもので、長径約 40~10cm 程の河原石 12 個を東南方向やや東寄りに、コの字状に 2 重に巡らしており、東南方向には長径 30cm の台形を呈する鉄平石 1 枚が敷かれている。規模はセクション A、A' において 1.1m、セクション B・B' において

も 1.1m と同値であり、炉石上部より最深 15cm の深さをもつ。焼土はほぼ中心部に直径 30cm の不正円形に広がっており、最大 5cm の堆積が認められる。出土遺物は土器 2 点で、うち 1 点は焼土上から検出された無文粗製土器の細片であり、もう 1 点は綾杉文が施された深鉢の胴部片である。

〈小林真寿〉

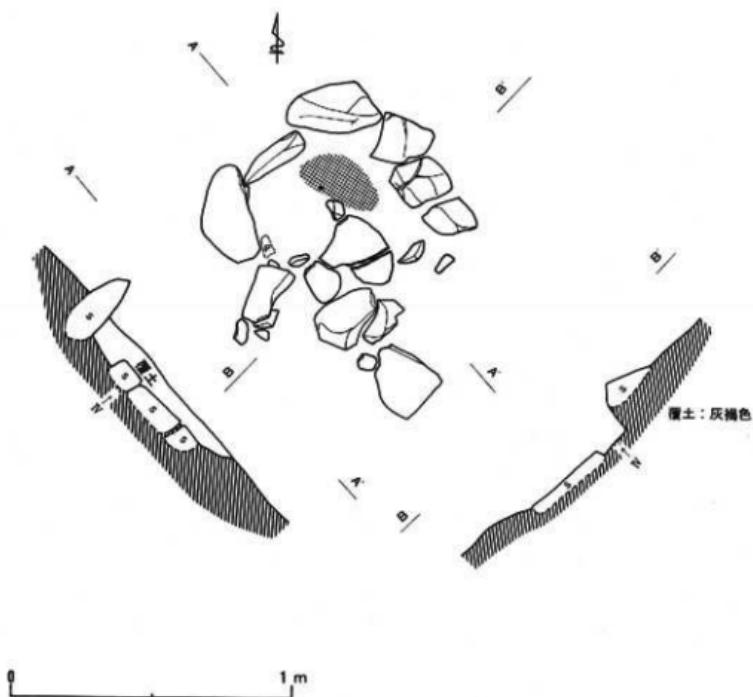


第 7 図 炉址 2

炉址3（第8図 図版3）

E3グリット北西端、第IV層黒褐色土内において検出されたもので、炉石の1つはE2グリット内にも及んでいる。長径35cm×短径15cm～長径15cm×短径10cmの河原石10個をコの字状に巡らしており、北西側からコの字東端までの6個は反り気味に、あるいは内傾しながら立てられており、又炉内に倒れ込み3片に割れている石も本来は立てられていたと考えられる。規模は東西95cm、南北98cmとほぼ同値であり炉石上部から最大25cmの深さがある。焼土は炉内北隅に楕円形に広がっており最大8cmの堆積がみられる。出土遺物は皆無であったため帰属する時期は不明である。

（小林真寿）



第8図 炉址3

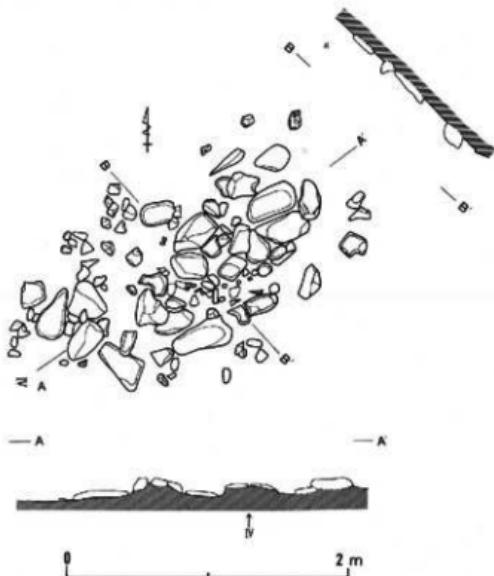
## 第2節 配石遺構

配石址1（第9図、図版4）

本址は調査区域南東部の隅A-5～A-6グリット内に位置する。配石はカドの磨滅した約38cm×20cmの河原石を長軸2m×短軸1.12mの長方形に約22個配置し造られている。長方形に配石される河原石の縁周は西側と南側の縁石箇所を鍵状に残すのみで、北側と東側の縁石はほぼ壊れ縁石が無い箇所がある。縁周の内側には約10個の石が配置されるが、この配石されたもののうち、東隅に38cm×18cmの長方形の石2個が並べて置かれ、2個の石の周辺には頁岩の打製石器、フレイク片、黒曜石のフレイク片が若干ちらばり、石の上面にはたたきつぶしたような打撃痕が残っている。この様な状況から作業台のように考えられる配置である。この部分から北側、B-6グリット内には一面に黒曜石のフレイク片、作りかけの石器などがちらばっていた。このように観てみると配石址1としたこの遺構は①長方形に縁石を組んだ配石と、②「作業台」として機能した箇所があり時間的には①が造られそれを利用したことから②になっていくのではないかと推定される。

配石下は縁石内の石を抜いて掘ってみたが、黒褐色土層のみで、地層の変化は確認できなかった。出土遺物は無文の縄文時代後期後半・晚期の土器片とチャート・頁岩・黒曜石のフレイク片などである。

〈中川政信〉

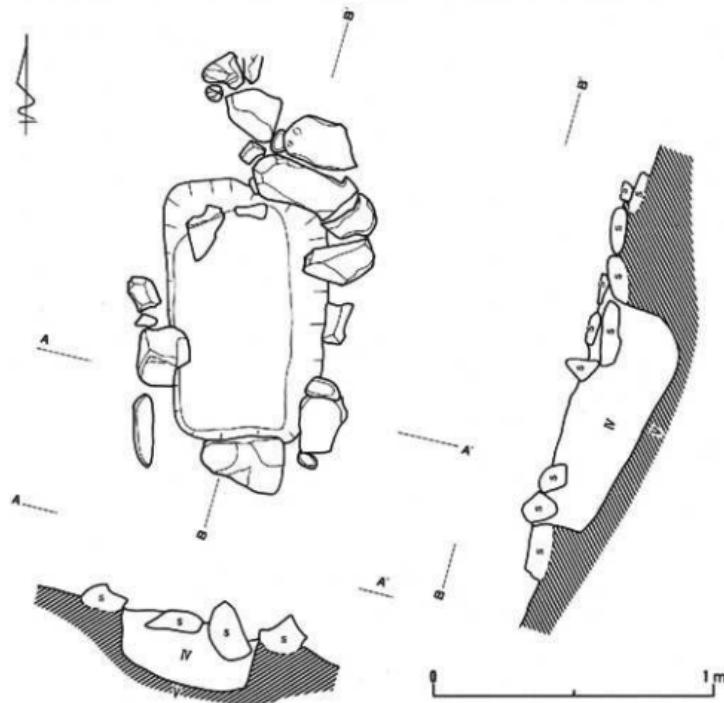


第9図 配石址1

### 第3節 土 塚

土塚1 (第10図、図版3)

E 4 グリット中央西よりに位置する。東西0.8m×南北1.5mの配石下から検出された土塚である。配石は30×18cm~10×15cmまでの河原石45余りを使用し、長軸N-Sを指す長方形を呈するもので配石北西端には磨製石斧の基部があり、配石や中央部から西へ4mの所には第43図318土器、又南端中央より南へ5cmの所からは土製耳飾が出土している。土塚は配石北端中央の石から南へ1.1mの石の下部より検出され、配石同様長軸はN-Sを示し東西57cm南北90cmをはかる隅丸長方形を呈するもので床は北に傾斜しており最大39cm最少17cmの深さをもちⅣ層下に位置する茶褐色土(Ⅴ層)に達している。土塚内は全て黒褐色土で層位的にとらえること



第10図 土塚1

はできなかった。出土遺物は縄文後期後半の粗製土器が大半を占め、その他注口土器も2点みられるが全て破片である。又石鎌も1点出土しており総量はコンテナ1号程度でかなり多量の出土である。その他炭と骨片も多量に含まれていたが調査区全面にわたり骨片が散布している状態の為、本来この土壇に伴うものとは言い切れない。

（小林真寿）

## 第4節 埋 蔵

埋藏1（第11・12図、図版5）

調査区城西南部、A-2グリット内に位置する。埋藏1は検出面である黒褐色土層（礫を含む）内より出土する。出土状態は口縁部を上にし、かつ上部に石を配置したように置かれる。埋設の深さは検出面下約15cmであり、器高36cm、口径30cmで底部が欠損する無紋の變形土器で胸部が折れる様に重なって出土する。覆土は骨片混じりの黒褐色土で、掘り方などは同一層内の為明瞭に区別して観察することができない。また特に遺構と認められる範囲内より他の遺物の作出がなく時期等捉えられないが、口縁部がながらに内側する型態から見て縄文晩期かとも思える。

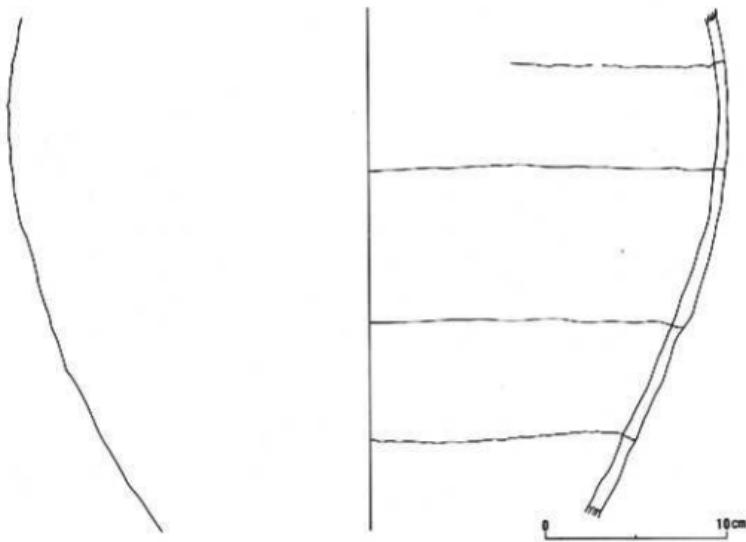
埋藏2（第13・14図、図版5）

埋藏2は、調査区城北側にF4-F5グリットより6m離れた段丘縁の近くに掘った2m×2mの試掘溝3内より検出される。検出の層位は黒褐色土層で、この層の上面より掘り込んでいる。形態は無文の粗製土器で變形を呈する。内面淡褐色外表面黒褐色を呈しやや軟質である。出土状態は正位に埋設され、内部には骨片（細片）を含み黒褐色土層が入る。骨片は變形土器の外側にも点在した。また、何の骨片かは細片の為確認できなかった。正位に設置された變形土器は底部が意識的と思われる状態にはほぼ水平に傾いてあり、口縁部は耕作時に損壊したのか不整に欠けていた。層位は黒褐色土層内での検出の為掘り方の確認はできなかった。また、埋藏としての内在的な意味は、2m×2mという制約された場所以外を発掘できずここでは課題として取り上げられない。時期は縄文時代後～晩期に比定される。

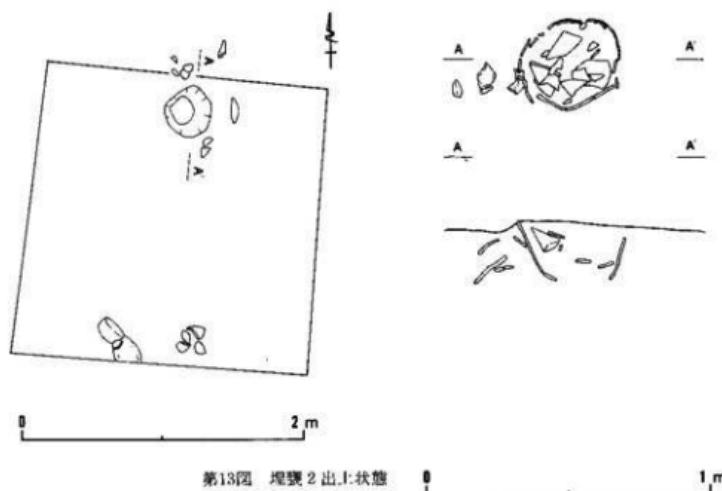
（中川政信）



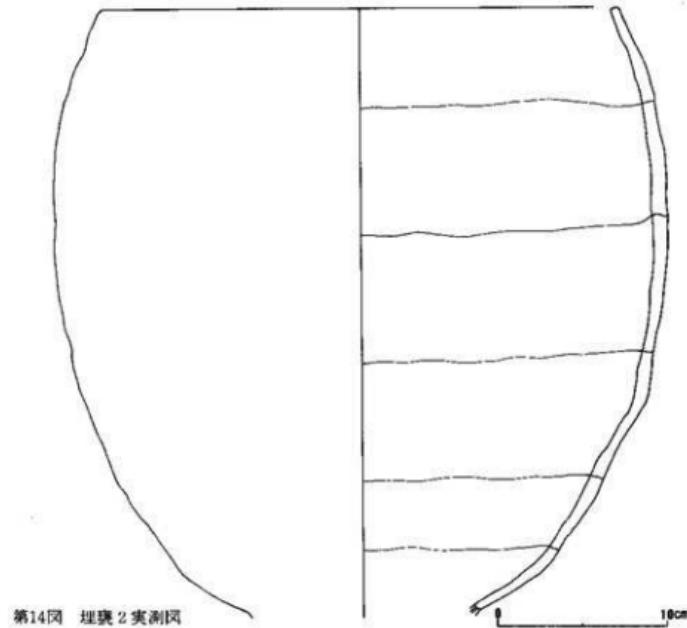
第11図 埋葬1出土状態



第12図 埋葬1実測図



第13図 墓葬2出土状態



第14図 墓葬2実測図

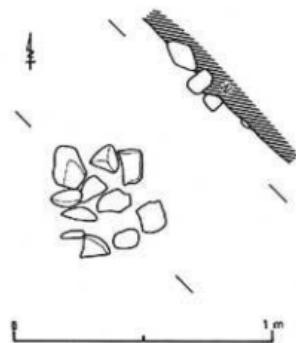
## 第5節 原石集中箇所

原石集中箇所1（第15図、図版4）

集中箇所は調査区域南側A-2グリット内黒褐色土層直上において検出される。

11個の石（内、原石は頁岩が3個）で、隋円状に囲んだものである。原石以外の石は色々な自然石を使う。原石は石核状に剥離されるが剥離方向は一定しない。これは遺構全般に渡って出土する打製石器を造るものではないかと思われる。また集中箇所に伴なう遺構址は確認されなかった。伴出する土器は伴なわざ時期は不明であるが、縄文時代後期後半から晩期中葉にかけてのものである。

（中川政信）



第15図 原石集中箇所

## 第6節 土器出土状態

土器出土状態1（第16図）

本土器はF-1グリット北西端、第IV層黒褐色土（礫含む）内において検出されたものであり第36図248の土器である。出土状態は底部を北に向か横に倒れての出土であり、検出面より5~1cm埋没していた。地圧のため、上部となつた胴部は土器内に大小の礫とともに崩れ落ち程が欠損しており口縁部は全て欠けていた。本土器が現状を維持していることは間違いないと思われるが、周辺の礫の除去がむずかしく遺構を検出し得なかった。時期は縄文時代後期後半、加曾利B式の、粗製の浅鉢と考えられ、肩部には対角線上に貼付けられた4コの半球状の



第16図 土器出土状態1

突起があり、突起中心部は直径4mmほど刺突よりくぼめられている。胎土は粗く5mm大の石粒を多量に含んでおり焼成も軟質である。乳黄色を呈する。

〈小林真寿〉

土器出土状態2（第17・18図、図版6・8）



第17図 土器出土状態2



第18図 土器実測図

肩部上半に沈線を引き、沈線により内側を磨り削りして入組ませた三叉文と彫去した三叉文を施す。また胴中央部の列点文上には縄文が残る。胴下部は研磨され無文であり、口縁内側には--

本土器はE-1グリット東隅の径22cm×25cm~12cm×20cmの河原石が15~22個南側に壁状に埋設している内側の小砾の上に胴部上半部が崩れや傾斜した状態で黒褐色土層内で検出された。検出面より約10cm程下の検出は礫層化した地点とのこともあり、壁状に埋設した石がいかなる性格を持っているものであるかは、附近的の石を抜いた後でも不明であった。出土した土器は、壺形土器で欠損した部分はあるがほぼ1個体分で口径13.4cm、器高21.9cm、胴部最大径19.9cm、厚さ約0.7cm、胎土は石英と金雲母を含み精選した粘土を使用して赤褐色を呈し焼成はやや軟質である。

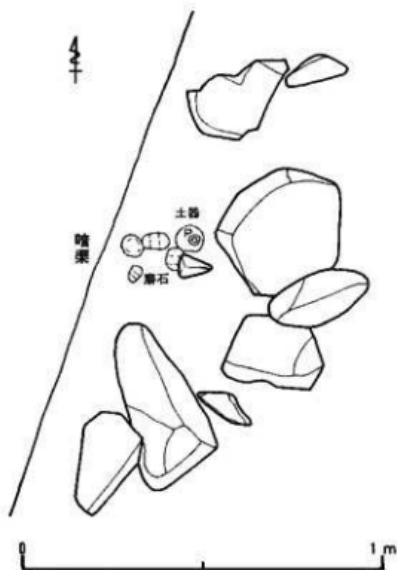
4ヵ所の抉りを口唇に入れた波状口縁を有し、文様は口縁から胴部上半まで縄文をこころがして地文とし、頸部と胴中央部には刺突による列点文を平行に巡らしている。頭部の刺突は直接行われているが、胴中央部の刺突は2条の沈線間に施される。

条の平行沈線が巡る。なお器面がかなり磨耗しており、文様構成が不明瞭な点も観られる。縄文晚期初頭の佐野Ⅰ式土器に比定されよう。

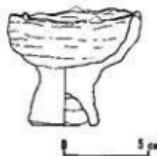
### 土器出土状態 3 (第19・20図、図版6・8)

本土器は調査区域東側E-6グリット、検出面下7.5cmの礫を含む黒褐色土層内より検出される。検出状態は約44cm×22cm×30cm×18cmの河原石が密集化する間に、5個の磨石（径4.7cm×8.1cm～7.4cm×6.6cm）の傍円状を呈し、中央部が帯状に研磨されている。石材は自然石を用い（定しない）と共に、口縁を下にちょうど伏せた形をし、定形で出土した手づくねの小型土器である。口径77cm、器高66cmを有し口縁部に4個の突起を持つ。小型の台付鉢で胎土は砂粒を含む精製された粘土を用い、焼成は堅く、黒褐色を呈する。この土器は磨石に伴出して出土する、特異な出土状態を呈し、しかも伏されているという現象は何を物語っているのか、磨石の用途と共に明確化されるべき課題を有する。

一括して出土したこの状態が他の遺構とどの様に関係していくかは確認できなかった。時期は縄文時代後期後半～晚期中葉である。



第19図 土器出土状態 3

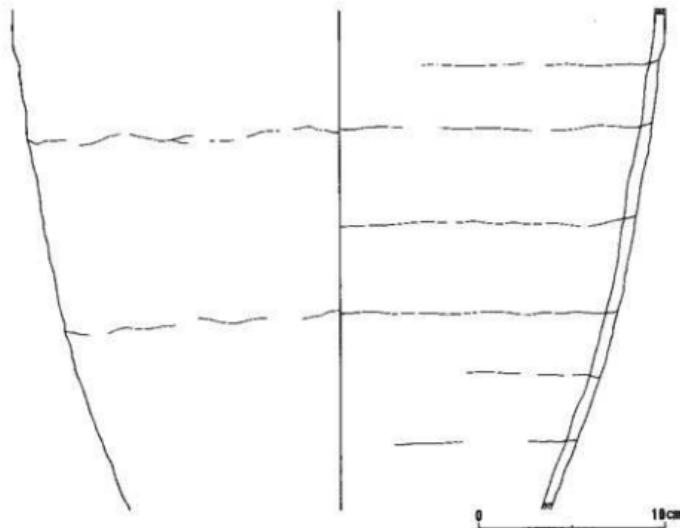


第20図 土器実測図

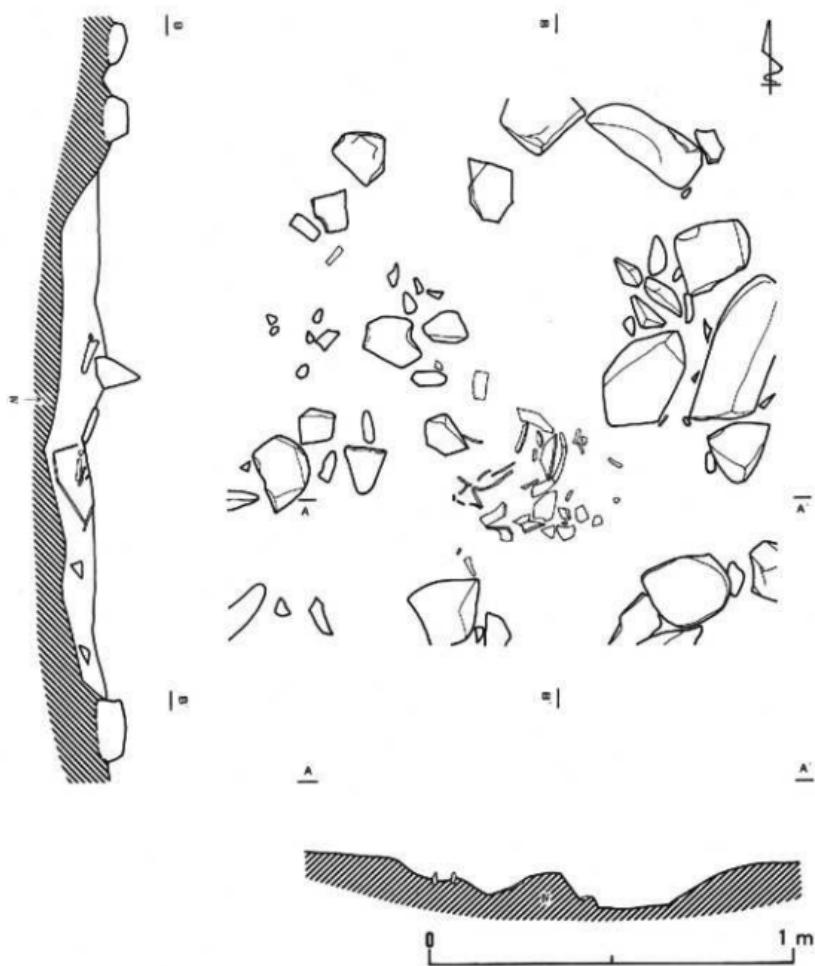
土器出土状態 4 (第21・22図)

本土器は、調査区域西側 D - 2 グリットの検出下 6 cm~14cm の黒褐色土層内(礫層化する)で大・小の河原石が集中する中に、ほとんど崩れ重なった状態で検出される。この検出された位置は炉址 1 より 1 m 50cm 西にあり、炉址 1 との関係は見逃す事が出来ないと思われる。器種は無文の變形上器で口縁部と底部は欠損しており、胴部最大径で 39.8cm を計る。

〈中川政信〉



第21図 土器実測図



第22図 土器出土状態 4

# 第5章 遺物

## 第1節 土器

今回の発掘調査によって出土した土器はコンテナ20個分ほどの量であるが、大半の土器が器形など性格が明らかにされない破片が多く、図上復元可能な土器のみ図示した。

土器はI群～VII群にわけ、第I群～II群は縄文時代後葉・加曾利B式に属する土器。第III群～IV群は縄文時代後葉から、晩期初頭。第V群は晩期初頭～中葉で、大洞B C・C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>までに比定されよう。第VI群は無文精製土器。第VII群は無文の粗製土器。第VIII群は無文の底部である。

第I群土器 加曾利B式及び併行期に属する土器で綾杉状条線が主となる土器群

a) 第23図-1

口縁部に沈線3本を引き、5本の縦の沈線で区切り、胴部上半部に綾杉状条線を一遍させたもので深鉢である。胎土は小石を多く含みやや粗く、焼成は良好で黒褐色を呈する。

b) 第23図-2・7・8

口縁部に梢円形の貼付を8個つけ、直下の2本の沈線間に刻目を施し胴部に綾杉状条線が描かれる。内面には口縁に2本の平行沈線が引かれる。(7)は突起がつく。いづれも浅鉢である。胎土は精製され焼成は堅緻である。黒褐色を呈する。

c) 第23図-3～5・9～11 第25図-32

口縁部から綾杉状条線を描き、内面に平行沈線が1本引かれる。(9)のみ口唇部に刻目をもつ。(9)は砂粒と雲母を含み胎土は粗い。黒褐色を呈し焼成は良好である。

(10)は内・外面共に研磨され砂粒を含む。茶褐色を呈し焼成は良い。(11)はc)の中では他と異なり綾杉状条線が左方向につけられ、胎土は精製され、内外面ともに研磨される。乳白色を呈する。

d) 第23図-6

口縁部に突起をもち、口縁下に2本の沈線を引き胴部に綾杉状条線が描かれ、内面には平行沈線が2本引かれる。浅鉢で黒褐色を呈し胎土は良質で焼成は堅緻である。

e) 第24図-12

口唇部に刻目をもち口縁下に2本の沈線を引き胴部に格子目状の条線が施され、内面に6本の平行沈線を付ける。胎土は粗く茶褐色を呈し焼成は良好である。深鉢である。

f) 第24図-13・14・15

波状口縁を有し、口縁部から格子目状条線が描かれる。深鉢では口唇部に刻目が施された胎

土は砂粒を含みやや粗く、内面は研磨され黒褐色を呈し堅緻である。(15)は(13)と同一個体と思われる。(14)は縁部に刻目を有さない他は(13)と同じである。

#### 第II群土器 加曾利B式及び併行期に属し、綾杉状条線以外の文様が施こされるもの

##### a) 第24図-16

口縁直下に2条の沈線を引き沈線間に刻目を施す。内面口縁下に平行沈線が2本引かれる。深鉢である。

##### b) 第24図-17・20・21

口唇部に刻目を持ち、口縁から胴部上半部にかけて横走する沈線間に縄文が施される。内面に平行沈線が1条～3条施されるものと施されないものがある。(17・21)は浅鉢、(20)は深鉢である。

##### c) 第24図-18・19

口唇部が刻目により鋸歯状を呈し、口縁部がくの字状に内側する。口縁下に数条の沈線を施し、沈線下に磨消による縄文帯を持つものと、口縁下に1条の沈線のみの施されるものがある。内面はいづれも口縁下に棒状具による刺突列を施し、胴部上半に平行沈線が5条引かれる。いづれも浅鉢であり胎土は精製され極めて良質で黒褐色を呈し堅緻である。

##### d) 第24図-22～25

(22)は口縁部が緩く内側し突起で飾る。口縁と胴部との境に一条の沈線を持つ。胴部上半、口縁部突起下より8の字状の波紋を施し、2条の沈線間に磨消縄文を配して横走する縄文帯を区画する。口縁の内側に2条の平行沈線が引かれる。胎土は砂粒を含むが良質である。内外面は研磨され黒褐色を呈し焼成は良い鉢形土器である。

(23)は口縁下2条の沈線間に磨消縄文を配し沈線下から8の字状の沈文が施される。

(24)は口縁上端部に縄文帯を配し、沈線で区切る。口縁と胴部の境、2条の沈線間に刺突をおこなう。

(25)は前記した土器の施文がかなり簡略化された形態を描くと思われる深鉢である。胎土はかなり荒く5mmほどの小石を含む。焼成は良く内外面橙褐色を呈す。

##### e) 第24図-26・27

口縁部下の沈線間に縄文を配し沈刻によって沈線を区画する。

##### f) 第24図-28

深鉢の胴部である。平行沈線により区画された縄文帯を段落しの手法により区切っている。内面には数条の平行沈線が引かれる。胎土は(25)と全く同様であり、焼成は堅緻で橙褐色を呈る。

##### g) 第25図-29～31

内側する口縁部に3条～6条の平行沈線が施される粗製の深鉢土器である。黄褐色を呈しやや軟質である。

h) 第25図 - 33・34

口縁に刻目が付けられた突起を有する土器である。(33)は突起下口縁部から数条の沈線が施される。また「所々に赤色と思われる付着物が観察され本来は塗彩されていたものかもしれない」。胎土は微石粒を含み、焼成は堅緻で暗灰褐色である。

i) 第25図 - 35・36

口縁部に8の字状の突起が付けられ沈線による曲線が施される。内面に数条の平行沈線が引かれる。黒褐色を呈し粗粒を含み、焼成は堅緻である。

j) 第25図 - 37~41・43

加曾利B式土器の突起を一括した。(39)は口唇部に刻目が施され沈線による区画内に繩文帯を持ち、口縁下に穿孔された一窓を持つ。内面には4条の沈線が施される。黒褐色を呈し内外面共に研磨され精製された胎土を持つ。

k) 第25図 - 42

波状口縁を呈し刻目を施した1対の突起が付され、刻目を付けられた瘤状の貼付を口縁下に持ち、沈線と刻目により口縁部が飾られる。黒褐色を呈し、微石粒を含み堅緻である。

l) 第25図 - 44~47

注口土器を一括した。(後・晚期) 器体と結びつくものが一個体もなく出土地点は遺構全域にわたる。また注口部のみの破片の為明確な時期比定は困難であった。

m) 第26図 - 48・49

口縁部が内側し口縁下に弧状に沈線を描き、半円形の沈線内は繩文が磨消される。沈線の接続に刺突文を施す。胎土は若干の砂粒と石を含む。黄茶褐色を呈し堅緻である。

n) 第26図 - 50

口縁部に貼付けをし3条の沈線を引く。胎土は砂粒を含み黄茶褐色で焼成は良い。

o) 第26図 - 51

注口土器の肩部と思われる。頸部の沈線間に刻目を有し、胴部には数条の平行沈線が引かれる。内面は研磨され黒褐色を呈し外表面は黄茶褐色である。胎土、焼成は良い。

p) 第37図 - 249~252

口縁が内側し、口縁下に2条~3条の沈線が施され、沈線間に2~3個の縦列する瘤状が貼付されている。(249・250)は精製土器で(250)のみ黒色を呈し他は黄褐色である。いずれも浅鉢である。

q) 第37図 - 253~255

(254)は口縁が外反し瘤状の貼付が口唇部に及ぶ。また沈線間に列点文が施され、胴部に数条の沈線を有す。(晚期の可能性を有する土器である。)

口縁下に刻目を有する凸帶を施し瘤状の貼付をする。(晚期の可能性を有する。)

(253)は胴部片である。

r) 第37図 - 256~260

本類はすべて胴部の破片である。瘤状の貼付けと沈線を用いたモチーフを有する。  
(256)は瘤状の貼付けが施され、横に3本の刻目が付けられ。(258)は縦に付けられている。  
(260)は内外面共に研磨され、黒灰色を呈し堅緻である。他は石・砂粒を含み、やや粗い胎土をもち黄灰色である。

#### 第三群 後期末～晚期初頭の波状口縁を有する七器群

##### a) 第26図-53～59・63・64・66

波状口縁を有し口縁に沿って隆帯が長方形状の区画帯をなし、隆帯下から胴部にかけ2条の沈線による紋様が描かれるもの(56～59)と無文のもの(53～55・63・64・66)がある。黒褐色を呈し胎土は非常に堅緻である。いずれも深鉢土器である。

##### b) 第26図-60～62

a類土器の隆帯部に刻目を施し瘤状突起を有する土器。胎土、焼成、色調はa類土器と同一である。

##### c) 第26図-52

双円形の突起を有する。波状口縁を持ち、口縁に沿った隆帯を持つ無文の深鉢土器である。胎土、焼成、色調はa類土器と同一である。

##### d) 第26図-65

波状口縁を有し、波状部に陰影により浮き出させた部分に刺突を加える。黄褐色を呈し胎土に石英を含む。やや軟質の土器である。

##### e) 第26図-67

波状口縁を呈す浅鉢七器で口縁に沿って2条の沈線が引かれる。黄灰褐色で胎土は石、砂類を多量に含み堅緻である。

#### 第四群 東海地域に分布の中心をおく凸帶紋土器を一括した。

##### a) 第27図-68～74・77・80～85

平縁口縁で口縁部に突起を持つもの(68～73・77)。口縁部凸帯紋下に斜位に条状が付けられるもの(70)。繩文が施されるもの(80)。沈線による紋様が描かれるもの(71・72・85)等が認められる。胎土は砂粒を含み、焼成はやや軟質であり、色調は黄褐色を呈す。(70・74)は内外面を研磨され、黒褐色で堅緻である。いずれも深鉢土器である。

##### b) 第27図-75・76・78

(75・76)は波状口縁を呈し、口縁端から曲線を持つ凸帯を口縁部の凸帯に下ろす。(78)は石紋を多量に含み、焼成は堅緻で褐色を呈する。(75・76)は砂粒を含み内外面とも研磨され、褐色を呈する。深鉢土器である。

##### c) 第27図-86

口縁が外反し、頸部がくびれ、(a)とは異なる器形である。

d) 第27図-79

口縁上端に刻目が施され凸帯を持つ小形の深鉢である。胎土・焼成・色調は(a)と同一である。

第V群 大洞BC～C<sub>2</sub>に併行する土器群

a) 第27図-87～92 三叉文が施される土器を一括する。

(87) 深鉢上器で磨消による縄文帯間に施された渦巻文を結ぶように三叉文が入組む。

(88) 小型土器の口縁部である。沈線下に渦巻文を結ぶように三叉文が入組む。

(89・91・92) 壺形上器の頸部である。

(89) 1cm幅の沈線を2条引き、下に三叉文と曲線の沈線を描く。

(91) 頸部沈線下縄文帶に三叉文を入組ませる。

(92) 頸部下に三叉文を入組ませ、2本の沈線が引かれる。胴部は縄文を施す。

(90) 波状口縁を有する深鉢土器である。波状部口唇に刻目を施し、直下に三叉文を入組ませる。口縁部には刻目を施した隆帯が巡らされる。

(87・88・81・92) は胎土精製された粘土を使い、黒色・褐色・赤褐色を呈し極めて堅緻である。搬入された可能性が強い。

(89・90) は石粒を含む。黄灰色を呈し、焼成は堅緻である。

第31図(175)もa)に分類される。

b) 第28図 93～101 羊齒状文を施す土器を一括する。(大洞B C併行)

(93・94・97) 深鉢上器で口唇部に刻線がくわえられ、平行した2条の沈線間に羊齒状文を描く。胴部は縄文が施される。内外面が研磨され、黒色を呈し、胎土は精製されていて堅緻である。

(95・96・98・99・100・101) 101は皿型上器、他は深鉢型土器である。口縁部平行線間に列点を配して文様とし、胴部に縄文・雲形文・鍵の手文を施す。褐色を呈し、胎土は精選され堅緻である。

c) 第28図-102～118 磨消による縄文帯が主たる文様となる上器を一括する。

(102) 綾格状の結節が縄文帯に施される。

(103) 綾格状の結節を押奈したものである。(102・103)とも胎土に石粒を含み粗い。明褐色・黒褐色を呈し、堅緻である。

(104) 口縁部に突起の貼付けを有し、平行沈線に区画された胴部には縄文が施される。黄褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良質である。いずれも深鉢土器である。

(105～114) 平縁の口縁を持ち、口縁部下平行沈線間に縄文を施すもの。黒褐色から褐色を呈し、砂粒を含む。焼成は良質である。いずれも深鉢土器である。

(115～118) 磨消縄文を有する雲形文が沈線によって描かれる。(117)は突起を有し、内面突

起部に刻目と沈線が描かれる。胎土は精選され黄褐色で(115・117)はやや軟質で、他は堅緻である。(116)は浅鉢である。

d) 第28図-119~125 肥厚した口唇に装飾が加えられる土器を一括した。(大洞B C ~ C<sub>1</sub>)

(119) 肥厚した口唇内に沈線により三叉文を施す。一对をなす瘤状の突起が口唇部内外に付けられる。

(120・122) 隆線によって半円形の加飾を施し、端部が瘤状の突起となる。(120)は縦に隆線が並び、(122)は複雑な構成をとり三叉文を呈す。

(123・124) 口唇部を縦の降線によって区画し、三叉文を配す。(124)は降線間に繩文を施す。

(121) 口唇部が縦の隆線と複雑化した隆線によって加飾される。

(125) 口唇部が肥厚化せず、内面に円形の隆線を中心とし三叉文状に隆線を配す。各基点に瘤状突起を有し、口唇部に一对の瘤状突起となす。口縁下に沈線が施される。黒色を呈し、砂粒を含み、堅緻である。いずれも浅鉢土器で黄褐色を呈し、砂粒を含む、焼成は良好である。

e) 第29図-126~135、第30図136 工字文を文様とする土器を一括する。

f) (i) 第29図-126~132 (佐野II・大洞C<sub>1</sub>) 口縁部に繩文を施し、頸部と胴部上半に刻目を有する半隆線間に工字文風の文様を施す。胴部は無文である。内面に2条の平行沈線が付けられる。暗褐色を呈し、金雲母を含み、やや粗い胎土である。焼成は堅緻である。

(126・128・129・130・131) 深鉢土器

(127・132) 壺形土器

(ii) 第29図-133・134 口縁部に突起を有し、「三叉文を上下に配することにより肥大化した工字文風の文様を施し」、それにより区画された楕円形内に、沈線による施紋が施される。深鉢土器である。黄褐色を呈し、砂粒と石英を含む、やや軟質である。(134)は(133)に類似する土器である。(ii)は(i)とは異なる系統を持つ土器と思われる。

(iii) 第29図-135 黒色を呈する注口土器と思われる。口縁部に沈線による工字文風の文様が付けられる。精製土器である。胎土は精選され、堅緻である。

(iv) 第30図-136 浅鉢土器の底部である。文様の構成は工字文風の文様に対する位置に、三叉文を配し、この間を結ぶように彫去された三角形が規則的に付され、他の箇所を刺突により充填する。黒褐色を呈し、精選された胎土を持ち、焼成はやや軟質である。(非常に異なった文様構成を有する)。

(v) 第32図-197~199 佐野I、II式土器。すべて壺形土器で口縁から頸部にかけて斜繩文を施す。

(197・198) 波状口縁、いずれも口縁内側に1条の沈線をめぐらせる。

(197) 口縁下に一孔穿孔される。胎土に金雲母と石英が含まれ、暗褐色を呈し、焼成は良好。

(198) 口縁部内側は三角形に彫去され、波状部口唇を刻む。黄褐色を呈し、石英・黑雲母を

含む、焼成は良好である。

(199) 平縁で2側一対の突起が施される。黄褐色を呈し、黒雲母を含む。焼成は軟質である。

(vi) 第30図-137

壺形土器の口縁部であり、把手が3箇所に付けられ、把手が付けられた口縁部は波状をなす。口縁部から頸部にかけて斜繩文が施され、把手と曲線を有する降線が貼付けられ区画される。内面は波状部端に三叉文風の彫痕がなされ、1条の平行沈線がめぐる。胎土・色調・焼成とともに、本遺跡出土の工字文を有する土器群（e・i）に近似する。

g) 第30図-138～144 大洞C併行期に属するものを一括した。

139～142は肥大化した口唇部を有する。

(139・141) 体部無文の浅鉢型土器で、黒灰色を呈する精製土器である。

(140) 口縁部が内側する浅鉢土器。口縁下に刻目を有し、雲形文状の浮彫りがなされ、黒褐色を呈する精製土器である。

(142) 肥大化した口唇部に突起を有し、口縁下に刻目が施され、磨消繩文帶より雲形文を施す。褐色を呈し、胎土に金雲母を含む、焼成は良い。

(143) 小型の壺形土器である。繩文と人組三叉文による文様を配し、胴部中央において刻目により区画される。黒褐色を呈し、精選された胎土であるが、やや軟質である。

(144) 黒色を呈する鉢型土器である。頭部下、体部にかけて人組文によって導かれた磨消繩文帶が施される。精選された胎土を持ち、堅緻である。

(138) 口縁下に刻目を有し、胴部には平行線と曲線の沈線間を刻目で光模する。曲線の沈線間に瘤状の突起を持つ。暗褐色を呈し石粒を含む、焼成は堅緻である。

h) 第30図-145～151、第31図-176～180

晩期に属し他に分類出来ない土器を一括する。

(i) 145・148

平縁の口縁を呈し口縁部に刺突列が施され胴部に平行沈線による区画がなされ（145）は磨消繩文による繩文帶が施される。浅鉢土器である。（148）は壺形土器である。

胎土は黒雲母と砂粒を含み精製されている。いずれも堅緻であり（145）は黒褐色。（148）は褐色を呈する。

(ii) 第30図-146～147、149～151

沈線による文様が口縁から胴部にかけて施される。

(149) は良質の胎土を用い、堅緻で黒灰色を呈する。他は石粒を含み、堅緻で黄褐色を呈する。

(iii) 第30図-150

浅鉢土器である。口縁部に繩文を施し、沈線による文様が描かれる。胎土は黒雲母と石英を含み、精選されている。やや軟質で黄灰色である。

(iv) 第31図-176~180

(176) は壺形土器で口縁部繩文帯を2条の沈線によって区画し区内に横丁字状の沈線を向合せに並列する。胎土は石粒を含み黒褐色を呈す。堅緻である。

(177) は壺形土器で頸部及び胴部に平行沈線が引かれ、沈線間は磨消により無文となる。口縁部繩文帯には沈線による文様が描かれる。

褐色を呈し、石粒を多量に含み堅緻である。

(178) は浅鉢土器で口縁部波状間に刻目を有する突起を持ち口縁に沿う沈線により区画された沈線間に刺突を有し、沈線により区切られた繩文部を残し、他を磨消す。黒褐色を呈し、黒雲母を含み堅緻である。

(179) は口縁が外反し、口縁下に沈線による文様が描かれる。黒褐色を呈し金雲母を含み堅緻である。

(180) は胴部に平行沈線が引かれ、上部から蛇行する沈線が垂下する。黒褐色を呈し、金雲母を含み、やや軟質である。

i) 第30図-152~157 (大洞B C ~ C<sub>2</sub>)

口縁に数条の沈線をめぐらした無文土器を一括する。

(152~154) は浅鉢土器。(155~157) は深鉢土器である。

2条~3条の沈線を口縁下にめぐらせる。胎土は石粒を含み、堅緻でありいずれも褐色を呈する。

j) 第31図-158~167 刺突列点文帯が施された土器を一括した。

(i) (158~163) 刺部片であり、沈線間に刺突列点文帯が施される土器で、他に文様は施されないと思われるもの。

(162~163) は刺突列点文帯下に繩文が施される。石粒を含みやや軟質で明褐色を呈する。

(162~163) は黒雲母を含みやや軟質で暗褐色である。

(ii) (164~165) 刺突列点文帯が他の文様と併用されるもの。いずれも胎土は精製され堅緻である、黒褐色と灰色を呈する。

(iii) (166~167) (167) は刺突列点文帯が2列めぐらされている粗製の深鉢土器である。

(166) は黒雲母と石英を含みやや軟質である。(167) は石粒を含み堅緻である。共に黒褐色を呈する。

k) 第31図-168~174

繩文を施こし、沈線と列点文によって施文された土器を一括する。

いずれも深鉢土器で、繩文を地文として用いる。口縁は平縁で、口縁部に列点文を配し沈線による区画が入組む鍵の手文状を呈し区画内に刺突列が加えられると思われるが、器形の全容が明らかではなく、明白は出来かねる。

第VI群 無文の精製土器で他へ分類できない土器を一括した。

a) 第32図-181・182・184~188・192 無文の精製土器を一括した。

(181・184)は深鉢である。(181)は2個一对になる突起が口縁を飾る。(184)は口縁部がやや外反し円弧状に沈線が施される。いずれも黄褐色を呈し堅緻である。

(185・187)は皿型の浅鉢で灰褐色を呈し堅緻である。(186・188・192)は壺形土器で(186)は頸部に2条の平行沈線がめぐる。(188)は口唇部が刻載され頸部に1条の沈線がめぐる。(192)は口縁部に突起が等間に8個付き、突起下にて孔の穿孔がされ、胴部が外聾する。淡褐色を呈し、いずれも堅緻である。(182)は口縁部に突起を有す壺形土器である、褐色を呈しやや軟質である。

b) 第32図-183・189~191・193・195・200 有文の精製土器を一括する。

(183)は壺形土器で口縁に突起を有し口縁下に2条の沈線がめぐる。突起下に2個の穿孔がなされ頸部に1条の沈線が引かれる。口縁内側に1条の平行沈線がめぐる、黄褐色を呈し堅緻である。(193・194・195)は壺形土器であり、(193)は繩文が施された頸部に2条の沈線がめぐる。黄褐色でやや軟質である。(194・36図247)は頸部に刻目を持つ2本の隆線を施す、黒褐色を呈し堅緻である。(195)は口縁部に繩文が施され頸部降帯を横位に刻む。黄褐色で堅緻である。(190)は口縁端に刻目を有し、口唇に沈線が引かれる。頸部には4条の沈線が施され頸部には繩文が付けられ、褐色を呈し堅緻である。(191)は頸部がくびれ波状口縁を呈す深鉢土器で口縁から頸部にかけて、弧線を組合せた文様が施され上部上半には刺突がおこなわれる。黄褐色を呈し堅緻である。(200)は口唇部を刻目と突起により加飾し口内縁が段状を呈す。頸部には1条の隆帶があり胴部は浮彫による文様が施され暗褐色を呈し堅緻である。(189)は浅鉢土器である口縁には突起があり突起下に2孔の穿孔がされ、口縁部に2条の沈線による区画を造りそれを左下りの沈線により3分割する。分割された沈線間に沈線を引き繩文を区画する、他は磨消される、褐色を呈し堅緻である。

c) 第32図-201~205 台付鉢形土器を一括した。

(201)は脚部上端に長方形の隆線を4ヵ所に貼付けたもので、暗褐色を呈する、石粒を含み堅緻である。

(202)は脚部上端に刻目をめぐらせたものである。黒灰色を呈し、石粒を含む。堅緻である。

(203)は脚部に透しを施してある。褐色を呈し石英を含む、堅緻である。

(204)は脚部に沈線と刺突による文様が施されている。黄褐色を呈し堅緻である。

(205)は無文で黒雲母と石英を含む、やや軟質である。

第四群 無文粗製土器を一括する。

a) 第33図-206~209、34図-215・216・219 口縁がほぼ直立する深鉢土器

206は口縁に1対の瘤を両側に配した山形突起を有する。輪積痕が認められ5mm大の石粒を多量に含む。やや軟質で黄褐色を呈する。(207~209)は褐色を呈し石粒を含む。焼成はやや軟質である。(215・216・219)は筒状を呈し(219)は口縁部に瘤状の突起を付け輪積痕が残り、内面には黒色の付着物が認められる。黒褐色を呈し、胎土は砂粒を含みやや軟質である。(215)は輪積痕が認められる。黒褐色を呈し堅緻である。(216)は口縁に貼付をする。内面が研磨され灰褐色を呈し堅緻である。

b) 第34図-210~212・217・218 口縁が開く深鉢土器

(210・211)は内外面共に粗く研磨され、胎土は砂粒を含む。焼成は堅緻である。(210)は黒褐色・(211)は明褐色である。(212)は口唇部に押余を加える。(217)は口縁が外反する。胎土は黒雲母を含み焼成は堅緻であり黄褐色を呈する。(218)頭部がくびれ口縁が内側する。石粒を含み明褐色を呈し堅緻である。

c) 第35図-221~224 口縁が内側する浅鉢土器

(222)は口縁部に2孔穿孔される。黒雲母を含み灰褐色を呈する焼成は堅緻である。(224)は口縁が強く内側するもので黒雲母を含み、かなり精製された胎土を用いる。(223)も同様な胎土で調整がなされ堅緻である。(221)は手づくねで内面に黒色の付着物が認められる。黒雲母を含み褐色を呈する。

d) 第35図-228・230 口縁がほぼ直立する浅鉢土器

いずれも胎土に黒雲母を含み、黄褐色を呈する堅緻な土器である。

e) 第35図-232

頸部がくびれ、口縁がやや外側しながら開き内面に段を形成する浅鉢土器で「兜鉢状を呈する」金雲母と5mm大の石粒を含む。内面は黒色・外面は明褐色を呈し堅緻である。

f) 第36図-245・246

(232)に近い形態を示すが剥離部が強く外側し口縁にも加えることにより小波状の口縁を造りだしている。胎土は砂粒を含みやや軟質で褐色を呈する。

(213)は口縁の内側に1条の平行沈線が引かれ石英と石粒を多量に含む。輪積痕が認められ外面は粗い研磨が加えられる。褐色を呈し、やや軟質である。(214)は内外面に粗い研磨がされ黒雲母が含まれる。暗褐色を呈し堅緻である。

(220)は口縁内側に1条の平行沈線が引かれる。胎土は石英・砂粒を含み、黄褐色を呈し堅緻である。(225・231)は輪積痕が顕著である。いずれも石粒をかなり含む。黄褐色に近い色調

を呈す。深めの浅鉢である。(245)は頸部下に1条の沈線が引かれる。胎土は黒雲母を含み、黄褐色を呈するが軟質である。

i) 第35図-233-239、第36図-240-244 端形土器

頸部がくびれ短い口縁が外反及び直立ぎみに付くもの。

(233-239、240・241・243・244) 内外面共に粗い研磨が加えられ黄褐色を呈する胎土は砂粒を含み、軟質の土器である。

(241-243・244)は口縁に突起を有し(241)は穴起下に5mmほどの2個の瘤を有する。(242)は口縁が外反しながら開く、器内は厚く、石粒を含み、黒灰色を呈す堅緻な土器である。

第VII群 無文の底部 (第38図-261-275)

(261-267・270)は深鉢を呈する、(270)は精製土器で他は粗製土器である。色調はいずれも褐色かそれに類似した色調を呈する、やや軟質である。(268-269・271-275)は底部のみの為器形が識別できない。(272-274)は高台状の底部を有する。  
〈中川政信・小林真舟〉

## 第2節 網代底

今回の調査で検出された縄文土器の底部は242点で、その内訳は平底91点、網代底138点、木葉底13点であった。このうちここでは、網代底について取り上げ考察してみよう。

網代の編み方にはA-Eの5種類が確認でき、摩滅して編み方の不明瞭なものや、小破片で編み方の不明なものが64点あったので、これらを除いた74点について種類別の百分率を求めた。以下がその種類と百分率である。

〔縄の条に対する縄の条の編み方による分類〕

A : 2本越え・1本潜り・1本送り	81.0% (第39図276-281)
B : 2本越え・2本潜り・1本送り	12.2% (第39図285)
C : 1本越え・1本潜り・1本送り	2.7%
D : 4本越え・2本潜り・1本送り	2.7% (第39図282)
E : 3本越え・3本潜り・1本送り	1.4% (第39図283)

当遺跡においては「2本越え・1本潜り・1本送り」の編み方が全体の8割を占める傾向が認められる。上小地方の縄文時代後晩期遺跡の発掘例は非常に少ないが、真田町雁石遺跡においては8割以上が、丸子町深町遺跡の整理作業の知見においては7割が「2本越え・1本潜り・1本送り」の編み方であった。東日本的にされる「2本越え・1本潜り・1本送り」の編み方が多数を占める傾向は、上小地方においても考えられる。

当遺跡では口縁部から底部まで残る土器の検出例は稀であり、器形を知り得るものは極少ないが、底部に網代底をもつ器形は粗製の深鉢が多いようである。  
〈坂井美嗣〉

### 第3節 土 製 品

#### I 土偶 (40図-286・288~291・第41図-294~296)

土偶として、頭部が1点・胸部3点・腰部1点・足部2点・手部2点出土する。

(286)は頭部に髪を結ったような表現を施し眉・鼻・目などは非常に写実的に描かれている。顔面は黒色・後頭部は褐色を呈する。精製した粘土を使用し堅緻である。(289・296・297)は容器形土器である。(289)は左肩から胸部にかけて残る、表面は肩部からおりる隆線が左の乳房まで下がる、背部は沈線が弧状に縦に沿って描かれる。黒雲母と砂粒を含み、焼成は軟質である、黄褐色を呈する。(296)も左肩部であるが小片に碎かれている、表面に弧状の沈線が引かれ、肩部に円形の沈線が描かれる。胎土・焼成・色調は同じである。(297)は左足で足首はくびれ、足の裏側は円形を呈する、茶褐色を呈し石英を含む焼成は堅い。(291)は左肩から胸部まである、背部は碎かれている、表面はボタン状の貼付けによる乳房と2条の隆線が垂下する、胎土は石粒を含む、粗いが研磨を施し褐色である。(294)は腰部片であるが腹部がくびれ、臀部は偏平に造られる、表面は臍である突起状の貼付けと性器かと思われる抉りの表現が施されている。黄褐色で砂粒を含みやや軟質である。(288・289)は手部であり、(288)は右手で付け根に5個の刺突を配し、背部には三叉状の彫去がなされる。黒褐色を呈し、黒雲母を含むやや軟質である。(290)は手先に4本の刻目を入れ指が表現される、石英を含み淡褐色を呈すやや軟質である。(295)は大型の足部である、足部がくびれ階円形を呈する。黄褐色を呈し石粒を含む、軟質である。

II 土製品 (精製された粘土によって造り出された土製品の破片であるが、明瞭に判断出来る資料に欠け、判然としない土製品)

(第40図-287・292・293・第41図-298・299・300・302・303、第42図-305・306、第43図-312)

(293)は内が中空であり施文として沈線間に刺突列を施す、褐色である。(292)(299)は円形状を呈し、土偶の足とも思え黒褐色を呈する。(302・303)は同一のものと思われる、節を有し小型のものである。(306)は眉・目・鼻と思われる箇所を粘土によって貼り付け顔面の表現をしている、口は穿孔によって穿たれ瘤と思われる貼付けも描かれている、全体的に彎曲する形態を有し、黄褐色を呈する、石粒を含み堅緻である。

#### III 土鍤 (第41図-301・304)

(304)は7.2cm×6.6cmの円錐状を呈し、頂点と斜め横から1孔ずつ穿たれ、真中で一孔となる石粒と石英を含み、黄褐色で軟質である。(301)も同様であるが孔は頂点より垂直に一孔のみ穿けられる、黄褐色を呈し石英を含む、軟質である。

#### IV スタンプ型土製品（第42図-310）

下部の階円形の部分が内側に抉り込んでいる。全体が研磨され、黄褐色で軟質である。

#### V 鮎形土製品（第42図-309）

鮎の身の部分である。身は凹みを有し柄は水平に付くものと思われる。黄褐色を呈し石粒を含む、やや軟質である。

#### VI 刺状土製品（第42図-308、第43図-311）

（43図・311）は二等辺三角形状に欠損している。先端をのぞく縁部には10個の突起が付けられ、表面には向いあう、三叉文が彫去されそれに沿って沈線が施される。先端部には彫去された三叉文内に一孔が穿たれ、背面には繩文が施され中央部に2条の沈線間は研磨され、丁寧に整形される。黒雲母・金雲母・石英を含み暗褐色を呈し堅緻である。

（43図・308）は基底部が左右にとび出し沈線による満巻文が両側にのびる。表面は基部に一孔穿たれ器面中央部は彫去される。背面は沈線によってX字状に区きり、端部も沈線が引かれる。鮎形土製品の柄とも考えられ、陽形状を呈する。黄褐色を呈し砂粒を含み堅緻である。

#### VII 円錐台状土製品（第42図-307）

4.8cm×4cmで文様は施されない。石英を含み黄褐色で、やや軟質である。

#### VIII 小型土器（第43図-313～318）

（313）は手づくねの皿形土器である最大径7.6cm×器高3.4cmで内部に刻みを有する突起の付いた仕切りを貼付ける。灰褐色で砂粒を含み軟質である。

（318）は台付鉢状を呈する、最大径12cm×器高9.4cmで無文である。黄白色を呈し石英を含む精選された胎土を用い堅緻である。

（314）、も（318）と同様台付鉢状土器の脚部である、黄褐色を呈する。

（315）は手づくね、最大径3.6cm×底径1cmの非常に小形の土器であるが黒褐色を呈し精選された胎土を用いる。内面には黒色の付着物が認められ、よく研磨されている。器内は2mmと薄く軟質である。

（317）は底部が階円状をし器高2.4cmである。皿が並んで付く異形土器である。胎土は黒雲母を含み黄褐色を呈する。堅緻である。

（316）は口径3.4cm、最大径5.8cm、底径5.4cm、器高8.4cm、器厚6mmを有する筒形の小型土器である。口縁部と底部に平行沈線による区画帯を引き継ぐ沈線により口縁部は4区画、底部は6区画に区分し、区画内を2条の沈線を並行に描く。「平行沈線と縦の沈線により三叉文状

の線が工字文様化し、区画内の沈線は三叉文状に描き出されるようにも考えられる。

内外面共に黒色に研磨され、1対の穿孔が口縁に施される、黒墨を含み精製された胎土を持ち、やや軟質である。 (中川政信)

#### VII 土製耳飾

土製の耳飾は81点出土しているが、層序の確認が遺構との関係に於いて困難な為捉えられないこと、耕作などによる擾乱を受けている可能性が強いこと、などから明確な時期比定は困難かと思われる。ただ当遺跡の出土土器から加曾利B II期から大洞C期の範疇に収まると思われる。(81点の内図示したのは66点である) 基準は形態により三類形に分類し、さらに施文、中心孔の有無により細分する。

##### I類 (第44図-1, 2) 「皿形」を呈するもの

この種のものは臼形の口唇部が肥大したものと考えればIII類に入れるべきかもしれないが特殊な例なので別枠にした。

a - 中心孔をもつもの。 b - 中心孔をもたないもの。

##### II類 (第44・45・46・47図-3~34, 第48図-66) 「環形」を呈するもの。

a - ブリッジをもつもの。 b - 口唇部及び口縁部に施文をされたもの。 c - 内面に施文されたもの。 d - 無文のもの。

##### III類 (第47・48図36~60) 白形を呈するもの

a - 中心孔をもつ無文のもの。 b - 中心孔をもたない無文のもの。 c - 有文で中心孔をもたないもの。 d - 裏面をえぐって中空にしたもの。 d<sub>1</sub> - そのうち中心孔をもつもの。 d<sub>2</sub> - 中心孔をもたないもの。 e - 棒状のもの及び栓状のもの。

なお、III類のbの中には完通はされないが中心孔をもつものも含めた。つまりIII類のaは完通した中心孔をもつもののみとした。

下前沖遺跡では一覧表のように、II類のものがIII類のものを15点上回り量的には最も多いが、当遺跡の存在期間から考えて全て同一時期のものとは考えられない。また、調査面積が遺跡の一部分であり、遺跡内全てを集約した百分率を出すことはできなかった。

施文は沈線、刻目、刺突、列点文、彫り込み文、貼付文の単独あるいはこれらの複数の組合せにより行われているが最も多くつかわれるのは沈線と刻目文である。

規格的にはII類のものは大型のものが多く、III類のものはその大半が小型である。ただしII類のものは完形に近いものが2点ほどあるだけであとは破片からの復元寸法である。

本遺跡において、土製耳飾が集中して出土している地点がある。それはE-7, E-6, F-6がグリットであり、No.8とされているものもE-6~E-7グリットの一部である。ここからは他の遺物も集中して出土しているが遺構の存在は確認できなかった。 (小林真君)

## 十二製耳飾一覧表

No.	形態	出上地式	治上	焼成	色調	直径 (mm)	縫合 (mm)	各部 (mm)	文様	備考
1 1	I-a	F-5	純 良 好	黒褐色	4.8	9.2	2.8		沈縫による同心円内に刺突文	
2 2	I-b	B-5	粗 い	黒 黒	3.8	6.8	3.2		沈縫による同心円内に刺突文	
3 3	II-a	F 2	精 清	乳褐色	6.0	6.4	2.0		二叉文風の彫り込み文	
4 4	*	D-5	*	*	*	3.0	4.0	2.0	三叉文風の彫り込み文に刻目	
5 5	*	C-7	*	*	黒色	3.2	3.6	1.6	二叉文風の彫り込み文	
6 6	*	A 2	*	*	漆 黑	2.6	2.8	1.7	彫り込み文に刻目	
7 7	*	E-7	*	*	明褐色	3.0	3.2	1.6	彫り込み文に刻点文	
8 8	*	E 2	*	*	黒褐色	?	?	?	彫り込み文	
9 66	*	Ko 8	*	*	褐色	1.2	1.3	1.1	*	
10 9	II-b	F-6	石英多量 に含む	*	漆 黑	6.6	6.8	2.6	円形輪付文に刺突、及び二本の沈縫による同心円内に刻目	
11 10	*	No 13	精 透	*	褐色	6.6	6.8	2.7	輪付文に二叉文風の彫り込み及び刺突文と 沈縫による一本の同心円文	
12 11	*	E-7	*	*	黑色	7.2	7.4	2.3	輪付文に沈縫による一本の同心円文	丹塗り
13 12	*	E-7	*	*	漆 黑	5.8	6.0	2.6	輪付文に沈縫による二本の同心円文	
14 13	*	E 6	*	*	黑色	6.2	6.4	2.2	輪付文に沈縫文	
15 14	*	No 8	*	*	漆 黑	7.6	8.6	2.4	沈縫による二本の同心円間に刻目	丹塗り
16 15	*	F 7	*	*	*	6.8	7.0	1.8	輪付文に二本の沈縫による同心円文	
17 16	*	E-6	*	*	褐色	5.8	6.4	1.8	沈縫による同心円内に刻点文	
18 17	*	E-6	*	*	良 好 漆 黑	6.6	6.8	2.6	沈縫による同心円の外側に刻目	
19 18	*	F 6	*	*	*	4.6	4.8	2.0	沈縫による二本の同心円間に刻点文	
20 19	*	No 3	瓶 い 扇 貝	*	黒褐色	4.8	5.0	1.4	とぎれとぎれに沈縫を施す。その部分 がこぶ状にもり上ったもの	
21 20	*	H-4	精 良 好	漆 黑	6.8	7.2	2.0	4カ所に彫り込み文による渦巻文		
22 21	*	D-2	*	*	*	7.2	7.4	2.6	No.12の口袋部を一部肥大させ内側に凹り出 させたもの	
23 22	*	E-5	*	*	褐色	5.5	5.7	2.1	4カ所に頭形の輪付文をし、それを2つ1組で半円状でつないだもの	断面が落子状 になる
24 23	II-c	E-4	*	*	黒褐色	7.6	8.0	2.2	沈縫による同心円内に刻目	
25 24	II-b	E 7	*	*	漆 黑	?	?	2.0	沈縫による同心円文	
26 25	*	F-6	瓶 い 扇 貝	*	褐色	3.2	4.0	2.6	頭日本文	
27 26	II-a	No 8	精 透 良 好	*	乳褐色	7.8	8.2	2.2	二叉文風彫り込み文	内面上面に施文
28 27	*	C-3	*	*	漆 黑	6.4	6.6	2.1	沈縫による同心円内に刻目	
29 28	*	*	*	*	褐色	5.6	5.8	1.8	彫り込み文	内面全体に施文
30 29	*	No 8	*	*	明褐色	4.0	4.6	2.0	彫り込み文に刻目	
31 30	*	D-2	*	*	灰褐色	6.6	7.0	2.0	二叉文風彫り込み文	内面上面に施文
32 31	*	表 2	*	*	水褐色	3.0	3.2	1.8	彫り込み文	
33 32	II-d	D-5	*	*	黒褐色	5.2	5.6	2.4	彫り込み文	
34 33	*	D 7	*	*	乳褐色	6.2	6.8	2.5		
35 34	*	B-3	*	*	漆 黑	7.2	7.4	2.1		
36 35	*	E 6	*	*	茶褐色	3.0	5.4	2.0		
37 36	III-a	B-2	*	*	*	1.4	1.8	1.6		
38 37	*	*	*	*	軟質褐色	1.8	2.0	1.4		
39 38	*	B-3	*	*	良 好 黑色	2.4	2.6	1.1		
40 39	*	E-7	*	*	軟質褐色	1.4	1.5	1.4		
41 40	II-b	E 3	*	*	良 好 明褐色	2.0	2.2	1.2		
42 41	*	E-6	*	*	灰褐色	1.8	2.0	1.6		
43 42	*	表 2	*	*	黑色	1.6	?	?		
44 43	*	*	*	*	乳白色	1.4	1.6	1.8		
45 44	*	C-6	*	*	黑色	2.1	2.4	2.0		
46 45	*	F 3	*	*	明褐色	1.4	1.5	1.6		
47 46	*	A-2	*	*	*	1.6	1.7	1.4		

48	47	III-b	A-1	板い良好	明褐色	1.2	1.2	1.3			
49	48	*	E-4	精道	#	#	1.8	2.1	1.6		
50	49	*	B-1	精道	#	黑色	2.1	2.2	1.0		
51	50	*	C-4	#	#	#	1.9	1.4	#		
52	51	*	E-1	粗い	#	#	1.2	#	1.4		
53	52	*	E	#	#	やや粗	6.4	6.8	1.8		
54	53	*	E-6	精道	良好	#	5.4	5.6	2.1		
55	54	*	E-7	#	#	深黒	4.8	5.2	2.0		
56	55	*	D-7	やや粗い	#	褐色	3.8	4.0	1.1		
57	56	*	No.8	#	#	灰黑色	3.0	3.2	4.0		
58	57	*	No.13	精道	#	黑色	#	3.6	2.8		
59	58	*	E-6	#	#	乳褐色	3.2	4.1	3.2		
60	61	III-d	B-1	#	#	黑色	2.2	2.6	1.8	表 同心円文に刺目 裏 = " " 刺突	
61	62	III-d	E-5	やや粗い	#	#	2.8	3.1	1.7	彫り込みによる同心円文に刺目	
62	64	*	No.8	精道	#	明褐色	1.2	1.4	1.6	"	
63	65	*	表 採	#	#	乳白色	1.1	1.2	1.1		
64	63	III-d	F-2	#	#	黒褐色	1.1	1.2	1.3	同心円文に刺突及び刺目	
65	69	III-d	H-5	#	#	黑色	1.2	1.4	1.8		中心孔有り
66	60	*	表 採	#	#	乳灰色	0.8	1.3	1.9		
67	61	III-d	D-1	#	#	漆黑				No.20の文様が2重に並列されたもの	浮雕
68	*	No.25	粗い	#	#					"	
69	*	No.8	精道	#	#	褐色				No.17と同様	
70	*	C-1	#	#	#	漆黑				比較による2本の同心円文	
71	*	No.13	#	#	#					同心貼付文に刺点文	
72	III-C	C-4	#	#	#	褐色				彫り込み文	
73	*	E-3	#	#	#	漆黑				"	
74	III-d	表 採	粗い	#	#	乳褐色					
75	*	F-6	精道	#	#						
76	*	E-3	#	#	#						
77	*	E-2	#	#	#						
78	*	No.8	#	#	#	黑色					
79	*	C-5	#	#	#						
80	*	No.8	#	#	#						
81	III-b	No.13	やや粗い	#	#	黑褐色					

(II) ほとんど全てのものが研磨されている。

土 製 円 板 一 覧 表

番号	出土地点	重さ	大きさ	厚さ	部位	形態
48図1	B-3	10.2g	4.5cm	0.6cm	脇部	少欠・隋円形、穿孔される。縹文が施される。
2	E-1	11.0g	5cm×4cm	0.8cm	#	完形・隋円形・縹文にS状の沈線が描かれる。
3	F-2	10.6g	3cm×3cm	0.8cm	#	完形・円形・無文
4	F-2	19.0g	4.5cm×3.8cm	0.6cm	#	完形・円形・無文
5	E-7	17.5g	4.6cm×4cm	0.6cm	#	完形・円形・無文
6	E-6	13.3g	3.8cm×3.5cm	0.6cm	#	完形・円形・無文
7	表 採	15.8g	4cm×3.5cm	0.6cm	#	完形・隋円形・無文

## IX 土製円板（第48図・1～7）

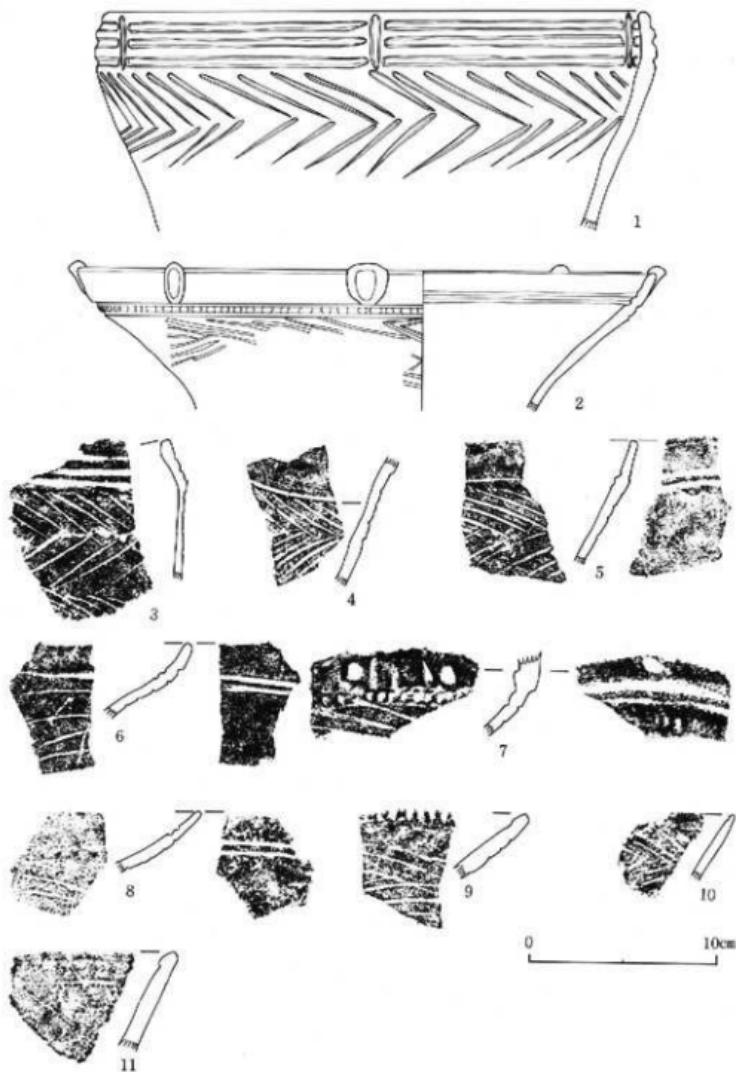
土製円盤の出土は、下前沖遺跡において非常に少ないので上器の破片であるのか、土製円板であるのか土器片の磨滅度が高く識別することが難しい事による。

確認できた土製円板は7個であり（1・3～7）までの6個の製作手法は深鉢土器の胸部を用いて打欠きによって円周部を調整し、（2）は円周部を研磨して調整をほどこしてある。色調は黒褐色・棕褐色・黄褐色で胎土は（1）をのぞいて石粒を含み堅い。（1）は穿孔されており精選された胎土を使用している。  
（中川政信）

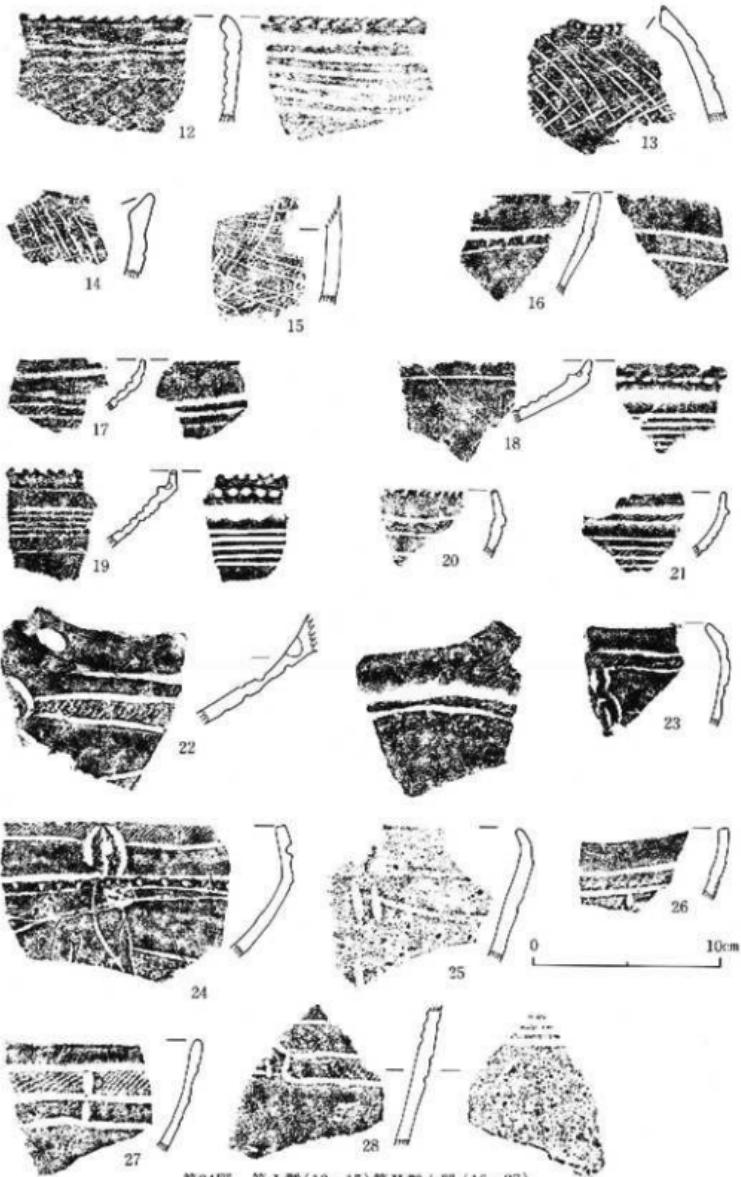
## 第4節 玉類（第48図-1～3）

玉は3点の出土を認める。

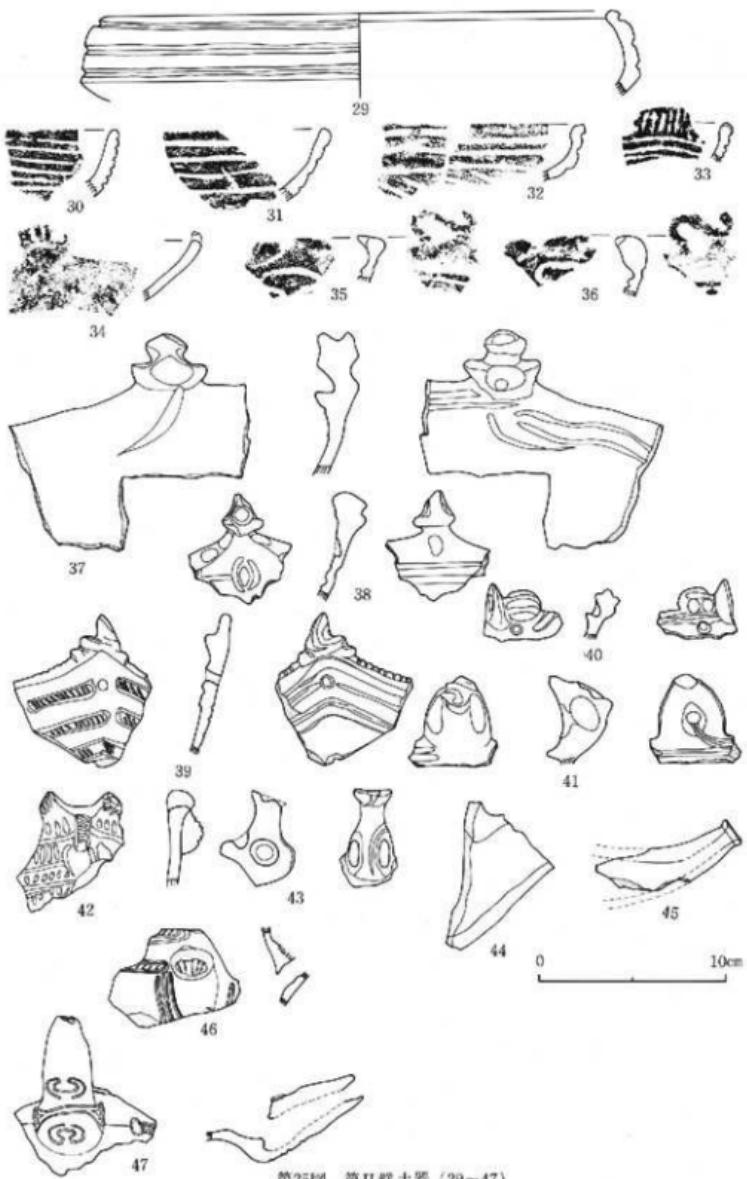
- (1) 重飾状を呈し、茶褐色の石材を用いる。かなり硬質の石である。中央部を片面より穿たれている。径は4mmで、長さは1.3cmである。
- (2) 淡緑色を呈し、紡錘状で両端から穿孔され、さらに側面中央部から穿孔され、中央で結ばれ、穿孔部が丁字状を呈する。硬質で1.7cm×1cmである。ヒスイ製と思われる。
- (3) 小玉状を呈し、緑色であり、ヒスイ製と思われる。一方のみから穿孔される。硬質で、大きさは、1cm×6mmである。  
（小林真寿）



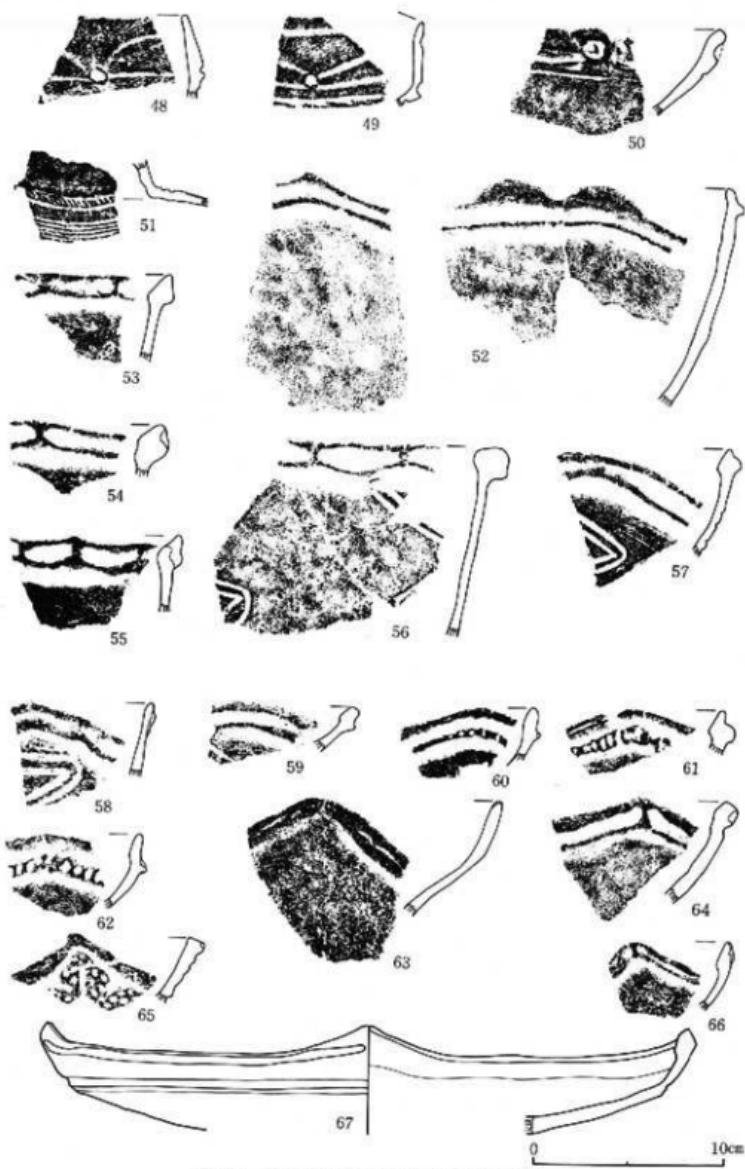
第23図 第I群上器(1~11)



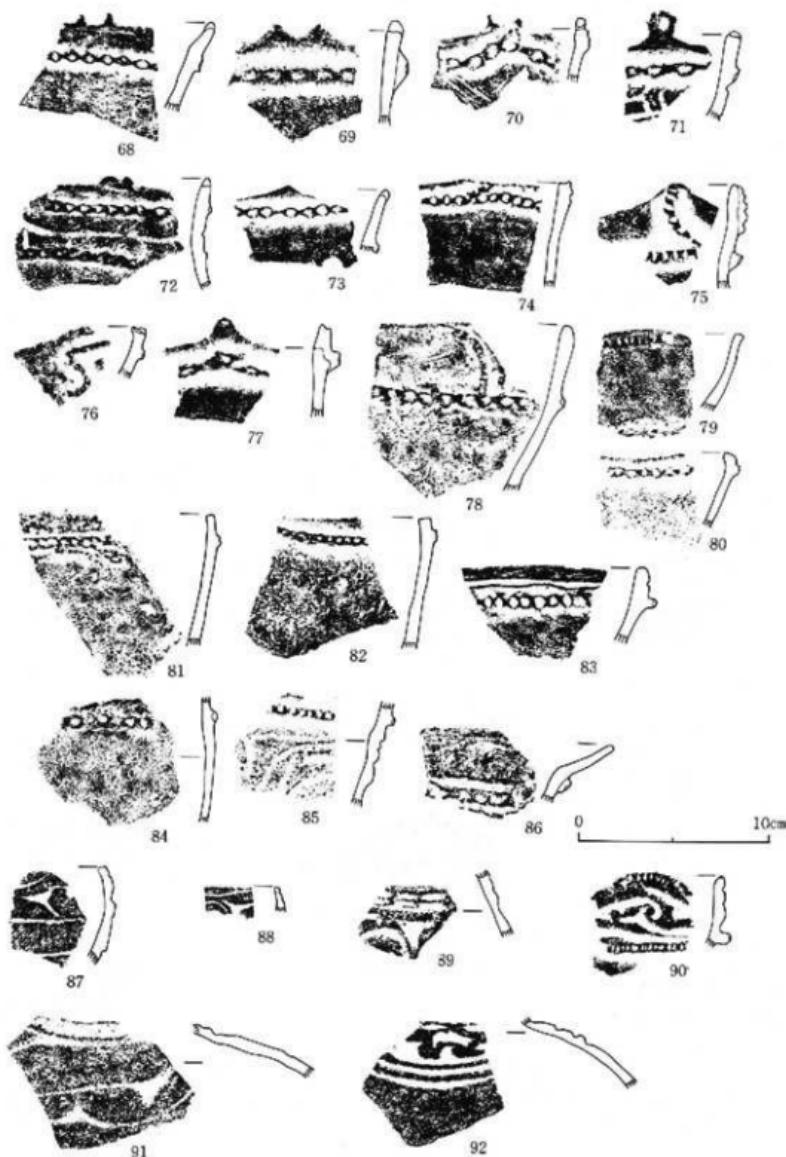
第24図 第I群(12~15)第II群土器(16~27)



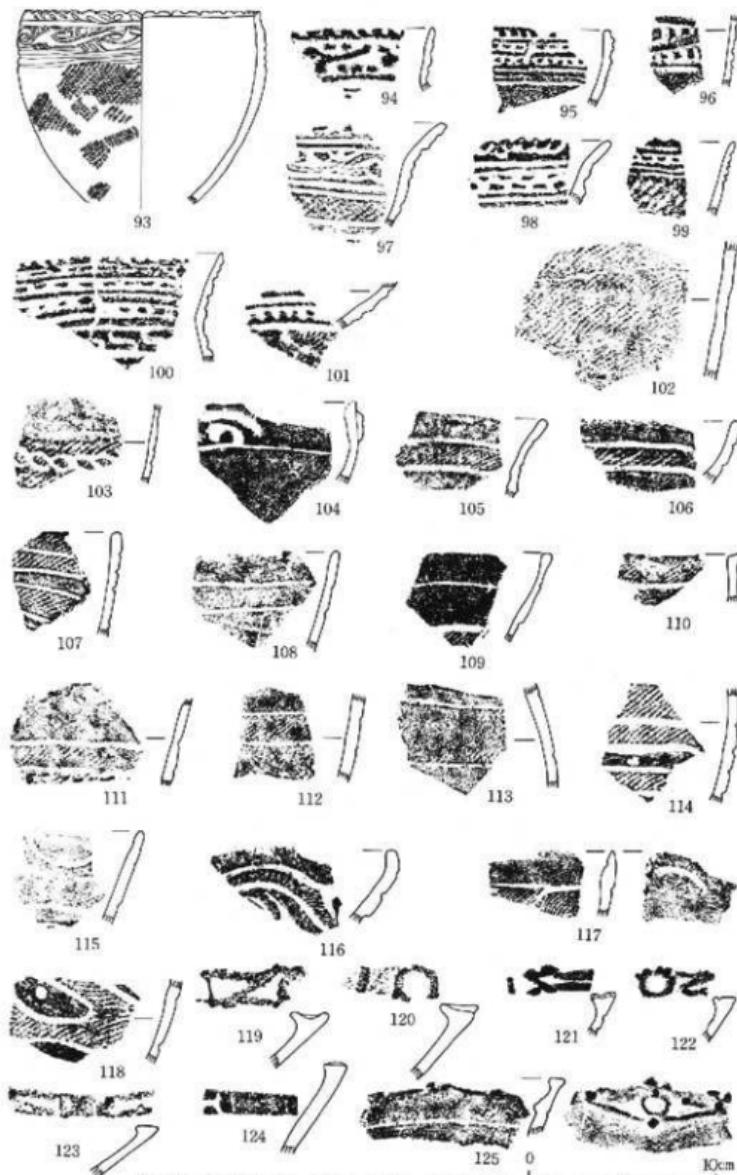
第25図 第II群土器 (29~47)



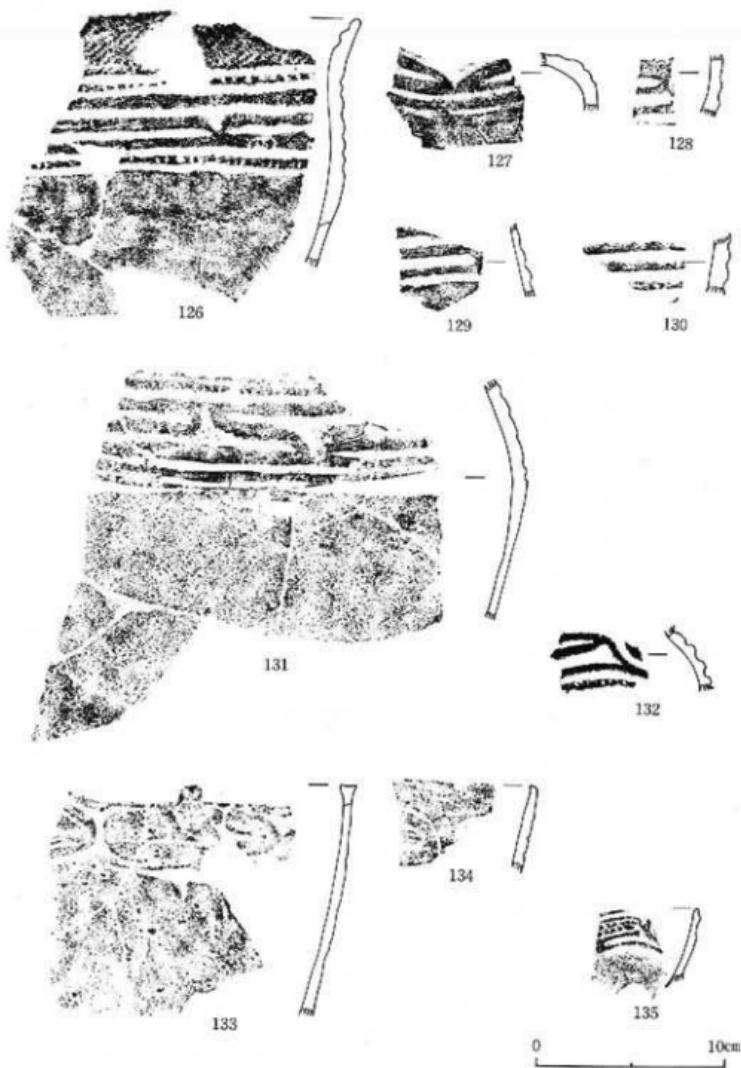
第26図 第II群(48~51)第III群土器(52~67)



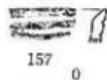
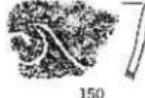
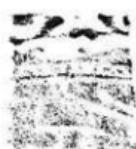
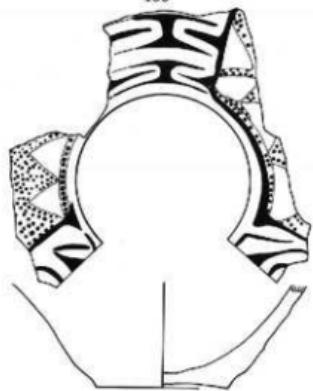
第27図 第VI群(68-86)第V群a土器(87-92)



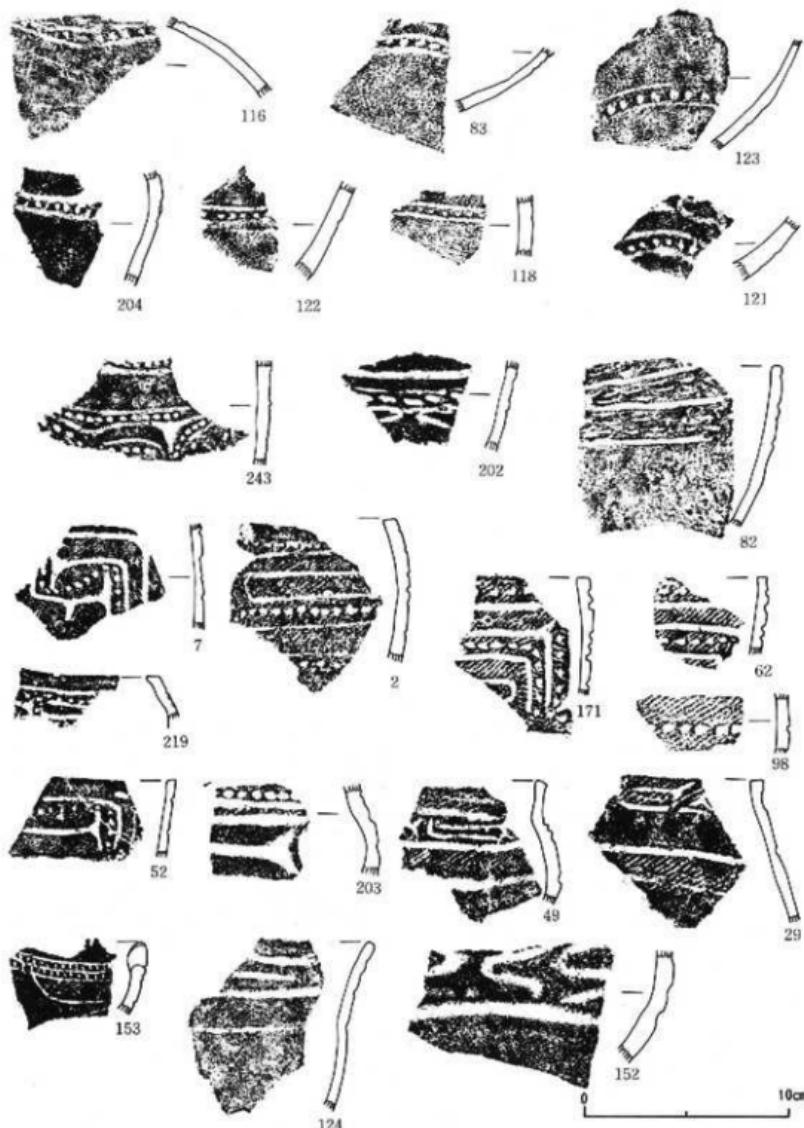
第28図 第V群 b (93~101), c (102~118) d (119~125)土器



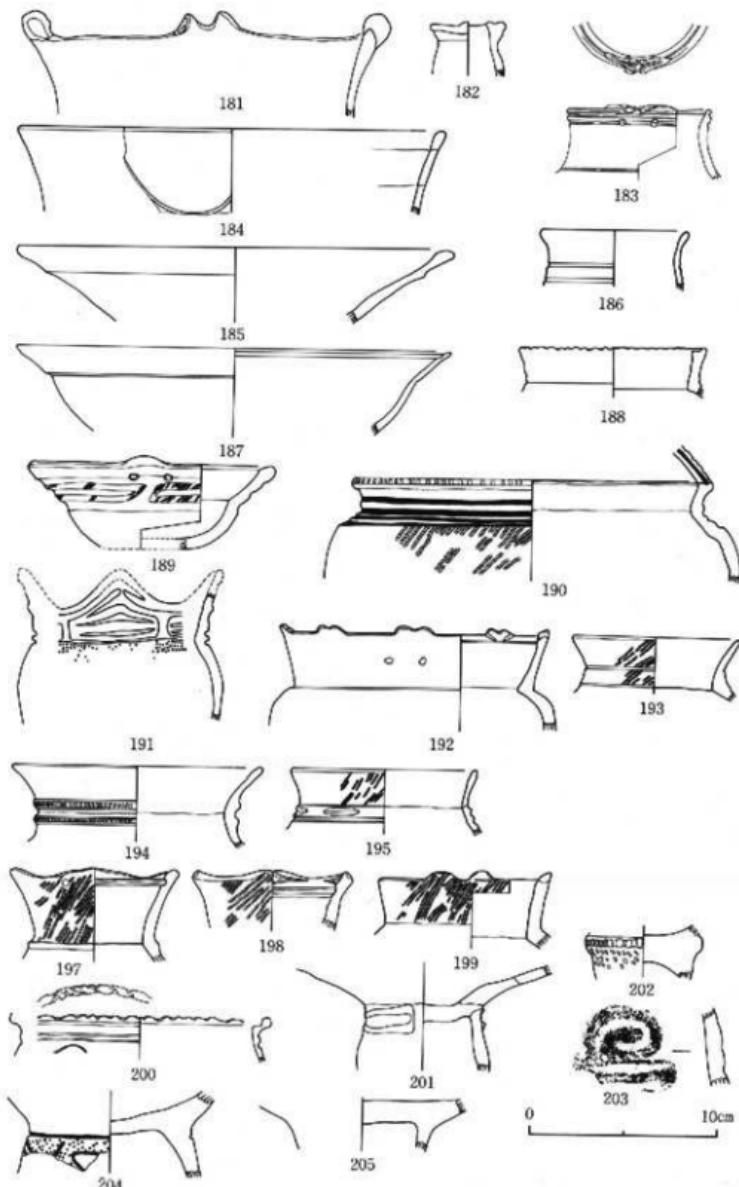
第29図 第V群e土器(126~135)



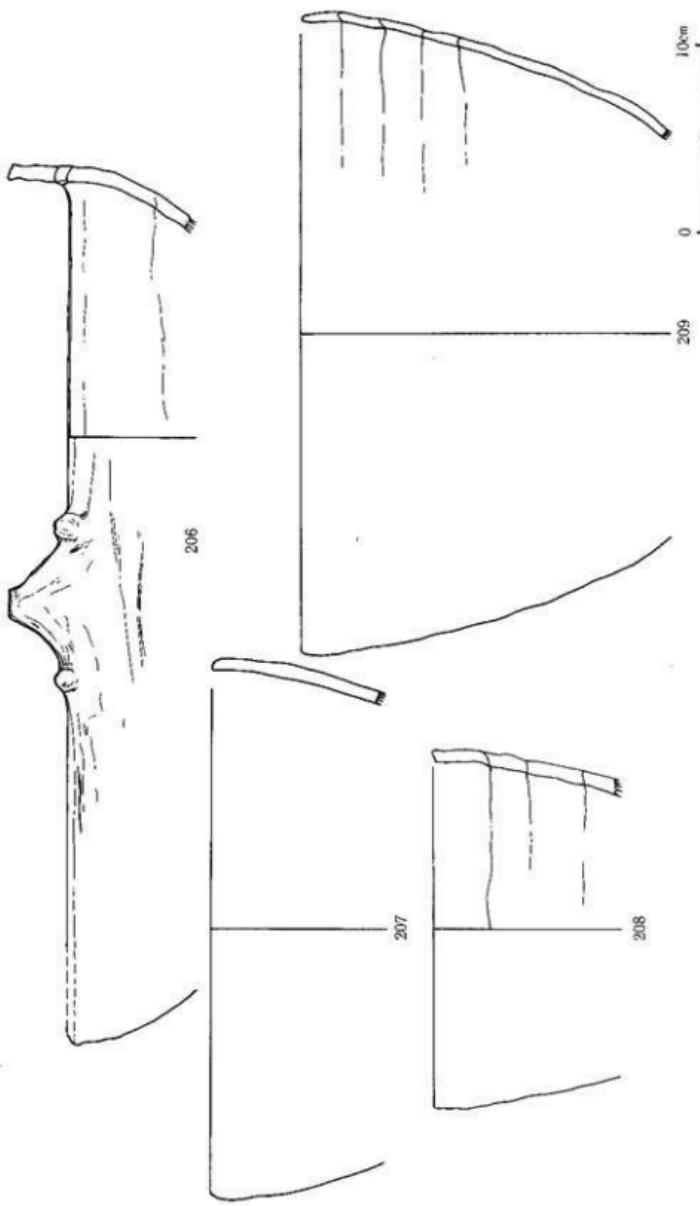
第30図 第V群 e (136), f (137), g (138~144), h(145~151) i (152~157)土器



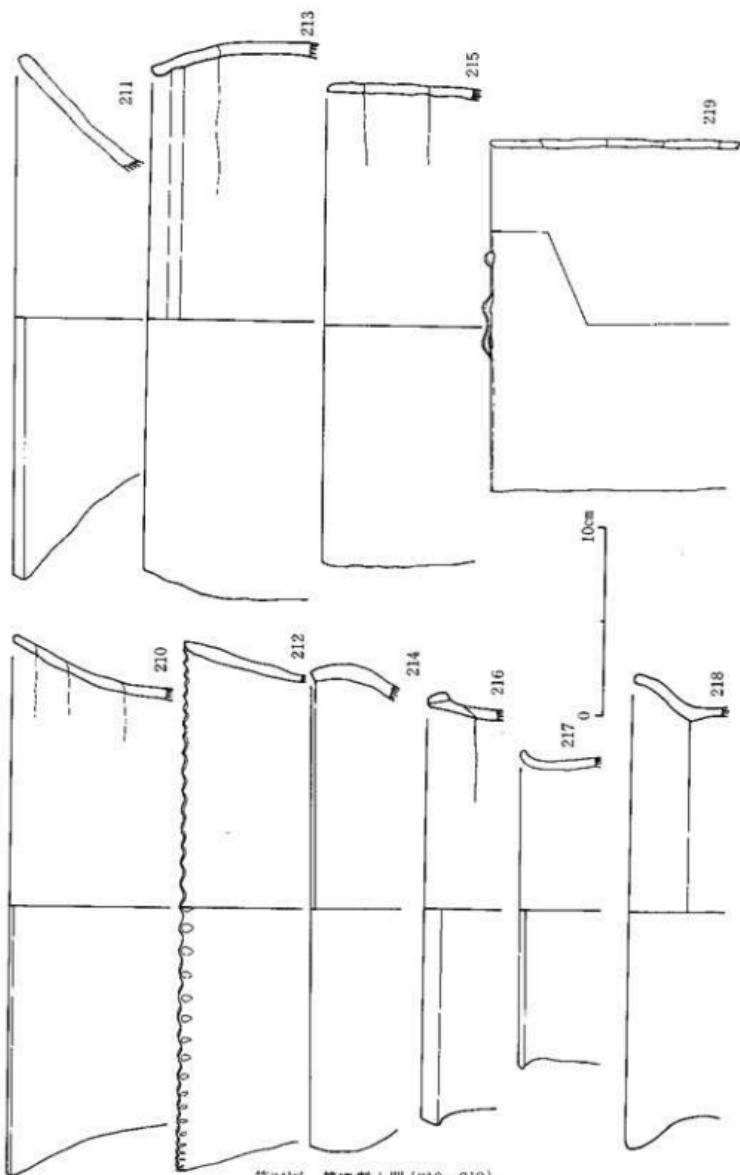
第31図 第V群h(176~180), j(158~167), K(168~174)土器



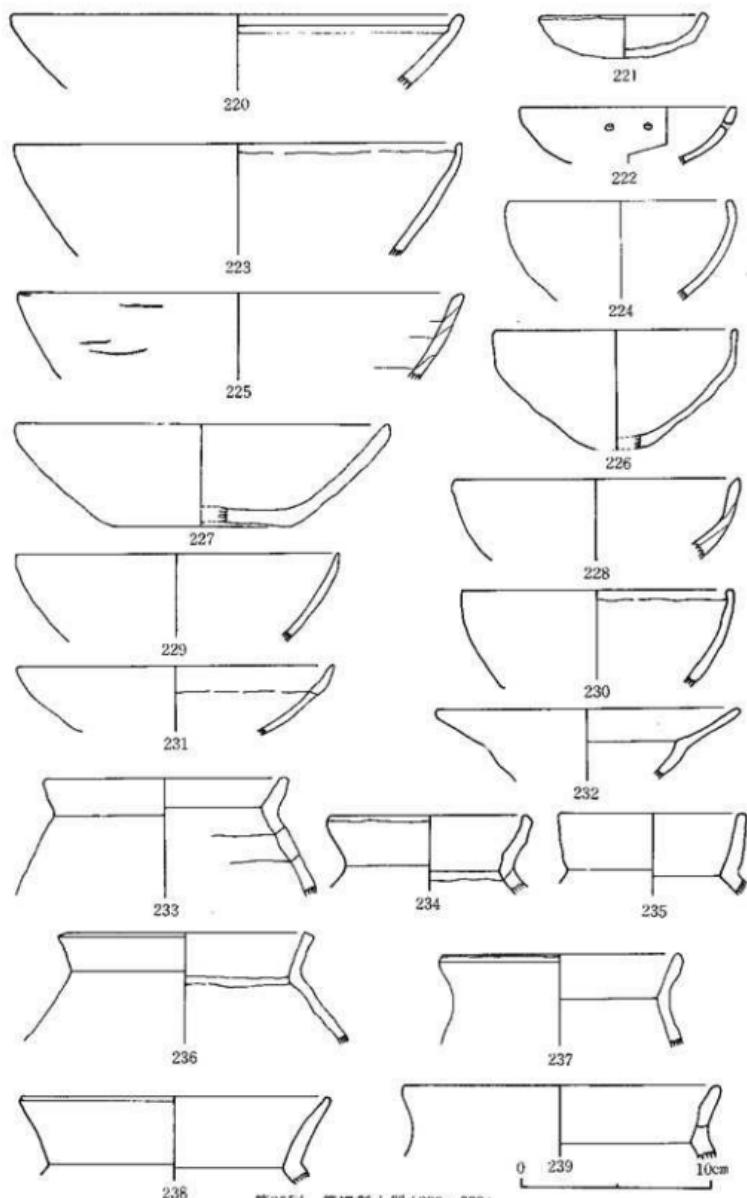
第32図 第V群g (197~199) 第VI群土器 (200~205)



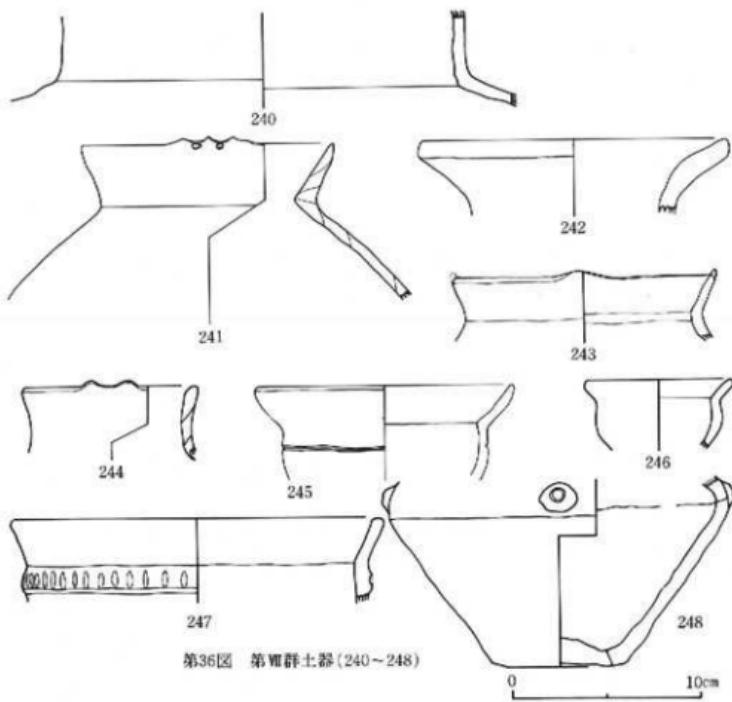
第33圖 第Ⅶ群土器(206~209)



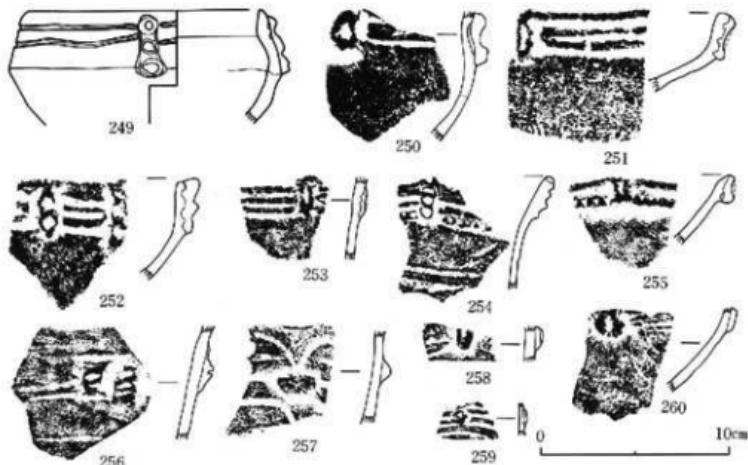
第34図 第3群土器 (210~219)



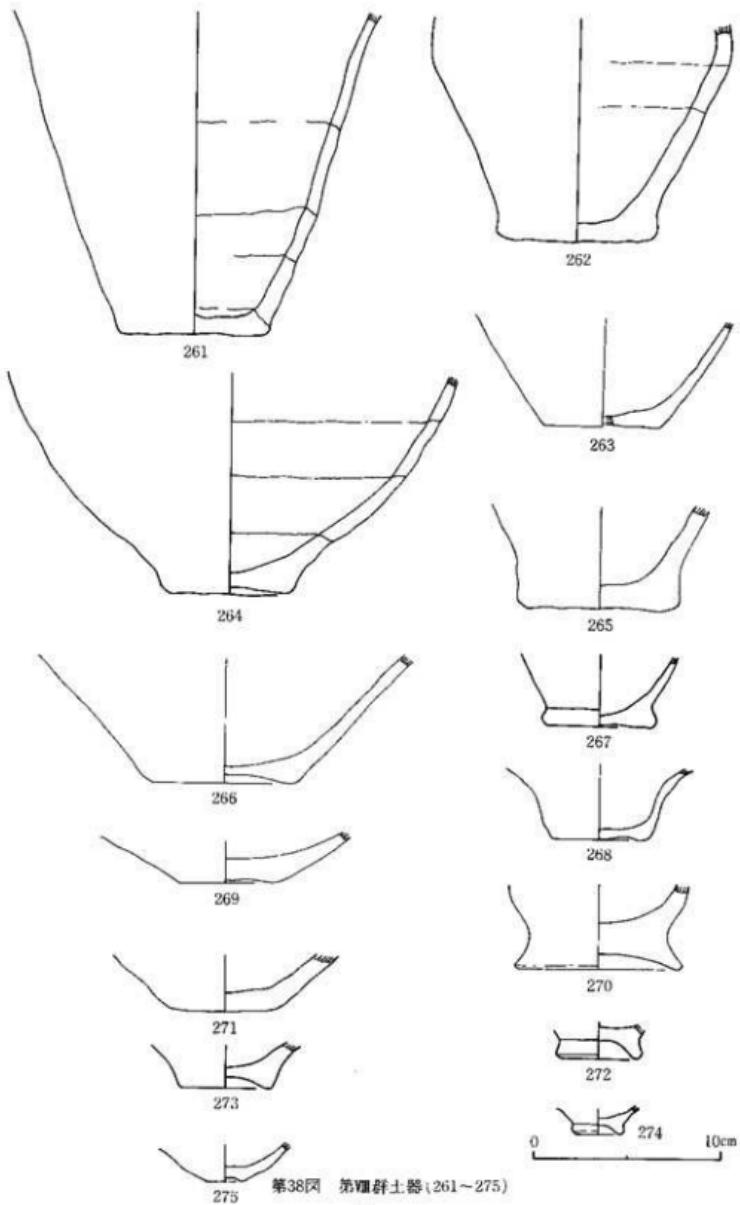
第35図 第VII群上器(220~239)



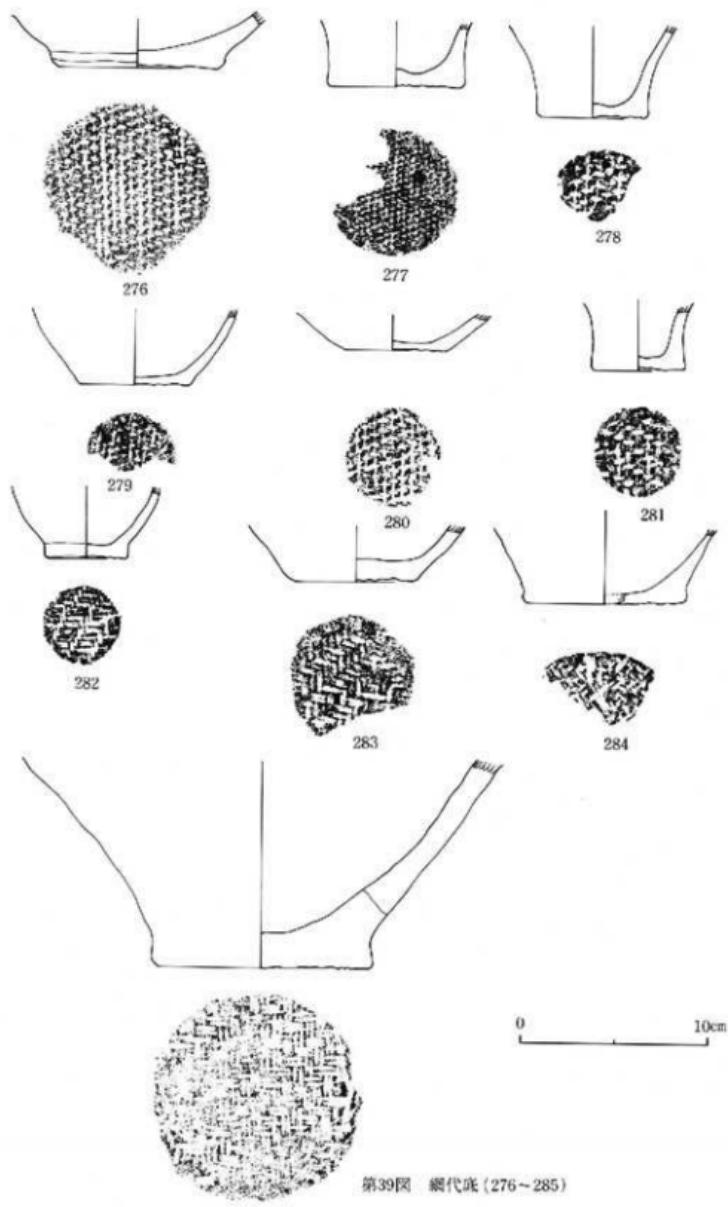
第36図 第3群土器(240~248)



第37図 第3群土器(249~260)



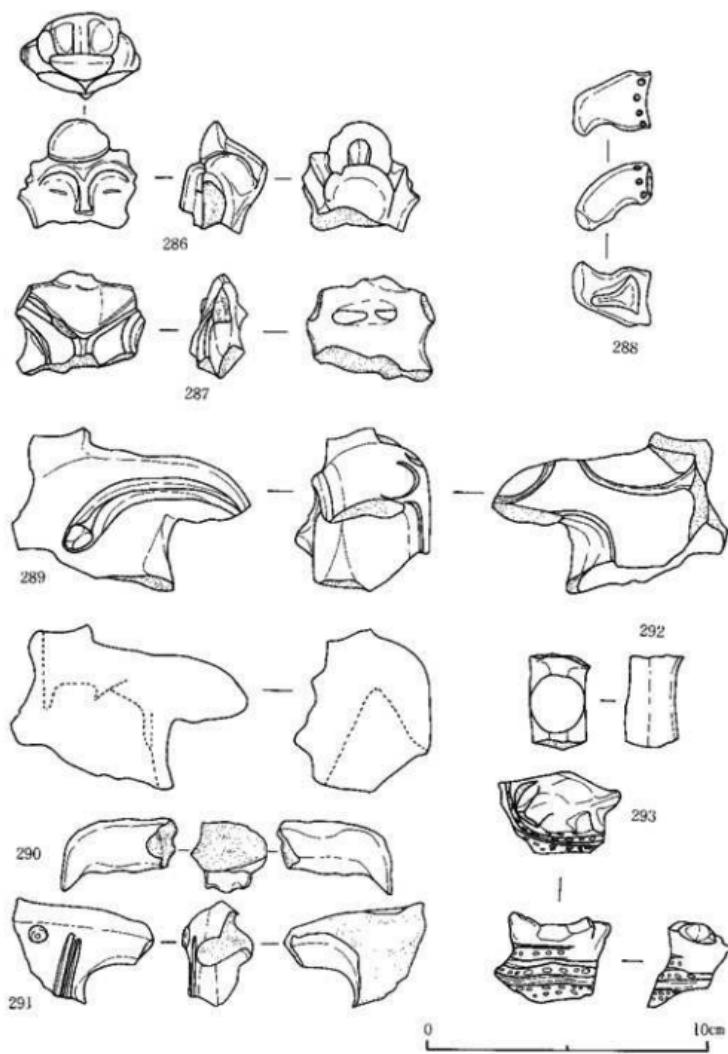
第38図 第四群土器(261~275)



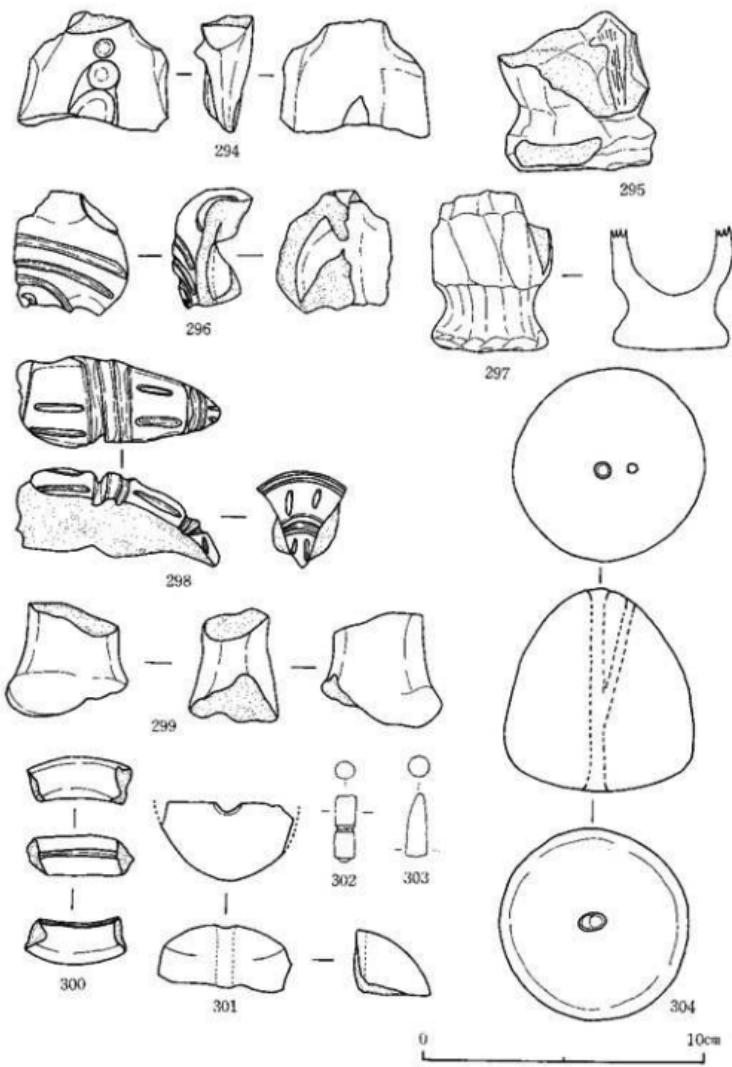
第39図 網代底 (276~285)

285

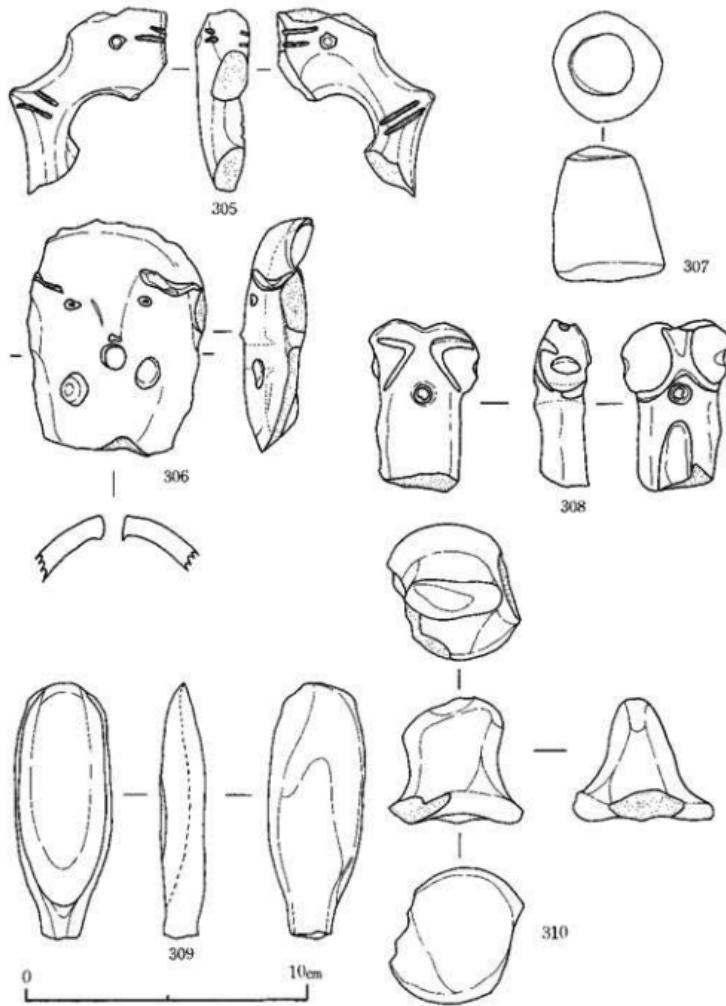
- 55 -



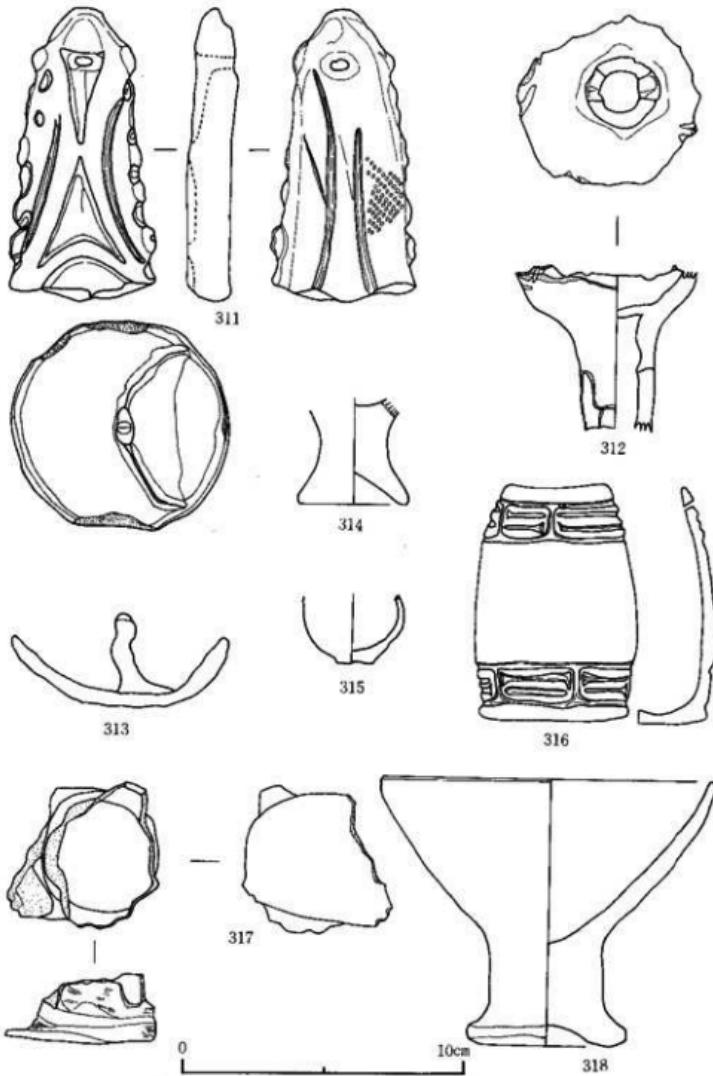
第40図 土偶、土製品(286~293)



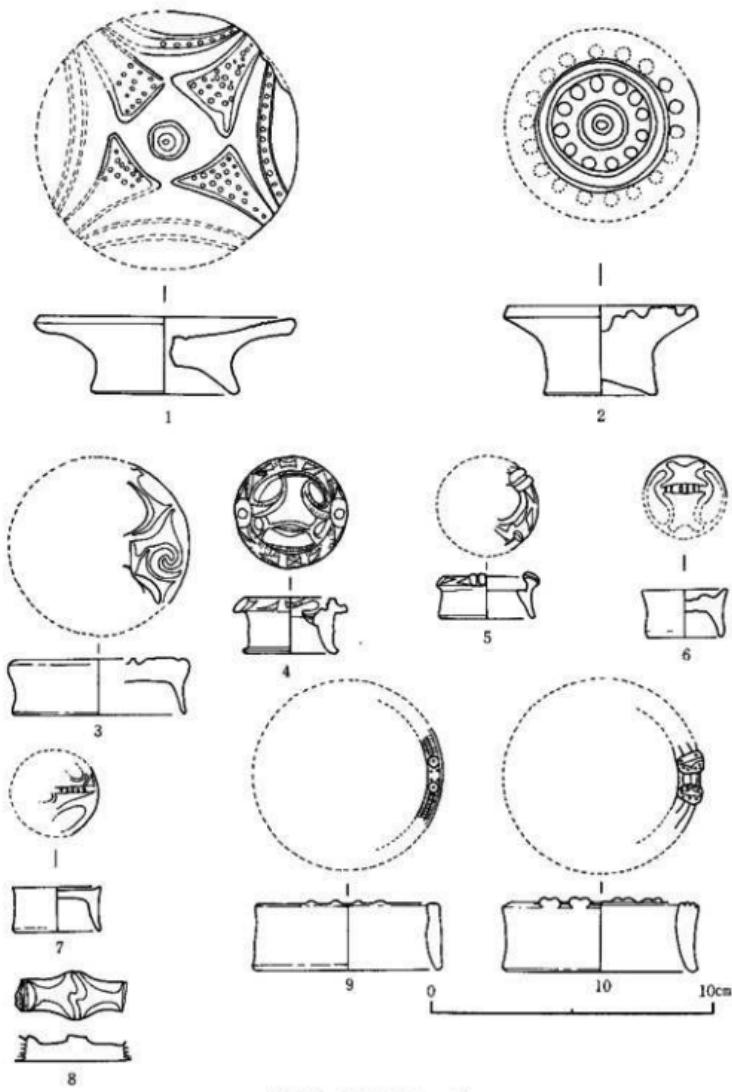
第41図 上偶、土製品(294~304)



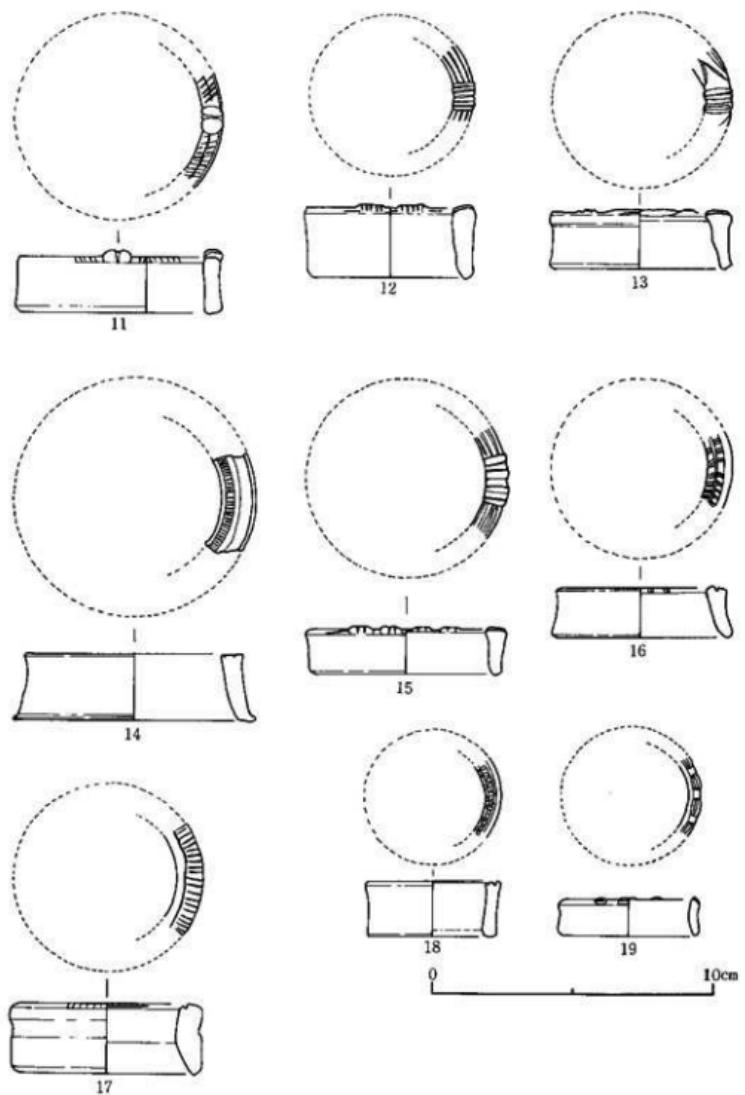
第42図 土製品(305~310)



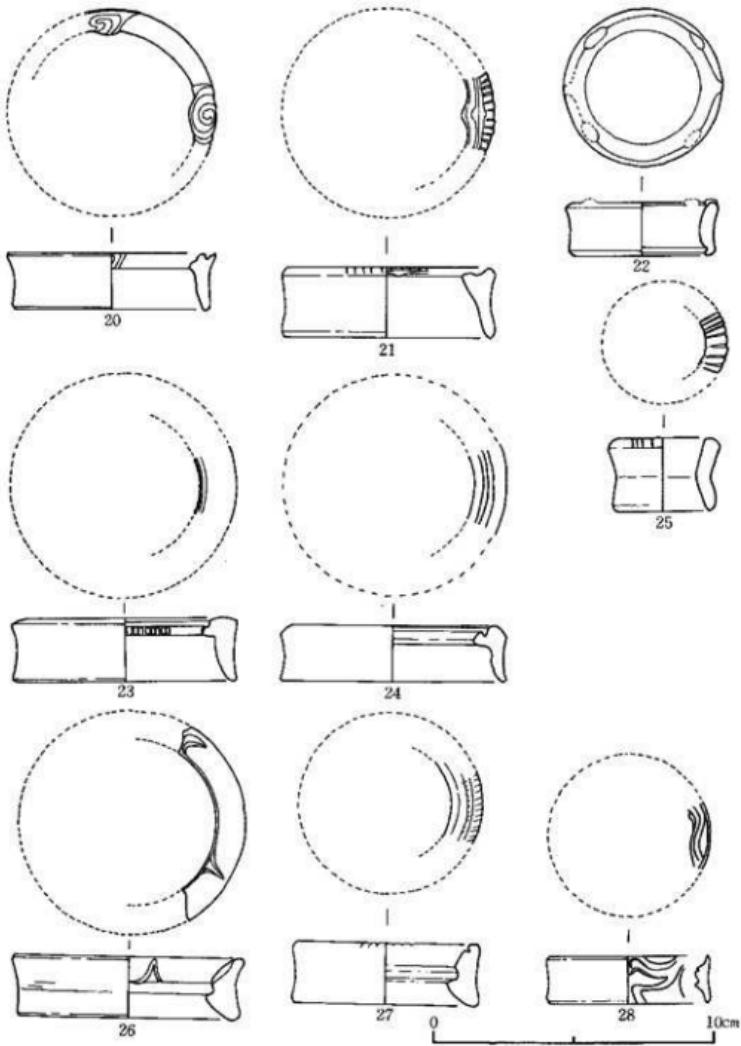
第43図 土製品、小型土器(311~318)



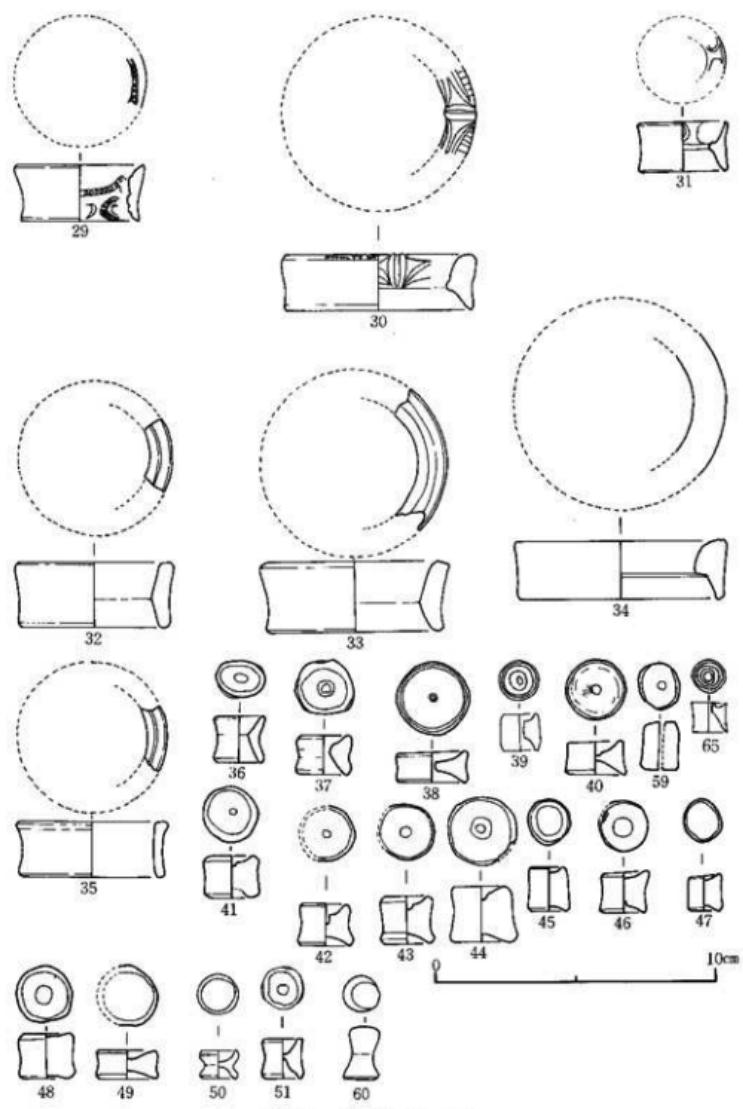
第44図 土製耳飾(1~10)



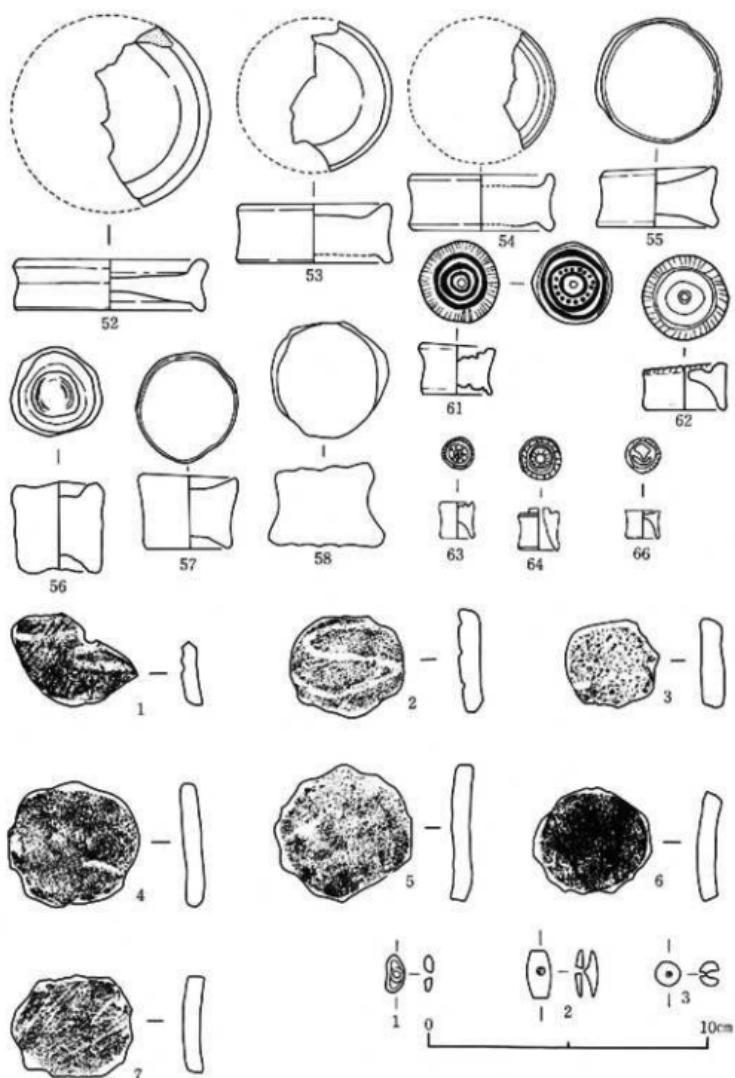
第45図 土製耳飾 (11~19)



第46図 土製耳飾 (20~28)



第47図 土製耳飾 (29~60)



第48図 土製耳飾、土製円板、玉類

## 第5節 石 器

本遺跡より出土した石器類は、発掘面積が350m<sup>2</sup>と狭く、しかも遺跡の全域を調査したのではない点などを考えると、多量・多種であったが、石器の詳細については、石器一点一点の観察をはじめ、他の遺物の出土状況(出土量も含む)・遺跡の環境・周辺遺跡との比較等がなされないと、はっきりしたことは言えない。なお、内訳は石鎌454点・尖頭器4点・石錐56点・打製石斧4点・横刃形石器38点・使用痕ある剝片および加工痕ある剝片(スクレイバーも含む)162点・磨製石斧22点・石錐3点・凹石35点・磨石24点・石皿6点・石核35点・石棒3点・石劍1点・石刀3点・石冠2点・剝片類41点である。

### 石鎌(第49図)

石鎌は、その未製品も含めて454点出土している。有茎のものI類が314点と全体の約70%を占め、無茎のものII類が75点、石錐未製品及び形態が不明なものIII類が65点となっている。石材は黒曜石とチャートが多く、他に頁岩や珪質頁岩などが用いられている。黒曜石は和田岬産のものであろうが、良質のものが比較的少なく、不純物や気泡の混入したものが目立つ。本遺跡では、他の石器類もそうであるが、遺構に伴なって出土したものがほとんどないため、確定的な時期決定は不可能である。しかし、伴出土器が縄文時代後期後葉、加曾利B式期から晩期中葉大洞C式期にはば限定されるので、石器類もこの時期の所産と考えても大過なかろう。そこで、ある程度限定された時期の所産として一括してとらえる事とし、I類・II類それぞれの形態分類を試みた。

#### I a類(第49図)

大形で厚みのあるもの。重量感があり、小形の尖頭器ととらえた方が良いかも知れない。珪質頁岩・頁岩・チャートを用いたものがほとんどで、黒曜石製のものはわずかに4点のみである。総数61点。

#### I b類(第49図)

かなり細身の柳葉形のもので、石錐に類似するが、断面の観察等から石鎌とした。6点検出されたが、いずれも先端部もしくは基部が欠損している。

#### I c類(第49図)

比較的細身のもの。有舌尖頭器に似た形状をなす。総数51点。

#### I d類(第49図)

茎部はI c類と同様であるが、全体的に幅広なもの。最大幅と最大長の差がほとんどなく、両側縁にふくらみを持ったものが多い。55点。

#### I e類(第49図)

茎部が「U」もしくは「ひ」といった形になるもの。ほとんどがチャートか黒曜石製で、大

きさも平均している。I類の中で最も多く見られる形態で、総数91点を数える。

#### I f類（第49図）

周縁を鋸歯状に仕上げたもの。スラリとした二等辺三角形のものと側縁部に段を作り出したものがある。46点。

#### II a類（第49図）

無茎平基なもの。大形で調整の粗いものが多いが、小形で調整が精巧なものも何点か存在する。総数17点。

#### II b類（第49図）

細身の二等辺三角形で、抉りが浅いもの。

石材はバラエティに富んでいる。15点。

#### II c類（第49図）

正三角形に近い形で、抉りが浅いもの。総数17点であるが、そのうち14点が欠損品である。

#### II d類（第49図）

抉りが深いものを一括した。ほとんどが正三角形に近い形で、抉りは弧状もしくは「へ」形を呈する。黒曜石製が最も多い。17点。

#### II e類（第49図）

周縁を鋸歯状に仕上げたもの。いずれも細身の二等辺三角形を呈する。総数9点。

以上、I類・II類の形態分類を行なったが、ここで明らかにされた各形態を規定する要因として、次のような理由が考えられる。まず、素材となる剥片の形状、また製作技術上のくせやそれと石材との関係、さらに当然予想できる獣物による「使い分け」を意識した「作り分け」等である。しかし、これらを実証的に明らかにする方法は、今のところない。今後、様々な角度から分析を試みてみたい。

#### 尖頭器（第49図）

尖頭器は4点出土しており、いずれも両面調整がなされている。そのうち2点は木葉形を呈し他の2点はかなり細身でいわゆる柳葉形を呈している。

第49図15は頁岩製で、先端部が欠損している。比較的数少ない調整によって仕上げられており、基部にはプラットホームであったであろう自然面が残されている。

完形で、左右がほぼシンメトリックで全体的に厚い。

これらの尖頭器は、槍先に装着して使用されたものと考えられるが、量的関係などから見て弓矢の補助的なものとして槍が使用されたのではないかと思われる。

#### 石錐（第49図）

石錐は、総数56点を数える。棒状のものが29点、つまみ部を有するものが27点検出されたがつまみ部を有するものの中には、有茎もしくは無茎石錐を模して、その先端部を長くして錐部とした第49図のようなものも何点か見られた。

### 打製石斧（第50図）

本遺跡では実に多量の石器類が検出されたが、打製石斧はわずかに4点のみである。縄文時代全般を通じて、石器組成の中で大きな割合を占める打製石斧が、なぜこのように少量しか検出されなかったのかについてはいろいろな原因を考えられるが、ここでは触れずにまとめの項で考えてみたい。（20）は短冊形の打製石斧で、刃部と頭部が欠損している。頁岩製である。

（21）は分銅形で、頭部が欠損している頁岩製で、一部に自然面を残している。（22）は撥形で、完形である。これも頁岩製で、意識的に刃部に自然面を残しており、その自然面全体に使用による磨耗痕が見られる（図中斜線部）。こういった打製石斧は中期にもかなり存在しているが、ほとんどが撥形のものであるようである。

### 横刃形石器（第50図）

比較的薄い横長剝片を素材として、その一部に簡単な調整を施して刃部を作出したものを一括した。ほとんど全てが頁岩を用いており、同一母岩のものも相当数にのぼる。使用痕ある剝片および加工痕ある剝片等も、これらと同時に生産された剝片を用いており、大変興味深い。ほぼ同時期の大遺跡である丸子町深町遺跡にも同様な石器が見られるので、今後合わせて検討をしたい。

### 使用痕ある剝片および加工痕ある剝片（第50図）

剝片の一部に、磨耗・刃こぼれ等の痕跡のあるものを使用痕ある剝片とし、縦長剝片の一部に調整を施したものを加工痕ある剝片とした。両者ともその多くは打面を残している。

本遺跡における石器組成の中で大きな割合を占めているが、横刃形石器と同様、十分な検討がなされていない。

### 磨製石斧（第51図）

总数22点のうち、18点もが定角式磨製石斧である。いずれも精巧な作りで、製作時の削痕が多数見られる。（29～34）は、一括して出土しており、形態に若干の違いはあるが、全点チャート製で、大きさも極めて類似した小形の磨製石斧である。（33・34）は刃部が欠損しているが、欠損面に磨耗痕及びその周辺に小剥離が見られることから、欠損後何らかの形で使用されたことが推察される。こういった欠損した石器の再利用については、磨製石斧はもちろん、他の器種についても十分検討がなされなければならないだろう。

これら定角式磨製石斧の他に、乳棒状磨製石斧が4点出土している。中期のものとはやや異なり、両刃（第51図38・40）と片刃（第51図37・39）とがある。

### 石錘（第53図）

長軸方向に一条の溝を作出した所謂有溝石錘が三点出土している。第53図48・49はゴロッとした礫を用い、まず敲打によって凹みを作つてから研磨をして溝を作出しているのに対し、第53図50は扁平な礫を用い、幅狭で浅い溝を研磨によって作り出している。こうした形態や製作法は、あるいはその使用法の違いを物語っているのかも知れない。

### 凹石（第53図）

人为的な凹みを有するものを、すべて凹石とした。総数35点。このうち23点は、自然礫の片面もしくは両面に凹みだけを持つもの（a類）で、9点は凹みを有するが、同時に磨滅痕も有するものの（b類）である。また、（58）のように、三面に凹みを有するもの（c類）も3点検出されている。こうしたバラエティーの他に、凹みの深浅についても検討が必要である。すなわち、凹みが漏斗状をなす深いものと、デコボコして浅いものとは、機能上において明らかに違いがある。本遺跡ではほとんど前者であるが、後者はおそらく一種の台石であろう。

### 磨石（第52図）

総数24点である。磨滅の状態によって、次のような分類を試みた。すなわち、両面に有するものをa類、片面のものをb類、全面のものをc類、帯状のものをd類とした。a類が最も多く18点、b類2点、c類1点、d類3点である。また、（45・46）などのように敲打痕を有するものもあるが、これらはハンマーストーンとしても使用されたであろうが、多くは「すべり止め」として敲打がなされたものと思われる。なお、d類のものは初見であり、特別な使用法が予想され、今後の資料の集積を待ちたい。

（堀田雄二）

## 第6章 おわりに

「下前沖遺跡は昭和20年代に「信濃史料」が編纂された当時は全く知らない遺跡であった。その後、県教委・上田市教委の関係者によって周知の遺跡となった。昭和55年度の岡場整備工事に伴う記録保存として今回の発掘調査となつたのである。

この調査は教育長の序文にある如く前沖内堀遺跡と下前沖遺跡の発掘調査と久保遺跡の立合調査が含まれていた。前沖内堀遺跡は土師器の包藏地であり、且又浦野氏の居館址として中世遺跡とも考えられていた。試掘の結果遺構及び遺物が見られないため発掘調査の必要はなく、また久保遺跡は北側段丘にある山崎遺跡と同時期即ち平安時代の土師器包藏地とされていたが立合調査の結果、地籍は河川敷である河床疊層上にあり、遺構・遺物が認められなく、遺跡ではないとの結論となり立合調査で調査を完了した。

下前沖遺跡の発掘調査はさきに実施した中井遺跡の調査が延引したため、着手が大幅におくれ、調査途中で岡場整備工事着手が迫ることから調査日数をできるだけ短期間とすることになった。幸に多田忠正、大井文雄向氏を中心とする浦野郷土史研究会の諸氏による詳細な事前調査ができており、発掘調査地点の選択がよくでき、テストグリット発掘に於て埋蔵遺構やミニチュア土器の出土などの知見が得られた。

発掘調査は方3m、9m<sup>2</sup>のグリット36箇面積324m<sup>2</sup>という小範囲であったが、調査の成果は多大であった。見事にくまれた六角形の石圍炉、また例の少ない二重石围炉をはじめとする各種の遺構・埋甕に使った大形変形土器をはじめ復原可能な土器片など多量な土器片を発掘することができ、縄文時代後期から晩期に亘る文化内容の充実に寄与できる貴重な資料を得ることができた。土製器では量質ともに多彩な耳栓、土偶などをはじめとし、匙、剣そして形態未知な特殊土製品など学術的に貴重な資料を得ることができた。石製品も多種多様でありなかでも文様彫刻をもった石冠、石劍など文化内容度の高いことを知り得た。

報告書作成が短期間であった為、ふれることができなかつたが、石核（母岩）とそれから剥離した如き石片が多量に出土し、接合作業によって石器製作工程を知り得ることができるような資料も得ることができた。

調査期間中は言及するまでもなく、殊に調査の最終段階に於て多数の土器片、石器及び高密度に散在する砾石などの実測を寒気に耐えながら見事に仕上げた中川調査主任をはじめ若い調査員諸君の労を多とし敬意を表するものである。またこの調査に終始御協力をいただいた地元郷土史研究会のみなさん、自治会の各位、および調査終了後に実施された岡場整備工事中に入手された貴重な資料を心よく提供下さった方々に発掘中にまた遺物の整理時に御指導をいただいた県教委文化課指導主事関孝一氏、白田武正氏、また石質の鑑定に御指導を得た赤塙一巳氏に感謝を申しあげたい。

（五十嵐幹雄）

## 石 鐵 一 覧 表

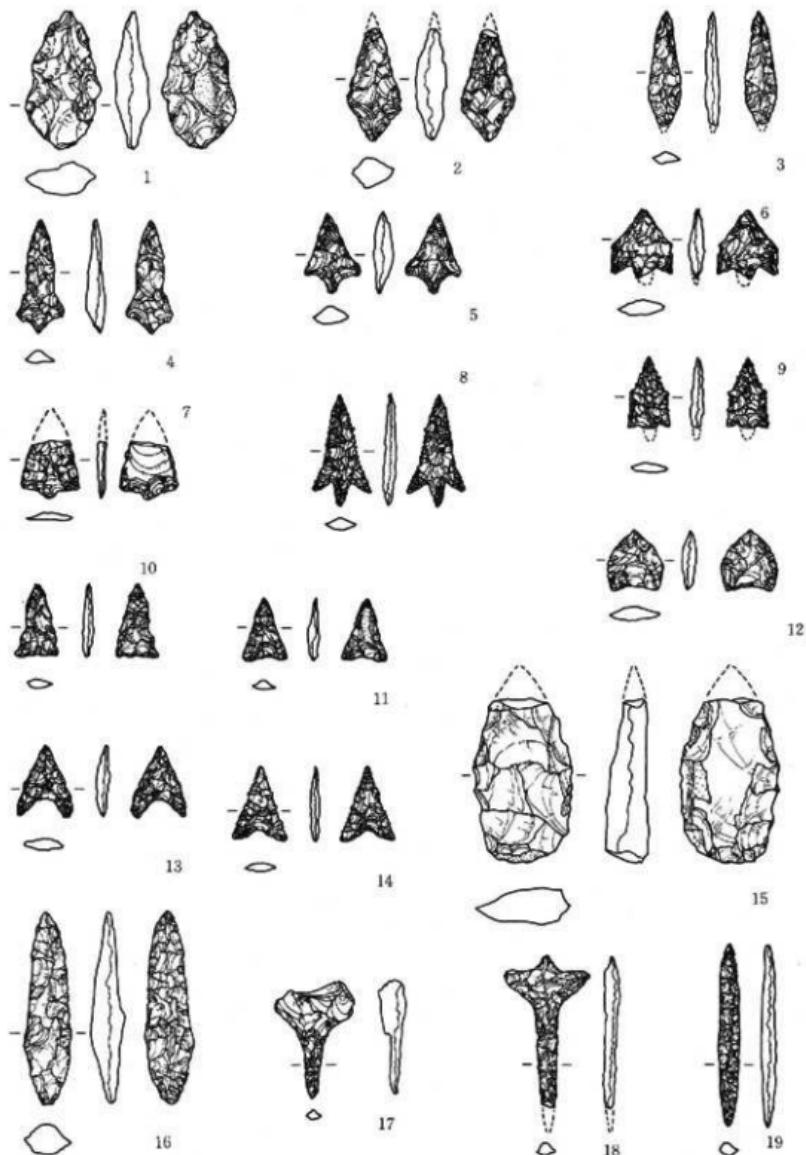
(カッコ内は現存値)

品	出 生 年 代 (年)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	分 類	地 質	No.	出 生 年 代 (年)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	分 類	地 質
1 A-2 <sup>18世紀</sup>	4.5	2.5	1.1			I-a			56 A-6	2.7	(2.1)	0.6			I-a	18世紀欠損	
2 磁 石	1.8	1.0					先端部欠損		57 E-6	(3.0)	(1.9)	0.8				先端部・側縫部欠損	
3 K-5	(3.9)	2.3	1.3						58 C-3	(3.3)	(2.1)	0.9					
4 C-2	3.3	2.8	0.7						59 A-3	(2.3)	(2.2)	0.6					
5 B-4	(3.9)	2.8	0.9				先端部欠損		60 C-1	(2.7)	1.7	0.8				先端部欠損	
6 C-5	2.6	1.7	0.6						61 表 滑	3.2	2.3	0.8					
7 F-2	3.4	2.4	0.9						62 F-2	(3.7)	1.1	0.5				I-b	新潟市欠損
8 F-2	3.6	2.2	0.8						63 C-1	(3.2)	0.9	0.4					
9 D-5	3.6	2.1	1.2						64 D-6	(3.4)	1.4	0.6					先端部欠損
10 C-6	(2.7)	2.5	0.7				先端部欠損		65 D-3	(2.6)	1.0	0.4					
11 D-2	4.2	2.6	0.7						66 B-9	(2.5)	1.1	0.3					
12 K-1	2.9	2.0	0.9						67 E-6	(2.7)	1.0	0.5					先端部欠損
13 表 滑	3.2	2.3	0.8						68 F-1	3.7	1.6	0.6				I-c	
14 B-6	3.2	2.2	0.8						69 表 滑	2.6	1.2	0.4					
15 A-1	3.0	2.4	1.1						70 A-3	2.7	1.3	0.5					
16 B-5	3.1	1.8	0.7						71 F-2	2.5	0.9	0.4					
17 A-3	(1.9)	2.7	0.5						72 表 滑	3.0	1.3	0.5					
18 D-4	3.8	2.1	0.8						73 D-4	(3.1)	1.6	0.5					先端部欠損
19 D-1	2.1	(1.8)	0.7						74 D-6	(3.0)	1.4	0.4					
20 F-7	2.8	2.0	0.9						75 表 滑	3.8	(1.6)	0.6					
21 K-7	3.8	2.6	0.8						76 B-2	4.3	1.3	0.6					
22 表 滑	(2.4)	1.9	0.7						77 表 滑	3.2	1.4	0.4					
23 H-1	2.4	1.8	0.8						78 A-5	3.2	1.2	0.5					
24 C-6	(3.0)	2.7	0.9						79 F-2	2.8	1.3	0.3					
25 D-4	3.3	2.3	0.9						80 A-1	2.3	1.2	0.4					
26 F-2	(2.9)	2.2	0.7						81 D-3	(1.5)	1.0	0.3					
27 E-6	(3.6)	1.8	0.8						82 D-7	(2.3)	1.6	0.5					
28 D-7	2.4	1.9	0.7						83 B-4	(2.5)	1.3	0.4					
29 B-5	2.6	2.4	0.3						84 表 滑	3.2	1.4	0.3					片山同盟
30 D-1	3.1	2.3	0.6						85 D-4	2.9	1.2	0.4					
31 D-4	2.6	2.2	0.5						86 C-5	3.5	1.5	0.6					
32 B-1	3.0	2.2	0.7						87 (E-4)	3.2	1.5	0.5					
33 表 滑	4.2	2.2	0.8						88 D-1	2.8	1.5	0.5					
34 A-5	(3.9)	2.7	0.8						89 F-2	(2.9)	1.3	0.4					
35 C-5	(2.5)	2.2	0.6						90 E-5	(2.8)	1.3	0.4					
36 B-6	(2.6)	2.2	0.8						91 C-6	(2.5)	2.0	0.4					
37 F-2	(2.5)	1.7	0.7						92 D-5	(2.5)	1.7	0.4					
38 B-5	(2.9)	2.2	0.6						93 (D-2)	(2.7)	(1.3)	0.3					
39 F-1	3.1	1.9	0.7						94 B-1	(2.4)	1.3	0.4					
40 F-2	(2.5)	1.9	0.7						95 表 滑	(2.8)	1.5	0.4					
41 F-2	3.9	2.9	0.7						96 F-2	(2.3)	1.2	0.4					
42 D-2	3.0	(1.7)	0.8						97 C-1	(3.3)	1.2	0.5					
43 表 滑	3.2	(2.2)	0.6						98 F-2	(2.8)	1.6	0.5					
44 E-3	4.3	1.9	0.8						99 (E-1)	2.6	1.3	0.3					
45 D-7	2.8	1.9	0.8						100 表 滑	4.1	1.5	0.4					
46 A-3	(2.5)	2.5	0.5						101 F-2	3.0	1.1	0.6					
47 E-7	(3.7)	2.5	0.7						102 F-4	2.6	1.9	0.4					
48 F-2	(2.8)	1.8	0.6						103 F-2	(2.3)	1.1	0.4					
49 F-2	(2.5)	1.7	0.6						104 D-6	(3.1)	(1.5)	0.3					
50 A-5	(2.5)	3.1	0.8						105 F-2	3.4	1.7	0.5					
51 F-2	(2.9)	1.9	0.7						106 F-2	(2.2)	(1.0)	0.3					
52 F-4	(2.7)	2.1	0.7						107 F-2	(2.8)	(1.5)	0.4					
53 E-4	(3.0)	2.1	0.7						108 E-1	(3.3)	(1.3)	0.4					
54 F-2	(1.8)	1.8	0.6						109 F-11	(3.4)	1.3	0.5					
55 A-6	2.5	2.4	0.7						110 B-2	(3.1)	1.3	0.4					

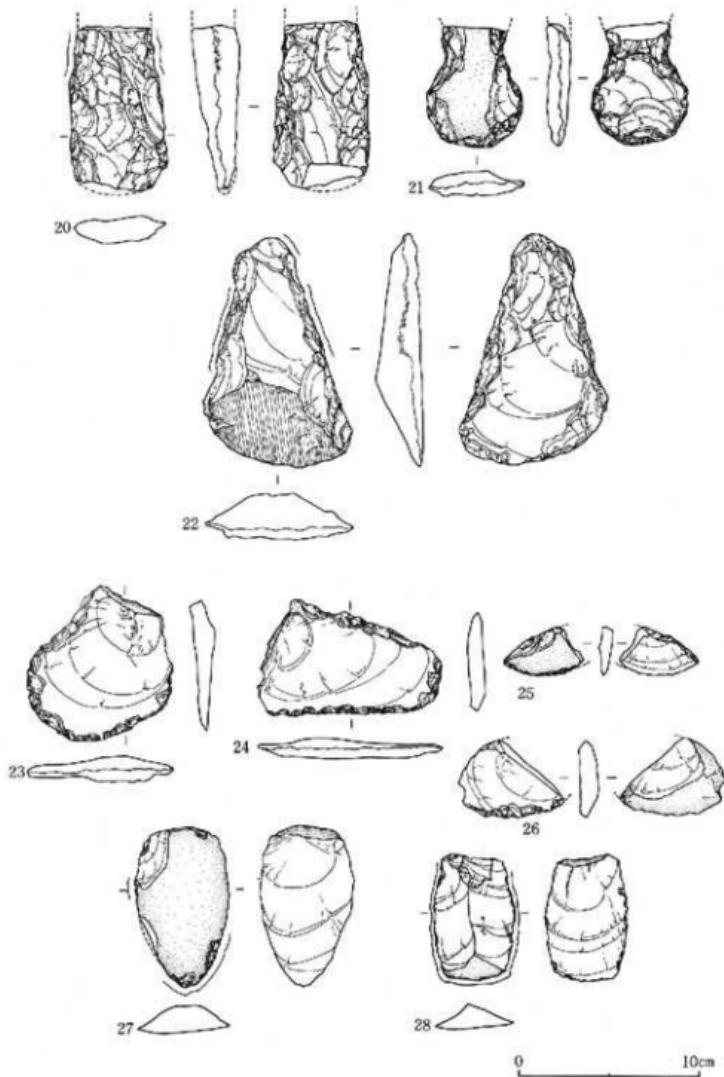
No.	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考	No.	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	分類	備考
111	B-3	2.6	1.5	0.6	黒曜石	I-C			169	B-4	(2.0)	(1.6)	0.5			I-d	先端部・側縫隙・基部欠損
112	E-7	2.3	1.2	0.5					170	B-4	(2.7)	(1.6)	0.4				
113	E-3	2.9	1.8	0.5					171	B-6	(2.1)	(1.7)	0.4				
114	E-6	0.77	1.5	0.3					172		2.9	1.8	0.5				
115	B-1	(1.7)	(1.5)	0.4					173	F-6	2.1	(1.2)	0.5	黒曜石	P		側縫隙部欠損
116	C-3	(2.2)	1.4	0.5					174	K-2	(2.1)	2.0	0.5			I-e	基部欠損
117	"	(1.9)	1.2	0.3					175	Q-9	(2.0)	1.9	0.3	チャート	P		先端部欠損
118	C-5	2.1	(1.1)	0.3	チャート	P			176	次	2.1	1.3	0.4				
119	D-5	2.6	1.8	0.7					177		2.4	1.6	0.5				
120	C-4	3.1	1.7	0.6	黒曜石	I-d			178	F-4	2.3	1.5	0.4	チャート	P		
121	"	2.6	1.5	0.5					179	F-3	2.6	1.9	0.5				
122	E-3	2.4	1.5	0.5					180	E-7	2.0	1.5	0.3				
123	E-1	(2.3)	1.6	0.5	チャート	P			181	E-7	2.3	(1.1)	0.3				
124	E-2	2.4	2.1	0.5					182	E-4	(3.1)	1.7	0.5				
125	E-4	2.6	1.7	0.5	黒曜石	P			183	E-6	(2.6)	(1.4)	0.4	チャート	P		先端部・集結部・基部欠損
126	"	2.2	1.7	0.7					184	次	(2.4)	(1.4)	0.3				
127	"	(2.5)	1.9	0.5					185	A-6	(2.5)	(1.0)	0.4	黒曜石	P		
128	E-5	(2.1)	2.3	0.3	チャート	P			186	次	(2.2)	(1.5)	0.4	チャート	P		
129	E-6	(2.9)	1.8	0.7					187	Q-1	2.1	1.4	0.2				
130	次	2.0	1.4	0.4					188	B-3	3.1	2.0	0.4				
131	"	2.5	1.6	0.5					189	B-2	2.4	1.3	0.4	黒曜石	P		面凹均縫隙
132	D-3	(2.3)	1.9	0.5					190	C-1	2.4	2.0	0.3				
133	D-1	3.0	1.6	0.5					191	"	(1.5)	1.3	0.3	チャート	P		先端部・茎部調整
134	B-1	3.1	(1.7)	0.4					192	次	(2.7)	1.4	0.5				
135	A-5	2.5	(1.5)	0.6	チャート	P			193	E-5	(1.4)	1.9	0.3				
136	D-4	2.1	1.3	0.4	黒曜石	P			194	C-3	(2.3)	1.8	0.3				
137	"	(2.8)	(1.6)	0.9					195	次	(2.3)	1.8	0.4				茎部欠損
138	"	(1.6)	(1.5)	0.4	チャート	P			196	D-2	(2.8)	1.5	0.4	黒曜石	P		
139	黒	(2.2)	(1.4)	0.4					197	"	2.2	1.9	0.4	チャート	P		
140	E-4	(1.7)	(1.3)	0.6					198	"	(1.4)	1.6	0.4				茎部欠損
141	"	(1.7)	(1.1)	0.4					199	次	(2.4)	1.8	0.3	黒曜石	P		
142	F-3	1.8	1.4	0.3					200	D-1	(2.2)	1.7	0.3				
143	C-4	5.0	1.7	0.5	チャート	P			201	"	2.3	1.9	0.5				
144	"	(1.3)	1.4	0.4					202	D-2	(2.6)	1.9	0.3				
145	B-1	(2.9)	(1.9)	0.6					203	"	(2.1)	(1.5)	0.3				
146	次	2.3	1.4	0.3					204	T-1	3.1	1.6	0.6				
147	A-2	2.1	1.3	0.6	黒曜石	P			205	E-5	(2.0)	2.0	0.3	チャート	P		先端部欠損
148	黒	(1.9)	1.2	0.3	チャート	P			206	B-2	(1.8)	1.9	0.3	黒曜石	P		
149	F-6	(1.4)	1.3	0.4					207	H-6	(2.0)	1.2	0.3				
150	C-5	(1.7)	1.3	0.4					208	F-1	(1.7)	1.7	0.5				
151	C-6	2.3	1.5	0.3					209	E-6	(2.4)	(1.9)	0.4	チャート	P		側縫隙・茎部欠損
152	D-6	1.8	1.6	0.5					210	"	(1.8)	(1.4)	0.3	黒曜石	P		
153	"	(1.8)	(1.7)	0.5	チャート	P			211	B-1	(1.0)	(1.5)	0.5				
154	次	(1.7)	(1.4)	0.5	五環行	P			212	次	(1.5)	(1.7)	0.3				
155	B-2	(1.9)	1.4	0.4					213	D-2	(1.8)	(1.5)	0.4				
156	次	(1.8)	1.3	0.5					214	A-3	4.2	(1.8)	0.3				
157	F-4	(2.1)	1.8	0.5					215	D-4	2.0	1.6	0.3				
158	"	(1.8)	1.7	0.4	チャート	P			216	D-6	1.8	1.1	0.3				
159	A-3	(2.0)	1.3	0.5					217	D-4	2.7	1.6	0.4	チャート	P		
160	D-2	(1.9)	1.3	0.5					218	"	(2.1)	1.8	0.5				
161	"	1.6	1.0	0.3	黒曜石	P			219	"	(2.0)	(1.5)	0.3				
162	"	2.3	1.5	0.4					220	次	(2.4)	1.9	0.7				
163	C-6	2.4	1.4	0.6	黒曜石	P			221	"	(1.9)	1.5	0.5				
164	次	1.9	1.5	0.4					222	C-6	(1.7)	1.2	0.4	黒曜石	P		
165	C-6	(2.3)	1.7	0.5					223	"	(1.8)	1.5	0.4	チャート	P		
166	F-2	(2.3)	1.7	0.5					224	黒	2.2	1.5	0.4	黒曜石	P		
167	"	(2.3)	1.8	0.5					225	B-5	2.3	1.5	0.4				
168	B-5	(2.4)	1.8	0.5					226	A-5	1.5	1.5	0.3				

No.	高さ cm	横幅 cm	厚さ cm	重さ kg	岩質	分類	備考	No.	出 き	地表高 m	最大幅 cm	厚さ cm	重さ kg	岩質	分類	備考
227 D - 6	(1.3)	1.6	0.4		チャート	I - e	先端部・基部欠損	285 D - 4	(1.0)	1.8	0.4				I - f	先端部・基部欠損
228 H - 3	(1.1)	1.2	0.4		黒曜石	#		286 A - 2	(2.4)	1.3	0.5		黒曜石	#	#	基部欠損
229 A - 3	(2.0)	1.4	0.3			#		287 B - 2	(2.2)	1.7	0.4			#	#	
230 D - 2	(2.0)	1.3	0.4			#		288 B - 5	(2.8)	1.4	0.6			#	#	
231 C - 5	(1.8)	1.9	0.4		チャート	#		289 A - 4	(2.0)	1.5	0.4			#	#	
232 F - 2	(1.7)	1.5	0.4			#		290 B - 2	(2.9)	1.5	0.3			チャート	#	
233 黒 磨	(2.0)	1.6	0.4			#	片岩閃緑岩	291 C - 2	2.6	1.2	0.4			#	#	
234 #	(2.0)	1.4	0.4			#		292 A - 5	(1.9)	(1.5)	0.4		黒曜石	#	#	側縫隙・基部欠損
235 C - 4	(2.4)	1.8	0.5			#	断節欠損	293 B - 5	(1.7)	(1.7)	0.4			#	#	
236 E - 1	(3.0)	2.1	0.4			#	未製品?	294 D - 7	(1.9)	(1.4)	0.4			#	#	
237 #	(2.2)	1.9	0.5			#		295 E - 7	(3.0)	(2.0)	0.5			#	#	
238 A - 5	(1.9)	1.4	0.3			#		296 E - 4	(2.4)	(1.4)	0.3		チャート	#	#	
239 A - 1	(2.4)	1.3	0.5		チャート	#	片岩閃緑岩	297 N - 2	(2.1)	(1.4)	0.4			#	#	
240 D - 7	(1.5)	1.2	0.4			#		298 D - 2	(2.7)	(1.8)	0.3			#	#	
241 D - 11	(2.5)	1.4	0.3		黒曜石	#		299 D - 3	(2.7)	(1.6)	0.4			#	#	
242 C - 5	(2.6)	1.6	0.3		チャート	#	先端部欠損	300 D - 4	(2.0)	1.9	0.3			#	#	先端部欠損
243 C - 4	(2.3)	1.7	0.4			#		301 D - 3	(1.8)	1.3	0.3			#	#	
244 黒 磨	(2.2)	1.6	0.3			#		302 D - 4	(1.4)	1.3	0.4		黒曜石	#	#	
245 E - 1	(1.5)	1.4	0.4			#		303 D - 2	(2.0)	(1.3)	0.3		チャート	#	#	側縫隙・基部欠損
246 №13	(2.2)	1.9	0.3			#		304 B - 3	(1.4)	(1.8)	0.5			#	#	先端部・基部欠損
247 表 接	(2.2)	2.0	0.5			#		305 A - 5	(1.5)	(1.1)	0.5			#	#	
248 A - 4	2.5	(1.3)	0.5		黒曜石	#	側縫隙欠損	306 C - 5	2.7	1.6	0.4			#	#	
249 C - 4	2.4	(1.3)	0.3			#		307 A - 2	2.0	1.2	0.4		黒曜石	#	#	
250 H - 3	1.6	(1.4)	0.4			#		308 B - 4	2.3	1.5	0.4			#	#	
251 E - 1	2.5	(1.4)	0.4			#	、欠損後修正	309 E - 3	(2.3)	1.5	0.4			#	#	先端部・基部欠損
252 A - 5	2.3	1.4	0.4		チャート	#		310 F - 1	(2.2)	1.2	0.3			#	#	
253 №6	2.3	(1.6)	0.4			#		311 A - 1	(1.1)	1.4	0.3		黒曜石	#	#	
254 丸 磨	1.9	1.5	0.4			#		312 A - 2	(1.9)	(1.5)	0.3			#	#	先端部・側縫隙・基部欠損
255 B - 1	(2.4)	(1.0)	0.4		チャート	#	先端部・側縫隙欠損	313 B - 5	(1.8)	(1.3)	0.3			#	#	
256 D - 3	(2.1)	(1.4)	0.4			#		314 C - 6	2.4	1.4	0.4		黒曜石	II - a		
257 D - 1	(1.6)	1.6	0.4		黒曜石	#		315 表 接	2.5	(1.4)	0.4			#	#	側縫隙欠損
258 A - 5	(2.2)	(1.9)	0.5		チャート	#	側縫隙・基部欠損	316 C - 4	1.8	(1.1)	0.3		チャート	#	#	基部欠損
259 D - 4	(2.8)	(1.6)	0.4			#		317 C - 3	1.4	(1.0)	0.3		黒曜石	#	#	
260 F - 2	(3.3)	(1.0)	0.4			#		318 F - 1	(1.4)	1.1	0.3			#	#	先端部欠損
261 D - 6	(1.8)	(1.3)	0.4			#		319 D - 7	(2.1)	1.8	0.5			#	#	
262 E - 2	(2.2)	(2.0)	0.6			#	、欠損後修正	320 F - 6	(1.4)	1.9	0.4			#	#	
263 A - 4	(1.4)	(1.5)	0.4		黒曜石	#		321 C - 1	(2.1)	(2.1)	0.5		チャート	#	#	先端部・側縫隙・基部欠損
264 A - 3	(1.4)	(1.7)	0.4			#		322 A - 2	1.9	2.1	0.4			#	#	
265 B - 1	(2.0)	(1.0)	0.5			#		323 A - 2	2.1	1.9	0.5			#	#	
266 D - 6	(2.0)	(1.6)	0.4			#		324 C - 6	2.4	2.0	0.7		黒曜石	#	#	
267 D - 5	(2.1)	(1.1)	0.3		黒曜石	#	窓部のみ	325 D - 5	2.0	(1.7)	0.6			#	#	側縫隙欠損
268 №3	3.7	1.9	0.4		チャート	I - f		326 F - 6	2.0	(1.8)	0.5			#	#	
269 D - 3	(2.3)	1.4	0.4		黒曜石	#	基部欠損	327 C - 7	2.4	1.5	0.6			#	#	側縫隙欠損
270 D - 4	2.5	1.3	0.5			#		328 B - 2	2.9	(2.1)	0.5			#	#	側縫隙欠損
271 B - 2	3.3	1.7	0.5		チャート	#		329 E - 1	2.7	(2.2)	0.6			#	#	
272 C - 6	3.2	1.7	0.4			#		330 C - 3	(2.5)	(1.9)	0.5			#	#	先端部・側縫隙欠損
273 A - 6	(2.6)	(1.0)	0.3		チャート	#	先端部・側縫隙・基部欠損	331 表 接	2.0	1.5	0.4		黒曜石	II - b		
274 E - 6	(2.5)	(1.9)	0.4			#		332 B - 3	2.5	1.3	0.4			#	#	
275 №5	(2.1)	(1.2)	0.3		黒曜石	#		333 B - 1	2.3	(1.2)	0.3		チャート	#	#	側縫隙欠損
276 B - 2	(1.6)	(1.3)	0.4			#		334 №13	(1.8)	1.3	0.4			#	#	先端部欠損
277 表 接	3.1	1.5	0.3		チャート	#	片岩閃緑加工	335 #	(2.1)	1.7	0.4			#	#	#、黒曜石調査
278 A - 1	2.8	(1.7)	0.3			#	、側縫隙欠損	336 D - 6	(2.5)	1.9	0.4			#	#	
279 A - 6	2.8	(1.7)	0.4			#	、基部欠損	337 D - 3	(2.3)	2.1	0.6		黒曜石	#	#	
280 №13	2.1	1.3	0.3		黒曜石	#		338 C - 2	(2.9)	2.2	0.5			#	#	
281 D - 5	(2.2)	2.0	0.4			チャート	先端部・電鋸欠損	339 E - 4	(2.2)	1.3	0.4			#	#	
282 D - 6	(2.4)	1.5	0.4			#		340 C - 3	2.9	(1.8)	0.4			#	#	側縫隙欠損
283 #	(2.3)	1.7	0.4			#		341 F - 6	2.6	(1.5)	0.3			#	#	
284 表 接	(2.6)	1.8	0.4			#		342 D - 4	2.6	(1.6)	0.5		黒曜石	#	#	

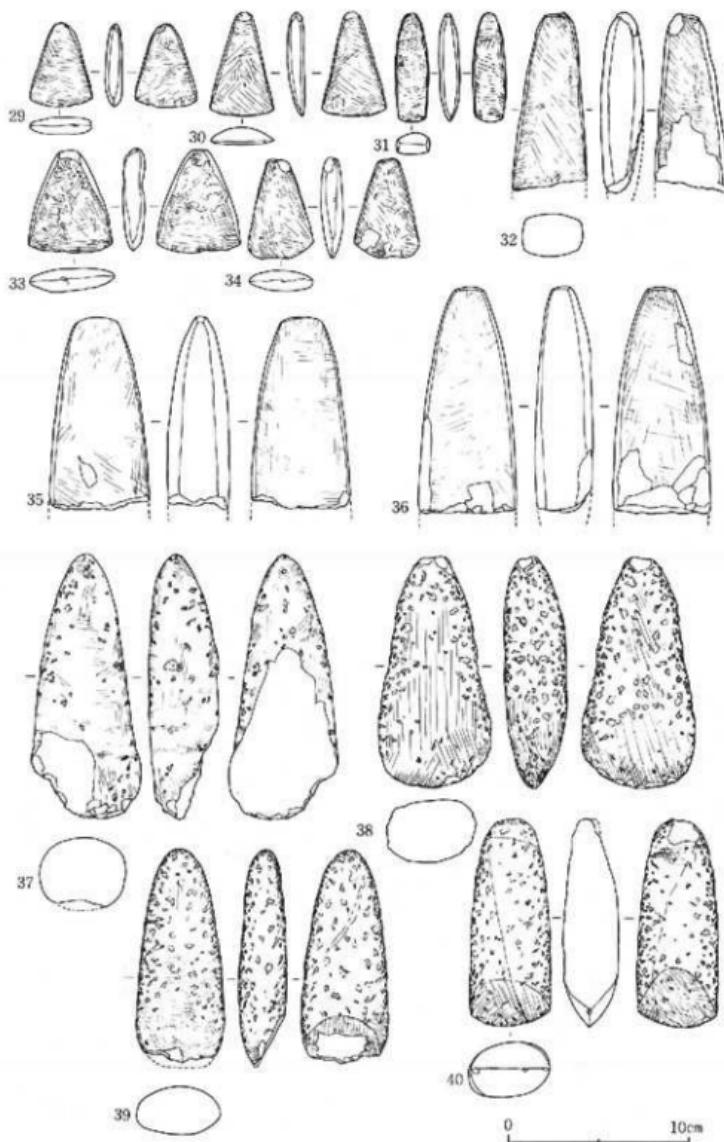
No.	出 上 地 名	地 理 的 形 状	層 厚 (cm)	重 量 (kg)	石 質	分 類	備 考	No.	出 上 地 名	地 理 的 形 状	層 厚 (cm)	重 量 (kg)	石 質	分 類	備 考
343	B - 1 (3.6)	(1.8)	0.4		チャート	H - b	先端部・側縫部欠損	401	C - 3 (2.3)	(1.8)	0.6		男 壁 石	III	先端部のみ
344	C - 3 (2.1)	(1.8)	0.3		H	H		402	F - 2 (1.9)	(1.6)	0.6		男 壁 石		
345	F - 4 (2.6)	1.2	0.4		H	H	先端部摩耗・石縫?	403	E - 4 (2.2)	(1.5)	0.4		男 壁 石		
346	E - 6 (2.0)	1.9	0.4		チャート	H - c		404	D - 1 (2.5)	(1.3)	0.5		男 壁 石		
347	E - 2 (2.0)	(1.8)	0.3		H	H	側縫部欠損	405	B - 3 (2.1)	(1.6)	0.4		男 壁 石		
348	D - 4 (1.4)	1.4	0.3		黒 壁 石	H	先端部欠損	406	黄 砂 (2.0)	(1.3)	0.4		男 壁 石		
349	表 横 (1.6)	1.7	0.3		H	H		407	A - 2 (1.9)	(1.4)	0.4		男 壁 石		
350	N - 1 (1.9)	1.9	0.5		黒 壁 石	H	側縫部欠損	408	E - 5 (1.6)	(1.1)	0.3		男 壁 石		
351	D - 2 (1.5)	(1.5)	0.3		チャート	H		409	C - 5 (1.9)	(1.1)	0.4		男 壁 石		
352	D - 3 (1.4)	1.9	0.4		H	H	先端部欠損	410	A - 6 (1.6)	(1.5)	0.3		男 壁 石		
353	H - 4 (1.4)	1.8	0.4		H	H		411	F - 1 (2.4)	(2.0)	0.4		男 壁 石		
354	表 横 (1.5)	(1.4)	0.4		黒 壁 石	H	先端部・側縫部欠損	412	C - 5 (1.5)	(1.0)	0.4		男 壁 石		
355	H - 1 (1.4)	(1.3)	0.3		H	H		413	E - 5 (1.5)	(0.9)	0.3		男 壁 石		
356	C - 6 (1.6)	(1.1)	0.3		H	H		414	D - 4 (1.6)	(0.9)	0.3		男 壁 石		
357	D - 2 (1.6)	(1.4)	0.4		H	H		415	表 横 (3.0)	(2.1)	0.7		男 壁 石		
358	D - 3 (1.4)	(1.4)	0.4		H	H		416	E - 4 (2.7)	(1.6)	0.6		男 壁 石		
359	D - 7 (1.4)	(1.2)	0.5		H	H		417	K - 6 (2.6)	(1.7)	0.5		男 壁 石		
360	灰 砂 (2.0)	(1.8)	0.3		H	H		418	C - 7 (2.6)	(1.8)	0.3		男 壁 石		
361	F - 1 (2.1)	(2.0)	0.4		H	H	先端部・側縫部欠損	419	D - 4 (2.5)	(2.2)	0.3		男 壁 石		
362	No.13 (1.7)	1.4	0.4					420	E - 1 (2.1)	(1.6)	0.4		男 壁 石		
363	C - 1 (2.4)	1.8	0.4		黒 壁 石	H - d		421	表 横 (1.9)	(1.5)	0.4		男 壁 石		
364	B - 5 (2.1)	1.7	0.4		H	H		422	E - 1 (1.6)	(1.4)	0.4		男 壁 石		
365	B - 1 (1.8)	1.4	0.3		チャート	H		423	D - 4 (1.3)	(1.2)	0.3		男 壁 石		
366	# (1.5)	1.7	0.2		H	H		424	A - 5 (2.2)	(1.5)	0.4		男 壁 石		
367	D - 2 (2.0)	1.5	0.4		黒 壁 石	H		425	C - 5 (2.1)	(1.0)	0.2		男 壁 石		
368	表 横 (1.4)	1.5	0.4		H	H		426	C - 3 (2.2)	(1.9)	0.6		黒 壁 石		先端部・基部欠損
369	B - 3 (1.7)	1.2	0.3		H	H		427	K - 2 (2.6)	(1.8)	0.4		男 壁 石		
370	F - 4 (2.0)	1.6	0.3		H	H		428	C - 3 (1.7)	(1.8)	0.4		男 壁 石		
371	C - 6 (1.9)	1.9	0.5		H	H	右縫?	429	D - 6 (1.6)	(1.3)	0.5		男 壁 石		
372	No.13 (2.1)	1.5	0.4		H	H	側縫部欠損・右縫?	430	B - 1 (2.1)	(1.4)	0.4		男 壁 石		
373	A - 5 (2.5)	1.6	0.5		チャート	H		431	F - 2 (1.4)	(1.7)	0.4		男 壁 石		
374	D - 2 (2.3)	(1.7)	0.4		黒 壁 石	H		432	C - 5 (2.1)	(1.5)	0.4		男 壁 石		
375	C - 6 (1.5)	(1.3)	0.2		H	H		433	D - 3 (1.7)	(1.4)	0.4		男 壁 石		
376	合計 (2.2)	(1.0)	1.5	0.3	H	H	先端部欠損	434	A - 6 (2.0)	(1.3)	0.4		男 壁 石		
377	B - 2 (1.2)	1.6	0.3		H	H		435	D - 2 (2.1)	(1.4)	0.4		男 壁 石		
378	A - 2 (1.9)	1.8	0.5		チャート	H		436	B - 1 (1.2)	(1.5)	0.4		男 壁 石		
379	B - 6 (2.6)	(1.4)	0.4		黒 壁 石	H	先端部・側縫部欠損	437	C - 6 (1.3)	(1.1)	0.5		男 壁 石		
380	E - 4 (2.5)	1.6	0.3		H	H	口 - e	438	E - 1 (1.3)	(1.4)	0.2		男 壁 石		
381	F - 6 (1.9)	1.5	0.3		H	H		439	表 横 (2.8)	(1.4)	0.5		チャート		
382	C - 1 (2.8)	1.7	0.3		チャート	H		440	D - 5 (1.9)	(1.9)	0.7		男 壁 石		
383	E - 5 (3.3)	2.0	0.4		H	H		441	D - 1 (2.1)	(1.9)	0.4		男 壁 石		
384	C - 6 (3.2)	1.4	0.3		黒 壁 石	H	側縫部欠損	442	E - 6 (1.0)	(1.3)	0.3		男 壁 石		
385	B - 5 (2.4)	1.5	0.3		チャート	H		443	B - 5 (1.7)	(1.1)	0.3		男 壁 石		
386	D - 1 (1.6)	(1.0)	0.3		H	H		444	B - 4 (2.2)	(1.6)	0.3		男 壁 石		
387	B - 4 (2.0)	1.2	0.4		H	H	先端部欠損	445	C - 7 (1.5)	(1.0)	0.3		側縫部のみ		
388	E - 4 (1.1)	(1.4)	0.3		H	H	先端部・側縫部欠損	446	K - 4 (1.2)	(1.3)	0.3		男 壁 石		
389	表 横 (2.7)	(1.4)	0.3		H	H	先端部のみ	447	A - 5 (3.0)	1.7	0.6		先端部のみ・尖端?		
390	B - 1 (0.8)	(0.7)	0.3		H	H		448	表 横 (2.5)	(1.2)	0.2		側縫部のみ・尖端欠損調整		
391	B - 3 (1.6)	(0.8)	0.3		H	H		449	H - 2 (2.1)	(2.4)	0.6		チャート		
392	D - 4 (1.8)	(1.4)	0.3		H	H		450	D - 1 (2.3)	(1.3)	0.3		黒 壁 石		
393	D - 1 (2.0)	(1.7)	0.2		H	H		451	A - 5 (2.1)	(0.9)	0.3		男 壁 石		
394	H - 2 (3.1)	(1.6)	0.4		H	H		452	C - 7 (1.7)	(1.9)	0.4		表 横 加工		
395	C - 6 (2.3)	(1.4)	0.3		H	H		453	F - 4 (1.2)	(1.8)	0.4		男 壁 石		
396	E - 6 (1.7)	(1.6)	0.5		H	H		454	E - 5 (2.2)	(1.6)	0.4		男 壁 石		
397	C - 4 (1.4)	(1.3)	0.5		H	H									
398	B - 1 (2.0)	(1.1)	0.3		H	H									
399	B - 2 (2.2)	(1.6)	0.3		H	H									
400	E - 6 (2.2)	(1.9)	0.6		黒 壁 石	H									



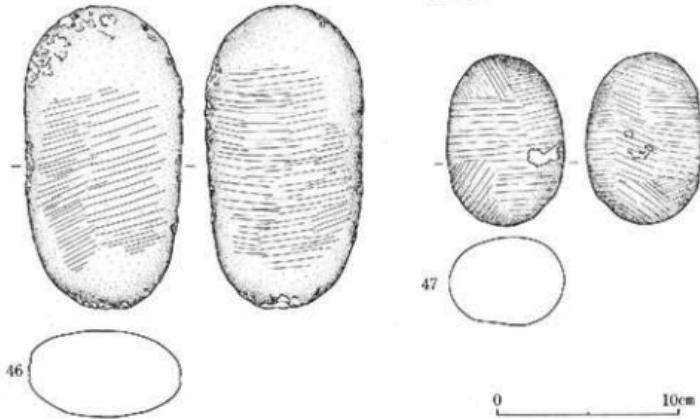
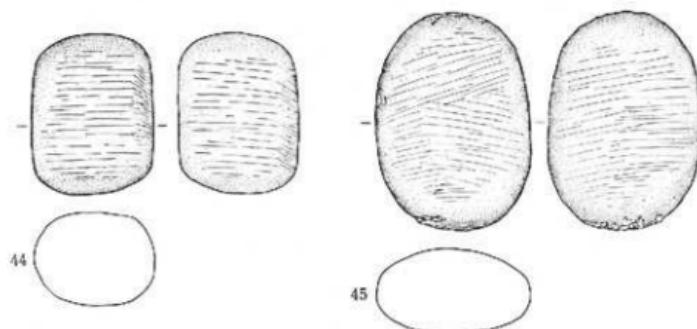
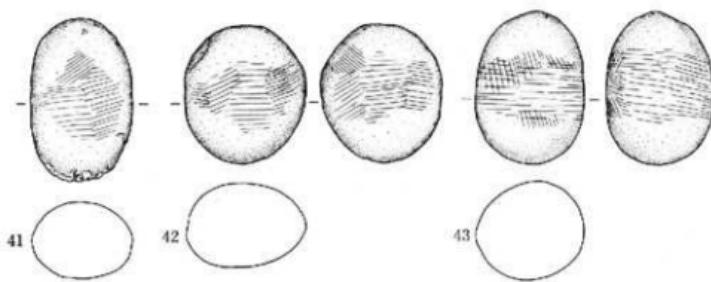
第49圖 石鏽，尖頭器，石錐



第50図 打製石斧、横刃形石器、使用・加工痕ある剥片

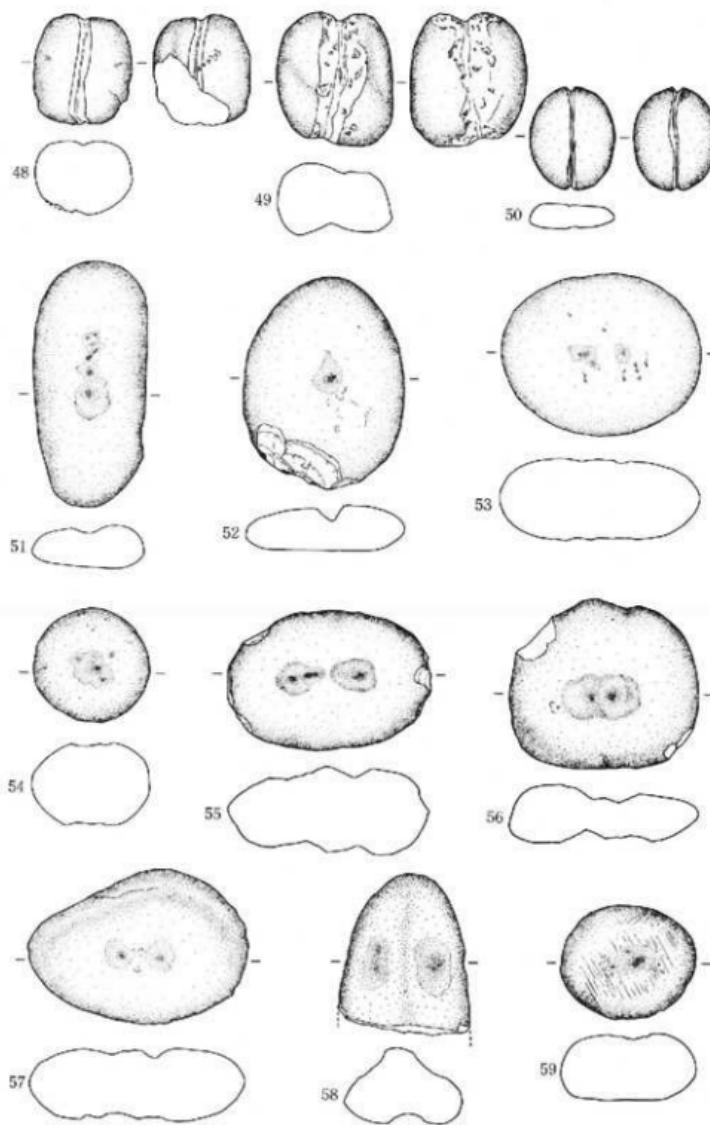


第51図 磨製石斧



0 10cm

第52圖 磨石



第53圖 石錘・凹石

0 10cm

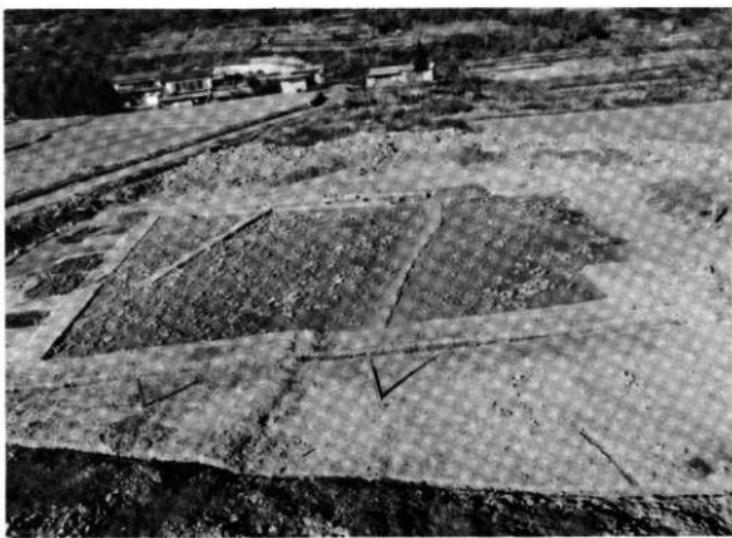
図 版

下前冲道路侧面航空写真





道路遠景（秋葉山より）



遺跡近景（南から）



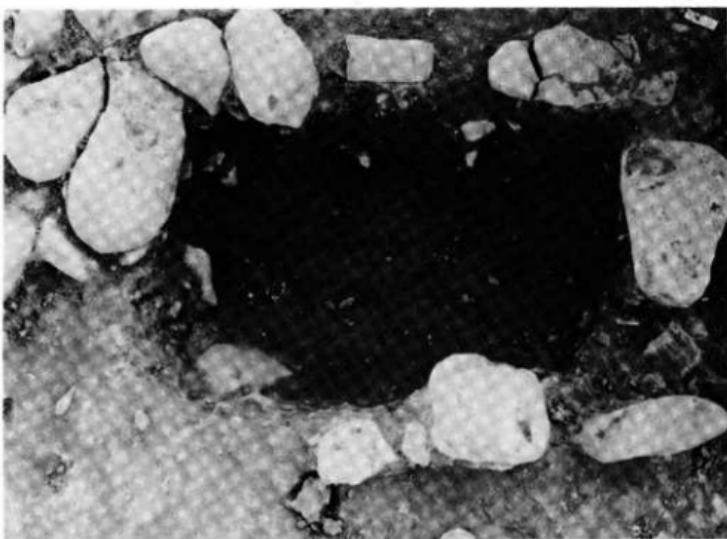
炉址 1



炉址 2



炉址 3



土壤 1



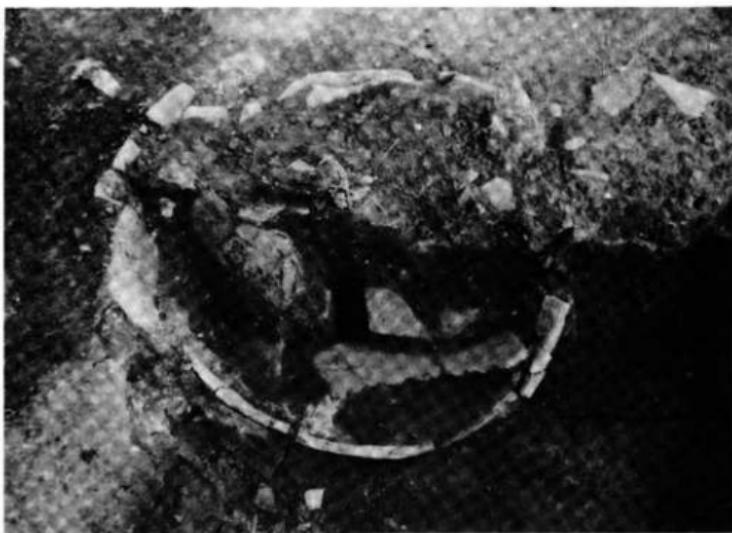
配石遺構



原石集中箇所



埋甕 1



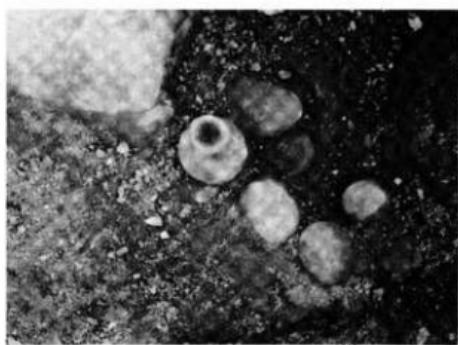
埋甕 2

圖版 6



土器出土狀態 2

土器出土狀態 3





中空土偶出土状況



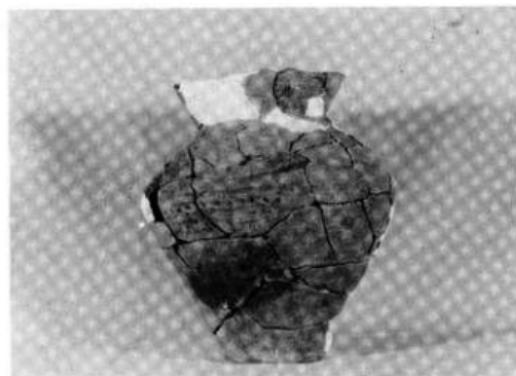
石冠出土状況  
(刃部を下に出土)



石刀出土状況



手捏小型土器

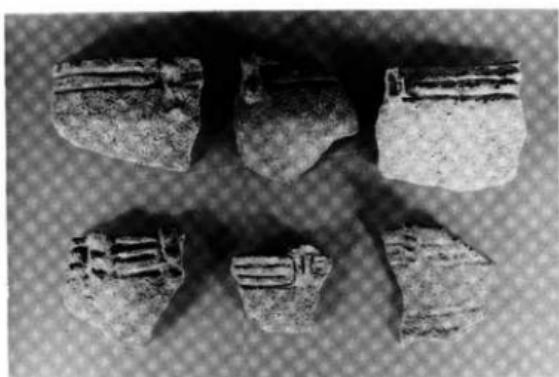


壺形土器



第28圖93

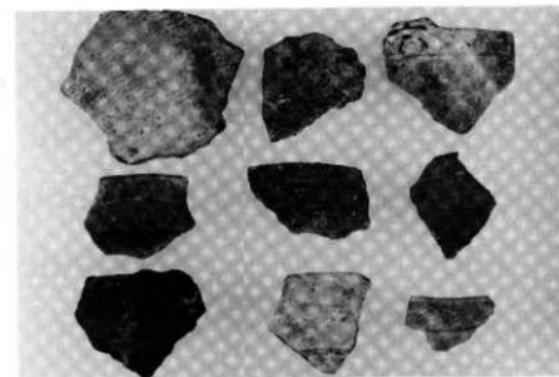
第37図  
249~254



第28図  
94~101



第28図  
102~110





第29図 131



第29図 133



第29図 126



第30図 136



第41圖  
294, 295, 296  
298, 299, 300



第40圖 289



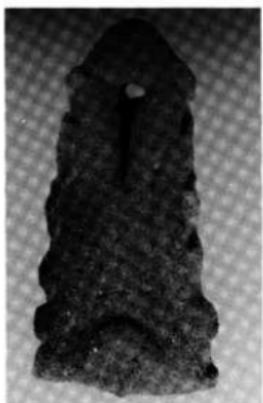
第40圖 291



第40圖 286



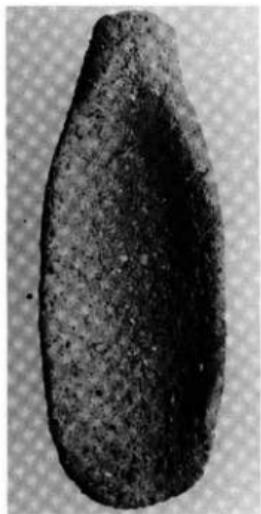
第41圖 304



←第43図311



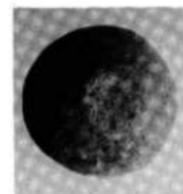
第42図308→



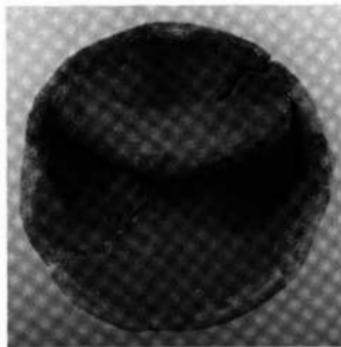
←第42図309



第42図310→

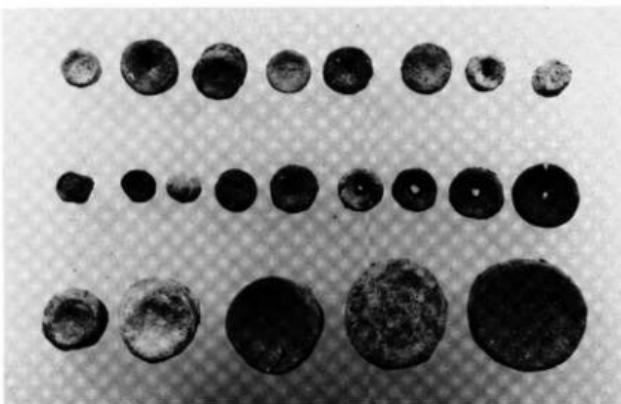


←第43図315

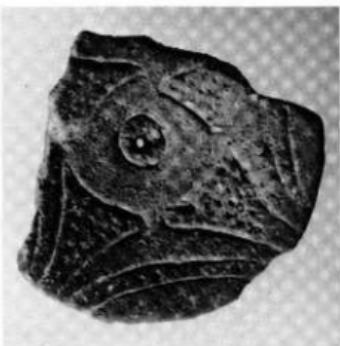


第43図313→

土製耳飾



第44圖  
1  
←



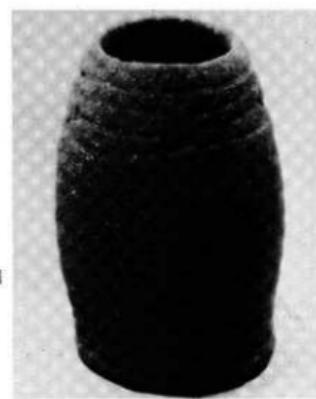
第44圖  
4  
→



第43圖  
318  
←



第43圖  
316  
→





石冠



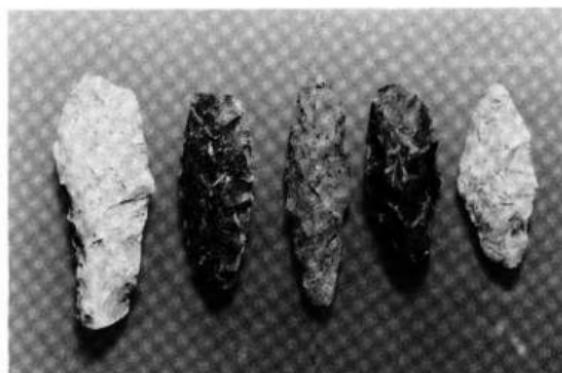
石刀·石劍·石棒



第51圖 33・34・30・31



第51図  
35~38



尖頭器



打製石斧  
横刃形石器  
使用・加工痕  
のある剥片

上田市文化財調査報告書 第16集  
**下前沖遺跡緊急発掘調査報告書**

印 刷 1981年3月20日  
発 行 1981年3月31日  
編集者 下前沖遺跡緊急発掘調査団  
発行者 長野県上田市教育委員会  
印刷所 長野県東信土地改良事務所  
信毎書籍印刷株式会社